

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告11

桜町遺跡(3次)

序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であると同時に、我が国の歴史や文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

喜多方市と会津若松市を結ぶ延長13.1kmの地域高規格道路である会津縦貫北道路は、平成8年度に都市計画道路として決定され、平成9年度からは建設省（現国土交通省）直轄事業として建設工事が進められています。この計画路線にも先人が残した貴重な文化遺産が数多く埋蔵されており、福島県教育委員会は、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、多くの遺跡等の所在を確認してきました。このため、福島県教育委員会では、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財保護のための協議を重ね、現状での保存が困難なものについては記録として保存することとして、発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、平成22年度に発掘調査を行った、湯川村に所在する桜町遺跡の第2次調査成果をまとめたものです。

平成22年度の桜町遺跡の調査は、平成21年度に引き続く第3次調査で、第3次調査で確認された弥生時代後期と平安時代の集落跡の続きが確認されるとともに、桜町遺跡では初めて中世の屋敷跡が確認されました。

弥生時代後期の集落跡の井戸跡からは漆が付着した土器が出土し、中世の屋敷跡の井戸跡からは、曲物・柄杓・箸等生活用品が出土しました。時代は異なりますが、井戸跡から出土したこれらの遺物からは、当時の生活の様子をうかがい知ることができます。

今後この報告書が、県民の皆様が文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査の実施にあたり、ご協力いただいた湯川村教育委員会、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成23年12月

福島県教育委員会

教育長 遠藤 俊博

あ い さ つ

当事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発の対象地域に所在する埋蔵文化財の調査を実施しております。会津縦貫北道路にかかる埋蔵文化財については、平成9年度の表面調査を経て、平成13年度から発掘調査を実施しております。

本調査報告書は、平成22年度に発掘調査を実施した湯川村桜町遺跡第3次調査の成果をまとめたものです。今回の発掘調査では、鎌倉時代から室町時代の堀で囲まれた館跡が見つかりました。さらに、館跡内に設けられた井戸跡からは、木製の箱や曲物、お箸など当時の日常生活の一端を物語る木製の道具が出土しました。

桜町遺跡の館跡は、会津地域において武家社会が確立するとともに館跡が急増する時期でもあります。現在まで続く、会津地域の村落風景の原型ができあがっていたことでしょう。

本報告書が歴史研究の基礎資料として利用されるばかりでなく、ふるさとの歴史を解明するための一助となれば幸いです。

最後に、今回の発掘調査にご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元の皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成23年12月

財団法人 福島県文化振興事業団

理事長 富田 孝志

緒 言

1. 本書には、平成22年度に実施した会津縦貫北道路遺跡発掘調査にかかる桜町遺跡の第3次調査の成果を収録した。

桜町遺跡：河沼郡湯川村大字桜町字千苺他 遺跡番号：422-00030

2. 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省が負担した。
3. 福島県教育委員会は、財団法人福島県文化振興事業団に発掘調査を委託して実施した。
4. 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配置して調査にあたった。

専門文化財主査 福島 雅儀 文化財主査 福田 秀生
文化財副主査 三浦 武司 嘱 託 大野 淳史

5. 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
6. 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、並びに同省東北地方整備局郡山国道事務所が製作した工事用地図を複製したものである。
7. 本書に掲載した自然科学分析については、次の機関に委託し、その分析結果および考察は巻末に付章として掲載した。

付章1 桜町遺跡から出土した木製品樹種同定 株式会社 加速器分析研究所

付章2 桜町遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定について 株式会社 加速器分析研究所

8. 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
9. 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関および個人から、協力・助言を頂いた。

湯川村教育委員会 福島県立博物館

穴澤 咏光 植村 泰徳 大越 道正 梶原 文子 菅野 和博 佐久間正明
杉浦 真琴 住田 雅和 長尾 修 永嶋 正春 中村 五郎 西本 豊弘
柳沼 賢治 横須賀倫達

用 例

1. 本文中および遺物整理に使用した略記号は次の通りである。

湯川村…UK 桜町遺跡…SKR 掘立柱建物跡…SB 溝 跡…SD
土 坑…SK 柱穴・小穴…P グリッド…G 遺構外堆積土…L
遺構内堆積土…ℓ 沼沢火山灰…NP 榛名山二ツ岳火山灰…FP

2. 遺構挿図における遺構名は、当該遺構を正式名称、その他の遺構を記号化した略称で記載している。

3. 本書における遺構実測図の用例は、以下の通りである。

- (1) 方位記号の表記がないものは、全て本書の上を真北とする。
- (2) 桜町遺跡の遺構番号は、1次調査からの連続番号である。
- (3) 縮尺は、各挿図版に示した。
- (4) 遺構内の傾斜面はⅢで表示した。
- (5) 断面図および地形図における標高は、海拔標高を示す。
- (6) 遺構外の自然堆積土はローマ数字、遺構内堆積土は、算用数字で表記した。

[例] 遺構外自然堆積土：L I・L II…、遺構内堆積土：ℓ 1・ℓ 2…

4. 本書における遺物実測図の用例は、以下の通りである。

- (1) 縮尺は各挿図版に示した。
- (2) 土器断面は、弥生土器・土師器を白ヌキ、須恵器はベタ黒とした。
- (3) 挿図中の網点は、図版ごとに凡例を示した。
- (4) 遺物番号は挿図版ごととし、文中では下記のように省略して表記した。また、掲載遺物の出土位置・層位は、右下に示している。 [例] 図28の10番の遺物…28-10

5. 本書における遺物写真で個々に付した番号は、挿図番号と一致する。

6. 引用・参考文献は、省略した。

目 次

第1章 調査経過と遺跡の環境

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と自然環境	3
第3節 歴史的環境	4
第4節 調査経過	8
第5節 調査方法	10

第2章 北区の調査成果

第1節 遺跡の分布と基本土層	11
第2節 縄文・弥生時代の遺構と遺物	15
第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物	27
第4節 中・近世の遺構と遺物	36

第3章 南区の調査成果

第1節 遺構の分布	57
第2節 掘立柱建物跡	60
第3節 土 坑	66
第4節 溝 跡	70
第5節 遺構外出土土器	71

第4章 ま と め

弥生時代の遺構と遺物について	75
----------------	----

付 章

1 桜町遺跡から出土した木製品樹種同定	123
2 桜町遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定について	130

挿図・表・写真目次

[挿 図]

図1 会津縦貫北道路位置図……………	1	図29 119・120・124号土坑……………	46
図2 桜町道跡と会津盆地北部の地形……………	4	図30 123・126～128・130号土坑……………	47
図3 桜町道跡と周辺の道跡……………	6	図31 129・131・134号土坑……………	48
図4 桜町道跡調査範囲……………	9	図32 135・136・149～151号土坑……………	49
図5 北区道構配置図(1)……………	12	図33 120号土坑出土遺物(1)……………	50
図6 北区道構配置図(2)……………	13	図34 120号土坑出土遺物(2)……………	51
図7 100号土坑・出土土器(1)……………	16	図35 66・113・115・124・125・130・149号土坑、 グリッド・ビット、木質出土遺物……………	52
図8 100号土坑・出土土器(2)……………	17	図36 39・44～46号溝跡……………	54
図9 103・112・122・132・133号土坑……………	19	図37 中近世の出土遺物……………	56
図10 弥生時代の土坑出土土器(1)……………	20	図38 南区道構配置図(西半)……………	58
図11 弥生時代の土坑出土土器(2)……………	21	図39 南区道構配置図(東半)……………	59
図12 43号溝跡出土弥生土器……………	23	図40 58号掘立柱建物跡……………	61
図13 北区出土の縄文土器……………	24	図41 59号掘立柱建物跡……………	62
図14 北区出土の弥生土器(1)……………	25	図42 60・61号掘立柱建物跡……………	63
図15 北区出土の弥生土器(2)……………	26	図43 62・63号掘立柱建物跡……………	64
図16 48・49号掘立柱建物跡……………	27	図44 58・59号掘立柱建物跡出土土器……………	65
図17 50号掘立柱建物跡……………	29	図45 137～142・144・145号土坑……………	67
図18 109・114・121号土坑……………	31	図46 143・146～148号土坑……………	68
図19 109号土坑出土土器……………	32	図47 139・143号土坑出土遺物……………	69
図20 40～42号溝跡……………	34	図48 37・48～50号溝跡……………	70
図21 奈良・平安時代の出土土器……………	35	図49 37・49・50号溝跡出土土器……………	71
図22 47号掘立柱建物跡……………	37	図50 遺構外出土遺物……………	72
図23 51号掘立柱建物跡……………	38	図51 桜町Ⅲ式土器……………	77
図24 52号掘立柱建物跡・出土土器……………	39		
図25 53～55号掘立柱建物跡(1)……………	40		
図26 53～55号掘立柱建物跡(2)……………	41		
図27 66・113・115・116号土坑……………	44		
図28 117・118・125号土坑……………	45		

[表]

表1	会津縦貫北道路関連遺跡の調査履歴	2
表2	桜町遺跡と周辺の遺跡一覧	7
表3	桜町遺跡の調査履歴	8

[写真図版]

1	調査区遠景	81
2	調査区全景	81
3	北区遠景	82
4	北区全景(1)	82
5	北区全景(2)	83
6	北区全景(3)	83
7	北区中央部	84
8	51～55号掘立柱建物跡周辺	84
9	100号土坑全景	85
10	100号土坑細部	85
11	103・112・132号土坑	86
12	122・133号土坑	87
13	43号溝跡・ピット	88
14	48・49号掘立柱建物跡全景	88
15	48・49号掘立柱建物跡細部	89
16	50号掘立柱建物跡全景	90
17	50号掘立柱建物跡細部	90
18	109・114号土坑, 40・41号溝跡	91
19	42号溝跡	92
20	52～55号掘立柱建物跡周辺	92
21	52号掘立柱建物跡全景	93
22	52号掘立柱建物跡細部	93
23	53号掘立柱建物跡全景	94
24	53号掘立柱建物跡細部	94
25	54号掘立柱建物跡全景	95
26	54号掘立柱建物跡細部	95
27	55号掘立柱建物跡全景	96
28	55号掘立柱建物跡細部	96

表4	土坑一覧	73
----	------	----

表5	桜町遺跡(3次)出土木製品樹種 同定・年代測定一覧	74
----	------------------------------	----

29	66・113・115号土坑	97
30	116～118・125号土坑	98
31	119・120・123・124号土坑	99
32	126・127・129・131・135・ 155・161号土坑	100
33	39・44～46号溝跡	101
34	南区遠景(1)	102
35	南区遠景(2)	102
36	南区全景	103
37	58・59号掘立柱建物跡周辺	103
38	58号掘立柱建物跡全景	104
39	58号掘立柱建物跡細部	104
40	59号掘立柱建物跡全景	105
41	59号掘立柱建物跡細部	105
42	60号掘立柱建物跡全景	106
43	60号掘立柱建物跡細部	106
44	61号掘立柱建物跡全景	107
45	61号掘立柱建物跡細部	107
46	62号掘立柱建物跡全景	108
47	62号掘立柱建物跡細部	108
48	63号掘立柱建物跡全景	109
49	63号掘立柱建物跡細部	109
50	137～140号土坑	110
51	141～143・145・146号土坑	111
52	144・147・148号土坑, 37・48～50号溝跡	112
53	100号土坑出土土器(1)	113
54	100号土坑出土土器(2)	114

55	103・112・132号土坑出土土器	114	60	北区出土土器(1)	117
56	103・112号土坑出土土器	115	61	北区出土土器(2)	118
57	122・132・133号土坑出土土器	115	62	渡来銭	118
58	41・43号溝跡出土土器	116	63	木製品	119
59	43号溝跡出土土器	116	64	出土土器細部	120

付章 1

[表]

表 1	樹種同定結果	125	表 2	器種別種類構成	126
-----	--------	-----	-----	---------	-----

[写真図版]

図版 1	木材(1)	127	図版 3	木材(3)	129
図版 2	木材(2)	128			

付章 2

[表]

表 1		132	表 2(2)		133
表 2(1)		132	[参考] 暦年較正年代グラフ		134~135

第1章 調査経過と遺跡の環境

第1節 調査に至る経緯

1 会津縦貫北道路の概要 この道路は、会津盆地北部を南北に貫く基幹交通路として計画されている。喜多方市関柴町を起点として湯川村を経て、会津若松市高野町を終点とする全長13.1kmの高規格道路として計画されている。起点の関柴町では大峠トンネルから山形県米沢市に続く国道121号線と連結し、終点の高野町では磐越自動車道会津若松ICと連絡することになっている。

平成8年に都市計画路が決定され、翌年度から建設省（現国土交通省）の直轄事業として工事が進められている。平成21年度には、湯川北ICと塩川ICを結ぶ約3.2kmの区間で、一部の供用が開始された。

この道路が完成することにより、会津北部は高速道路網に組み込まれることになる。この結果、会津盆地北部の交通利便性が飛躍的に向上し、日常生活圏の拡大、観光発展をはかるとともに、交通渋滞を緩和することによる炭素排出量の削減を意図している。

2 平成22年度までの遺跡調査経過 事業計画の策定を受けて、建設省と福島県教育委員会の間で、埋蔵文化財の保護に対する協議を実施している。この結果を受けて、福島県教育委員会では、会津縦貫北道路建設に関する埋蔵文化財の表面調査を平成9年度から開始し、さらに平成12年度からは試掘調査、続いて平成13年度からは、事業地内における遺跡の発掘調査を開始した。

会津縦貫北道路建設にともなう工事では、日橋川架橋工事の工程負担が大きくなると予想された。このため遺跡の試掘調査では、この付近の対応を優先させて行うこととし、喜多方市塩川町遠田地

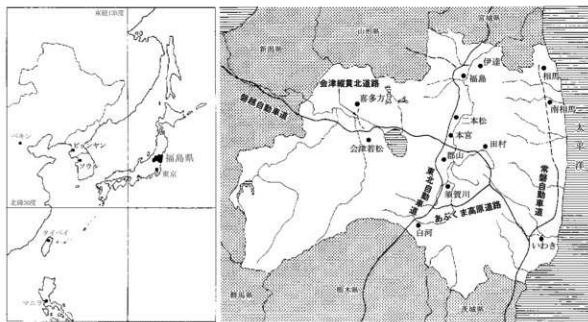


図1 会津縦貫北道路位置図

第1章 調査経過と遺跡の環境

区の麻生館遺跡・荒屋敷遺跡から開始した。この後は、条件整備の状況により順次、試掘調査を実施して、保存の必要な範囲を確定している。

発掘調査は、平成13年度に喜多方市塩川町麻生館遺跡の6,200㎡、荒屋敷遺跡の9,700㎡を対象に開始した。この調査では、麻生館遺跡では平安時代の建物跡と中世の館跡の一部が確認された。また、荒屋敷遺跡では、平安時代後期の遺構と遺物を確認した。荒屋敷遺跡では、その後平成14・15・16年度にわたり継続した調査を実施して、『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告書2～6』として報告した。この遺跡からは、鎌倉時代の中国産陶磁器が多数出土している。遺跡は日橋川北岸にあたり、会津平における水運拠点のひとつと考えられている。

平成17年度から20年度には、喜多方市高堂太遺跡の調査を実施した。室町時代の館跡内部の区画や建物配置が明らかになるとともに、中国産磁器と銅製提下を埋納した地鎮遺構も検出された。室町時代の館における生活を語る遺跡である。高堂太遺跡の南部湿地からは、平安時代後期の木製品が多量に出土した。木製品は、当時の生活で重要な日常品であったが、その具体的な一端がこの調査によって判明した。『会津縦貫北道路遺跡発掘調査6～9』として報告した。

平成19年度には、湯川村沼ノ上遺跡の調査を実施して、縄文時代後期の池状遺構を検出した。自然河川を掘削して連続する人口池を設けたものである。池からは、縄文時代後期前半の土器片とともに、大型樹木の碎材が出土した。これに加えて、自然河川の上層部からは、鎌倉時代の木製品が多量に出土した。この遺跡は、日橋川の南岸に当たり、北岸の荒屋敷遺跡と対面している。中世には、南岸にも水運拠点となるような遺跡が存在していた可能性をうかがわせる遺物である。

桜町遺跡の調査は、平成16年度の第1次調査を経て、平成21年度の第2次調査から本年度の第3次調査と継続している。1次調査では、弥生時代の周溝墓と平安時代の掘立柱建物群が検出された。弥生時代の周溝墓は、会津平で始めて確認された遺構である。2次調査では、弥生時代から古墳時代直前までの周溝墓が検出された。四隅切れ周溝墓から前方後方形、前方後円形に変化する様子が明らかになった。これとともに、弥生時代の掘立柱建物跡や井戸跡も検出された。これらに伴い地元の土器や北陸・関東地方の土器も出土して、この時代における地域間関係を分析する良好な資料を提示した。さらに農耕具や掘立柱建物部材も出土して、会津平におけるそれまでの弥生時代集落像に大きな変更を迫る成果を得ることができた。平安時代の大型掘立柱建物群も検出されている。本年度の中世遺構群とあわせて、桜町遺跡の調査成果は、会津平の歴史を知る上で多くの知見を提供したといえよう。

(福島)

表1 会津縦貫北道路関連遺跡の調査履歴

遺跡名(発掘調査回数)	調査内容	調査年度	報告書名
麻生館遺跡	分布	2000年	県内遺跡分布調査報告7
	発掘	2001年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告1
荒屋敷遺跡(1～5次)	分布	2000年～2002年・2004年	県内遺跡分布調査報告8・9・11
	発掘	2001年～2004年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2～6
高堂太遺跡(下高棚館跡)(1～4次)	分布	2004年～2006年	県内遺跡分布調査報告12～13
	発掘	2005年～2008年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告6～9
沼ノ上遺跡	分布	2002年・2007年	県内遺跡分布調査報告9
	発掘	2007年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告8
桜町遺跡(1～3次)	分布	2003・2004・2008・2010年	県内遺跡分布調査報告10・11・15・18
	発掘	2004・2009・2010年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告5・10・11

第2節 遺跡の位置と自然環境

会津地域のうち、会津盆地の低位部は、周囲の山岳地帯と区別してとくに会津平と呼ばれている。湯川村は会津盆地の中央部、会津若松市の北西に接している。桜町遺跡は河沼郡湯川村大字桜町字千苅他に所在している。桜町遺跡は湯川村の南東部に位置し、瀬川（せせなぎがわ）の西岸に形成された自然堤防上に立地している。近年の圃場整備により、集落地区以外は平坦な水田になっている。遺跡の分布調査では、東西800m、南北800m程度の範囲で、弥生時代と平安時代の遺物や遺構の存在が確認されている。

会津盆地は、東北地方を南北に貫く奥羽山脈の西側に位置している。南北と東は周囲を険しい山岳地帯に阻まれている。これに対して西方は、阿賀川を介して新潟方面と深く結びついた。このため、東北地方南部にありながら、北陸方面と結びついた風土を形成してきた。

会津盆地の気候は、日本海岸気候に属している。夏は湿潤多雨な高温で、東北地方太平洋岸で冷害をもたらすヤマセの影響が及ぶことは少ない。また冬季は、北陸から東北に連なる豪雪地帯に含まれ、3月中は会津平の根雪も完全に融けることは少ない。こうした環境にある会津平は、東北地方でも有数の米どころ、豊かな土地である。

会津盆地は、河川とその周辺に沿って帯状にのびる氾濫原、河川間の平坦な段丘、扇状地に大きく分けることが出来る。会津平の河川は、猪苗代湖から西に向かって流れる日橋川を境にして、北部の諸河川は南に向かい、南部の諸河川は北に向かって流れて会津平の西端中央部で阿賀川に合流して、日本海に向かって流れ出る。

会津盆地に特徴的なことは、阿賀川が盆地から流出する先に、大規模な河岸段丘が発達していることである。この河岸段丘は、沼沢火山噴出物起源のハラール堆積物が基盤となっている。この地層は、場所により厚さ20mにも達している（山元2006）。したがって地盤は脆弱で、地すべりや山腹崩落の発生により自然ダムが出現しやすい地形・地質となっている。さらに、会津盆地の西縁には活発な活断層がり、地震による阿賀川の閉塞や堰止湖の形成が繰り返されたらしい。

1611年の会津大地震では、活断層西部の隆起と阿賀川峡谷の崩落が重なり、会津盆地に山崎新湖が出現して、盆地内の15ヶ村が水没したという（寒川1987）。また、坂下町中平遺跡では、古墳時代中期の集落が水成堆積による砂層で厚く覆われていた。会津平では繰り返し大きな湖沼が発生したことを示す痕跡である。

会津平は、平坦な盆地である。河川の出口は西端の一点である。ここが塞がれば、盆地内に湖ができる。それだけでなく阿賀川はたびたびの氾濫を繰り返し、会津平の地を豊かにするとともに、大きな災害をもたらした。縄文時代後期以前に会津平で遺跡数が極めて少なく、弥生時代後期における集落の増加や古墳時代中期における古墳造営の途絶も、このような自然環境と結びついた現象との関連を考慮すべきであろう。（福島）

第3節 歴史的環境

桜町遺跡3次調査においては、中世～近世に属する館跡を確認した。そのため、本節では桜町遺跡周辺に所在する中世の遺跡を中心に記述する。なお、弥生時代～古代にかけての歴史的環境については、『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告10』において記載した。

湯川村は、『湯川村史』の編集や『福島県遺跡地図』作成が行なわれているが、周辺自治体の遺跡数から勘考するに、村内においてさらなる遺跡数の増加が予想される。寛文六（1666）年に記された『会津風土記』には、湯川村と会津若松市河東町は河沼荘と称せられ、古代の郷名は不明とされている。文禄三（1594）年の『蒲生領高目録』においても阿賀川以東は河沼郡と記載されている。

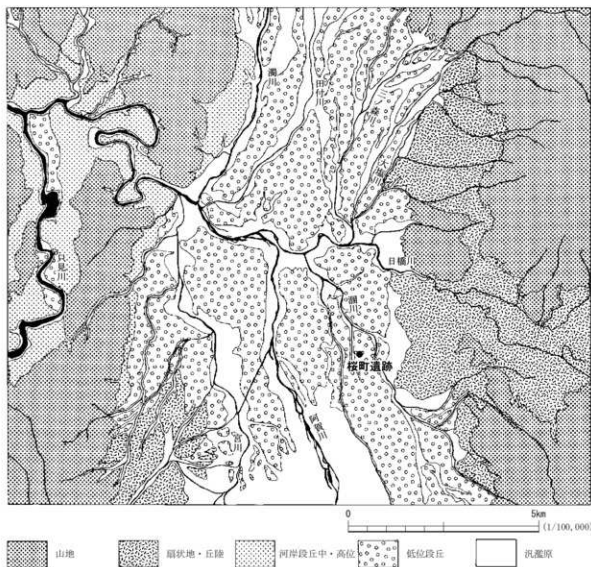


図2 桜町遺跡と会津盆地北部の地形

弥生時代以降になると、盆地内の遺跡数は増加する。桜町遺跡（1）の2次調査例が示すように、他の地域に先駆けて周溝墓など「倭国的な弥生社会」が受容される。古墳時代前期では、大規模な古墳が東北地方でも一早く築造される。ヤマト王権と会津地域との強い結びつきが看取される。古墳時代中期では、国指定史跡の喜多方市古屋敷遺跡が豪族居館跡として知られている。

会津盆地では古墳時代後期から奈良時代に属する遺跡は少ないが、平安時代になると遺跡数が激増する傾向が認められる。古代の会津郡衙には、桜町遺跡から東に2kmに所在する会津若松市河東町郡山遺跡が比定されている。その他の集落遺跡には、矢玉遺跡・上吉田遺跡や屋敷A遺跡（78）がある。また、平安時代に会津郡から分治された耶麻郡の郡衙関連施設として、喜多方市塩川町に所在する内屋敷遺跡（21）や鏡ノ町A・B遺跡がある。

古代末から中世初頭の遺跡では、荒屋敷遺跡（16）があげられる。日橋川の水運を担う川湊としての機能が想定される。さらに、古代末期の城館跡としては、国指定史跡の陣が峰城跡が有名である。

平安時代後期の会津地方は、磐梯町恵日寺と越後国城氏により統治されていたが、平氏に組み入るこの2大勢力は信濃での横田河原合戦（1181年）において、源氏の木曾義仲に敗れ衰退する。その後、文治五（1189）年には、源頼朝の御家人である佐原義連が会津の地を拝領したとされる。二代目盛連の時に諸子に会津領をそれぞれに配分して治めさせたようである。長男経連は猪苗代氏を名乗り、猪苗代城を居城としている。次男広盛は北田氏となり、湯川村史跡に指定されている北田城跡（3）を築城している。三男盛義は藤倉氏を名乗り藤倉館を本城とした。四男光盛は草名氏、五男盛時は加納氏、六男時連は新宮氏を名乗り、各所領を預かった。喜多方市の国指定史跡に登録されている新宮城跡は時連の築造と伝えられている。

佐原氏の会津支配が本格的になるのは、室治合戦（1247年）によって三浦宗家の滅亡後、さらには中先代の乱（1335年）以降と考えられている。これ以後、分国支配が強まり各地に城館が造られ、さらに城館を中心とした集落が営まれるようになる。戦国時代には各地で戦乱が起こるが、草名氏は16世紀初頭までに会津地方を支配下に置き、南奥地方の有力な戦国大名へと成長した。「福島県の中世城館跡」（福島県教育委員会1988）によれば、13～16世紀の遺跡は城館跡を中心として、会津盆地内に多数点在している。会津縦貫北道路建設に関連して発掘調査を行った麻生館跡（15）や下高館跡、さらには浜崎城跡（2）・葦川館跡（5）・貝沼館跡（17）・沖館跡（23）などの平城・平館がある。その後、天正十七（1589）年に摺上ヶ原の戦いにおいて草名義広は伊達政宗に敗れ、常陸の佐竹氏のもとへ敗走している。政宗は金上・三橋・塩川を重臣片倉景綱へ安堵している。その時に手がけたのが小十郎館（32）とされる。

伊達政宗による会津支配は長くは続かなかった。惣無事令違反や小田原攻めの遅参を理由に、豊臣秀吉の奥州仕置によって会津・安積・岩瀬を没収された。旧草名領の会津領は蒲生氏郷に新封された。さらに会津領は上杉景勝から、関ヶ原の戦い以後には蒲生秀行・忠郷、加藤嘉明・明成へと領主が変遷している。この時期の遺跡としては、草名氏以降上杉氏に至るまで改修を続けた向山羽

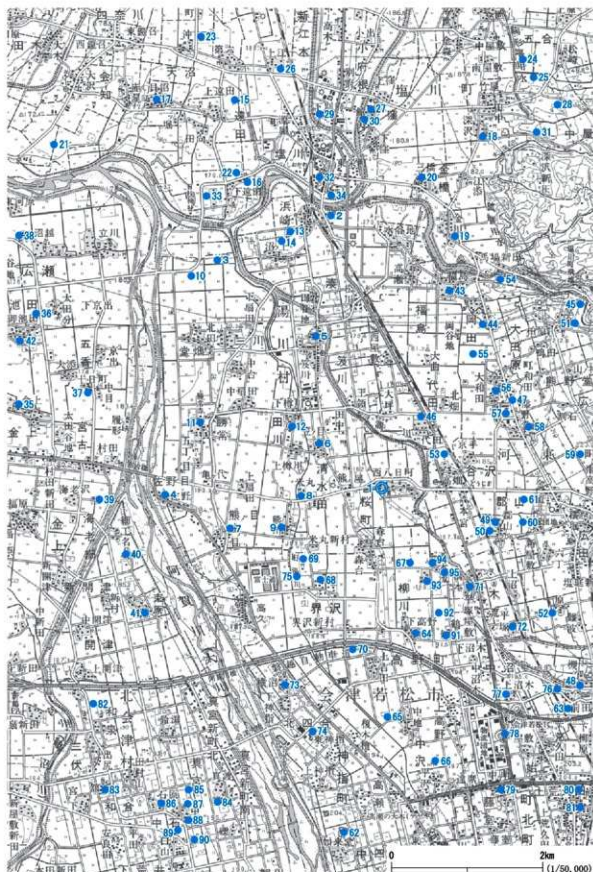


図3 桜町遺跡と周辺の遺跡

表2 桜町遺跡と周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	備考(文庫)	No.	遺跡名	種別	備考(文庫)
1	桜町遺跡	弥生集落・墳墓、平安集落、中世の城跡跡	『会津』10、本書	49	北原遺跡	中世の城跡跡	『地誌春樹町山村』
2	高崎城跡	中世・近世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』、『弘明城址図説』	50	畑田遺跡	中世の城跡跡	
3	北田城跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』、『坂田町史』、『北田城跡』(高田社、1981)	51	安島宮跡(安島山)	中世の城跡跡	『会津鑑』、『古事記』、『河東町史』
4	西野遺跡	中世の城跡跡	『古事記』、『藤川村史』	52	足利遺跡	中世の城跡跡	
5	野上遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』	53	武蔵村宮跡(武蔵村)	中世の城跡跡	
6	五ノ目遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』	54	堀村遺跡	中世の城跡跡	『会津鑑』、『古事記』、『野上家系図』、『会津若松111』
7	中ノ目遺跡	中世の城跡跡	『会津鑑』、『古事記』	55	大和山遺跡	中世の城跡跡	『白河町史』、『藤原山田郡』、『新編』、『河東町史』
8	米丸遺跡	中世の城跡跡	『会津鑑』、『古事記』	56	大和田遺跡	中世の城跡跡	『古事記』、『河東町史』
9	櫻川遺跡	中世の城跡跡	『藤川村史』、『飯氏系図』	57	熊野堂遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『河東町史』
10	堂原遺跡	中世の城跡跡	『古事記』、『藤川村史』	58	高松遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』
11	佛堂寺薬師堂	中世の社寺跡	『藤川村史』	59	藤野野宮跡	中世の城跡跡	
12	鎌倉寺跡	中世の社寺跡	『新編』	60	中屋敷遺跡	中世の城跡跡	『明石城址』、『河東町史』、1977、『地誌春樹町山村』
13	高崎城跡	中世の城跡跡	『会津鑑』	61	明石城跡	中世の城跡跡	『明石城址』、『河東町史』、1977、『地誌春樹町山村』
14	沼ノ上遺跡	縄文・中世の集落跡	『会津』	62	神倉遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』、『古津島人』
15	熊生 熊生遺跡(熊生山)	平安時代の集落跡・中世の塚	『会津』	63	熊の塚供養墓群	中世の塚	
16	板屋敷遺跡	縄文・古墳・平安・中世の集落跡	『会津2～8』、『加川町史』10・13』	64	下高野遺跡	中世の城跡跡	
17	日田遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『書家新田田見隠書』	65	中地遺跡	中世の城跡跡	『新編』
18	津沢・平塚遺跡	中世の城跡跡	『新編』	66	平沢宮跡(平沢遺跡)	中世の集落跡・城跡跡	『新編』、『会津若松96』
19	金川遺跡	中世の城跡跡		67	西木流石遺跡	中世の集落跡	『会津若松96』
20	三輪遺跡	中世の城跡跡	『若狭八幡宮長編』、『新編』、『会津鑑』、『古事記』	68	荒沢遺跡	中世の城跡跡	
21	内蔵敷遺跡	古墳・近世集落跡	『加川町7』、『12』	69	芥沢遺跡	中世の城跡跡	
22	三上田遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』	70	上田田遺跡	中世の集落跡	『会津若松96』
23	赤巻遺跡(赤ノ上遺跡)	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『加川町7』、『書家新田田見隠書』	71	木流遺跡	中世の城跡跡	
24	南原遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』	72	平塚遺跡	中世の城跡跡	『新編』
25	小磯遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『古事記』、『書家新田田見隠書』	73	楯沼遺跡	中世の城跡跡	
26	上江遺跡	中世の城跡跡	『新編』	74	イキテ七宝寺	中世の社寺跡	
27	丹波遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』	75	西館跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』
28	駒込遺跡	中世の城跡跡		76	中田田遺跡	中世の城跡跡	
29	沼田遺跡	中世の城跡跡	『古事記』	77	沼木遺跡	中世の城跡跡	『会津鑑』、『古事記』
30	上津原遺跡	中世の城跡跡	『新編』	78	飯敷入遺跡	奈良・古墳・平安時代、中世の集落跡	『会津若松30・94』、『熊鷹道12』
31	竹の内遺跡	中世の城跡跡		79	中ノ明遺跡	中世の城跡跡	『会津鑑』、『古事記』
32	小ノ手遺跡	中世の城跡跡	『新編』	80	鈴木屋遺跡	中世の城跡跡	『新編』
33	新原遺跡	中世の城跡跡	『新編』	81	上原久保遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』
34	相木城址	中世の城跡跡	『若狭八幡宮長編』、『新編』、『会津若松77』	82	相原遺跡	中世の城跡跡	
35	金ノ上遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『河原町町史』、『会津下町史』	83	田村川遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』
36	熊田山ノ神遺跡	平安時代・中世の集落跡	『坂下14』	84	高野遺跡	中世の城跡跡	『新編』
37	中田塚塚	中世の塚		85	平石南町遺跡	中世の城跡跡	
38	古高遺跡(高ノ上)	平安時代・中世の集落跡	『新編』、『会津鑑』、『坂下30・37』	86	石原遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』
39	海老沢遺跡	中世の城跡跡	『新編』	87	北原遺跡	中世の城跡跡	
40	堀上名遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』	88	粟積遺跡	中世の城跡跡	
41	塚原遺跡	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『塚原村社寺誌』、『会津下町史』	89	中館遺跡	中世の城跡跡	
42	相田遺跡	中世の城跡跡		90	上館遺跡	中世の城跡跡	
43	岳の館跡(岳村館)	中世の城跡跡	『新編』、『会津鑑』、『古事記』	91	福引入遺跡	奈良・平安時代の集落跡	
44	熊鷹遺跡	中世の塚跡		92	観音宮遺跡(大久保遺跡)	奈良・平安時代の集落跡	『会津若松96』
45	熊鷹堂跡	平安・中世の社寺跡		93	西木流A遺跡	奈良・平安時代の集落跡	『会津若松96』
46	赤木の館跡(赤田村館)	中世の城跡跡	『会津鑑』、『古事記』、『新書山本系図』	94	西木流C遺跡	奈良・平安時代の集落跡	『会津若松96』
47	大寺遺跡	中世の社寺跡		95	西木流D遺跡	奈良・平安時代の集落跡	
48	滝正寺跡	中世・近世の社寺跡		96	郡山遺跡	平安時代の集落跡	『河東町史』、『15』、『会津若松109』、『114』、『115』、『116』

『会津』 会津県東北遺跡発掘調査報告書 『会津若木』 国営会津若木水利用事業団遺跡発掘調査報告書 『熊鷹道』 熊鷹道発掘調査報告書 『河東町史』 河東町発掘調査報告書 『加川町』 加川町発掘調査報告書 『坂下』 会津下町発掘調査報告書 『新編』 新編会津鑑上記 『古事記』 会津古事記 『会津若松』 会津若松発掘調査報告書 『河東町』 河東町発掘調査報告書

第1章 調査経過と遺跡の環境

黒山城や上杉景勝の治世に築城を試みた幻の城と呼ばれる神指城跡(62)がある。2代将軍徳川秀忠の四男保科正之が入封し、以後保科氏は松平姓を名乗る。会津松平藩は戊辰戦争・明治維新を向かえる。幕末頃までには、笈川村と勝常村と堂島村(会津若松市河東町)の一部を合わせて笈川組と称し、塩川代官所の支配に属した。

明治22年の町村制が実施され、その後幾度かの境界変更を経て笈川村と勝常村は昭和32年に合併し、現在に至る湯川村となった。近年の湯川村は、河川改修及び国道や会津縦貫北道路などの交通網も整備され、会津若松市に近接した利便性が高い地域のひとつとなっている。また、農耕地の約9割が水田で、今日では「会津湯川米」と称するブランド米の産地として有名である。(三浦)

第4節 調査経過

桜町遺跡は、平成9年の分布調査によって発見された。平成15年度に試掘調査を実施し、8,200㎡を保存対象範囲とした。この結果は、『県内遺跡分布調査報告10』として報告した。平成16年度には、八日町集落西部で約25,500㎡を対象に試掘調査を実施した。弥生時代と平安時代の遺構・遺物が確認された。この成果は、『県内遺跡分布調査報告11』として報告した。平成20年度に実施した試掘調査では2,500㎡の保存範囲が確認された。その結果は、『県内遺跡分布調査報告15』に報告した。また本年度は、路線の設計変更に伴い路線西端に沿って細長い範囲を対象に試掘調査を行った。その結果、150㎡の保存範囲が追加され、『県内遺跡分布調査報告17』に報告した。

桜町遺跡の発掘調査は、平成16年度に1次調査、平成21年度に2次調査を実施した。今年度は4月12日に関係機関による現地協議を実施し、調査対象範囲と事業計画を確認した。本年度の調査対象範囲は、南北の2箇所に分かれている。北部は2次調査区の東端から県道会津坂下河東線までの5,000㎡である。南部は1次調査区西端と2次調査区東端に挟まれた6,000㎡である。また南部の工事用仮設道路は、6月末日までに工事側が撤去することが決められた。そこで財団法人福島県文化振興事業団は職員4名を配置し、北部から発掘調査に着手することとした。

遺跡調査部では、4月1日から発掘調査にかかる諸手続きを進め、4月19日から現地作業を開始した。5月までは調査事務所の設置や駐車場の造成などの条件整備を行い、引き続き北部の表土除

表3 桜町遺跡の調査履歴

調査区分	調査年	調査面積 (保存面積)	報告書名(刊行年)	備考
表面調査 分布調査	1997年(平成9年)	77,900㎡	県内遺跡分布調査報告4(1998年)	
	2003年(平成15年)	8,200㎡	県内遺跡分布調査報告10(2004年)	
	2004年(平成16年)	25,800㎡	県内遺跡分布調査報告11(2005年)	
	2008年(平成20年)	2,500㎡	県内遺跡分布調査報告15(2009年)	
	2010年(平成22年)	150㎡	県内遺跡分布調査報告18(2011年)	
発掘調査	2004年(平成16年)	4,300㎡	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告5(2005年)	
	2009年(平成21年)	11,200㎡	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告10(2011年)	
	2010年(平成22年)	11,000㎡	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告11(2011年)	



図4 桜町遺跡調査範囲

去を開始した。5月12日には、10名の作業員を雇用して、周辺整備や発掘機材の準備を開始した。さらに6月1日からは45名の作業員を追加し、北部の遺構検出作業を進めた。

北部は八日町集落の西端にあたり住宅が集中していた場所であるため、自然地形の改変や居住に伴う攪乱穴が数多くあり、表土除去作業に多くの時間を費やすことになった。6月になり遺構検出が本格化して、中世後期の柱穴群や土坑・溝跡が複雑に重複している状況が判明した。この遺構を確認する必要から、近現代の集落に伴う攪乱の処理を進めた。なお、本年度に発掘調査の対象範囲とした2次調査区西端の工所用側道部分(1,000㎡)については、本年度の調査範囲から除外した。7月からは、工所用道路の撤去を受けて、南部の表土除去を開始した。この地区は、近年の圃場整備により、水田に区画された場所である。遺構面は削平され、遺構の多くは失われていた。

7月から10月にかけて、北部では調査は順調に進み、中世後期の屋敷跡が次第に明らかになってきた。多くの柱穴とともに、土坑や井戸跡が検出され、曲物や木器、渡来銭など中世特有の遺物が出土した。南部の調査は、8月後半から本格化した。近世の溝跡と平安時代前半の土坑や掘立柱建物跡などが検出された。9月16日に遺跡全体の空撮を行った。

11月4日に関係機関3者で、調査成果を確認した。11月8日には北部から埋め戻しを開始した。11月16日には、機材保管庫を残し、事務所・休憩用プレハブは11月25・26日に撤去した。12月1日には、本年度の現地作業をすべて終了した。(福 島)

第5節 調査方法

本年度のグリッド設定は、1次調査以来の基準点を継承している。基準原点は、遺跡の北西側にあたる世界測地系のX座標173,000、Y座標5,400である。表土の除去作業は重機を用いた。住宅跡地では、建物基礎上部・整地土の除去を行った。水田部分では、耕作土の除去にとどめた。

遺構の掘り下げに際しては、各遺構の軸線に対応させて土層観察用畦を設定して掘り進めた。ただし小型の掘立柱建物跡などは、柱穴が狭いことから、断面観察から深さと大きさを確認するために半裁した。また必要に応じて、土壌分析や微細遺物の分析も行った。

遺構の平面図は、調査区全体を縮尺1/40を基本に手作業で作成した。土層断面図は、縮尺1/20を基本に作成した。報告書に掲載した遺構の縮尺は、対象の大きさに合わせて掲載した。土層の色調は、『新版標準土色帳』を参考に記載した。遺跡の記録写真は、35ミリカメラを中心に、モノクロームとリバーサルフィルムを用いた。また必要に応じて、645カメラのリバーサルフィルムを用いて撮影した。遺物の写真は、645カメラを使用して、リバーサルフィルムで撮影した。報告書に示した遺物の縮尺は、1/2・1/3・2/3を基本とし、大型木製品については、適宜に縮尺を変えた。

発掘調査報告書の作成は、財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部で行った。実測図のトレースは、遺構・遺物ともパソコンによるデジタル作業で行なった。発掘調査の記録、および出土資料は、財団法人福島県文化財センター白河館に保管する予定である。(福 島)

第2章 北区の調査成果

第1節 遺構の分布と基本土層

1. 遺溝の分布

3次調査の北部は、県道河東・会津坂下線の南側、八日町集落へ続く村道の北側に挟まれた範囲である。平成16年度に湯川村が発掘調査した村道部分を介して、平成21年度に実施した2次調査北端部と連続する。調査範囲の現状は、村道に面する南半部は宅地、北半部は畑地・水田である。その他、調査区中央は鍵形となる水路が南北に流れている。そのため地形の改変が著しく、2次調査で確認したLⅡとした遺物包含層が遺存する範囲は極めて狭い。

北区で確認した遺構は、掘立柱建物9棟、土坑43基、溝跡11条である。これまでの2次調査と同様に、弥生時代後期と平安時代の遺構や遺物も確認した。これに加えて桜町遺跡の発掘調査で初見となる中近世の方形区画溝で囲まれた屋敷地を確認した。出土遺物は縄文土器、弥生土器、平安時代の土師器・須恵器、中近世の陶磁器・かわらけ、中国銭があり、その他に曲物や箸などの木製品、石臼や石鉢など石製品が出土した。

弥生時代の遺構は、土坑と溝跡を確認しただけで、2次調査の成果に比べれば、遺構・遺物ともに極めて希薄である。調査区東側には桜町Ⅰ～Ⅱ式期の土坑を数基確認したが、その性格までは特定できない。桜町Ⅲ式期の100号土坑は井戸跡で、北陸系甕の他に漆が付着した壺が出土した。43号溝跡は2次調査の21号溝跡と連続し、弥生時代の遺構群が分布する微高地を南北に分断する区画溝の一部と考えている。43号溝跡の出土遺物は桜町Ⅲ式期の土器が主体となる。

平安時代の遺構は調査区の西側で確認した。40号・41号溝跡は、2次調査の19号・20号溝跡と連続する道跡と判断した。道跡の東側には48号・49号掘立柱建物跡とした小型建物跡がある。2次調査の成果に比べ、掘立柱建物跡の規模が小さく、建物の配置が異なるなどの特徴が認められる。桜町遺跡で確認した平安時代集落の北端部となる遺構群であろう。

中近世の屋敷地は、調査区の中央から東半部にかけて確認した。45号・46号溝跡によって一辺が50m前後の長方形に区画された屋敷地である。45号溝跡が南側に長方形の区画を形成することから、複郭構造の屋敷地となる。屋敷内には掘立柱建物跡5棟確認したが、柱穴が多数あり、さらに数棟増える可能性がある。その他、屋敷地内の付属施設として、井戸跡を16基確認した。井戸跡はすべて素掘りの井戸で、深さは2m前後である。掘立柱建物跡や溝跡からは、陶磁器類の出土は極めて少なく、詳細な年代を特定できない。井戸跡から出土した木製品の放射性炭素年代測定を参考にすれば、おおむね中世から近世まで12世紀～18世紀という、かなり長期間にわたる年代測定結果を得ている。なお、詳細な測定結果は巻末の付章に掲載した。

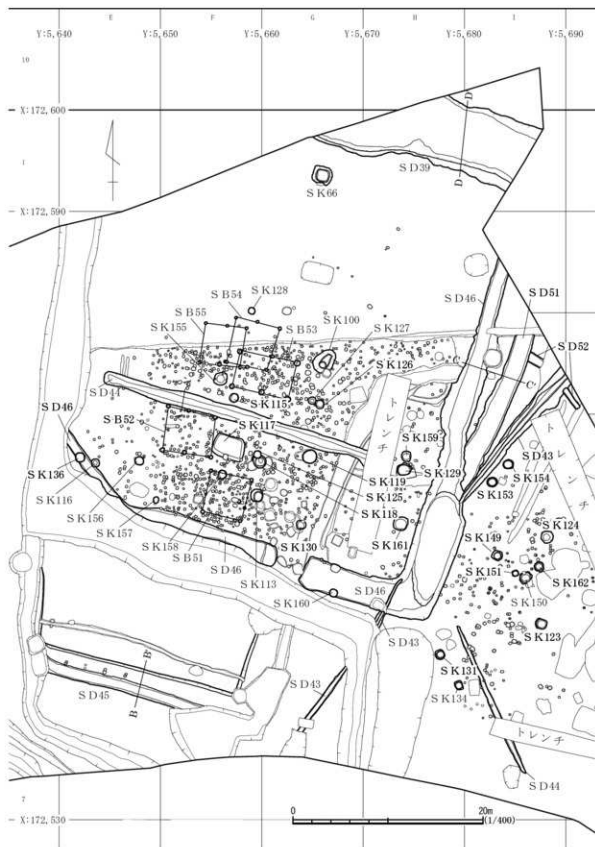


図5 北区遺構配置図(1)



図6 北区遺構配置図(2)

2. 北区の基本土層

3次調査の北区は、昨年度の2次調査区の北側に接するため、原則的に2次調査で分層した土層と一致させた。また、基本土層の表記も同様に、アルファベットの大きい文字Lをつけて、これにローマ数字とアルファベットの小さい文字を組み合わせて表記した。(例：L I a ○○○)

L I 調査区の表土層である。八日町集落へと続く村道の北側は住宅地であったため、水路や攪乱が多く、整地土の砂や砂利などが顕著であった。一方、県道河東・会津坂下線の南側は畑耕作土や水田耕作土である。

L II 黒褐色土である。旧表土層に相当する土層である。層厚は薄く数cm程度である。L IIの

第2章 北区の調査成果

分布状況も部分的で、中世の屋敷地を確認した調査区中央にわずかに遺存していた。弥生土器や平安時代の土器片を含む。

- L III a 黒褐色土に沼沢火山噴出物(NP)を含む土層である。L IIの周辺および下層から検出されることが多い。弥生時代より古い旧表土である。厚さは十数cmと薄い。沼沢火山噴出物は、風化などで細粒になった状態であるため、水成堆積による二次堆積と判断した。
この層の上面で遺構を確認することが多い。またL III aに遺物は含まれない。
- L III b 砂層。調査区西端の土層観察により確認した。上部は細かな砂と粘土の互層である。下部は砂層で下に向かって粒子が粗くなる。低地の河川流路に堆積した土層である。層厚は1m以上もある。
- L III c 灰褐色粘土。L III b層の下に堆積していた。別層としたが、L III b層の下部に含まれる可能性もある。
- L III d 黒褐色土。有機物を多量に含む土層である。低地に形成された泥炭層である。東岸から西側に落ち込むように形成されている。西端で層の厚さ40cm以上である。
- L III e 沼沢火山噴出物である。少なくとも3層以上に細分される。上層は粘土、中層は砂層、下層は火山弾を含む土である。噴火時とそれほどの時間経過はなく形成された地層であろう。西端で厚さ20cm以上である。
- L III f 褐色粘土。水成堆積により形成された土層である。有機物を含んでいる。湖底堆積土であろうか。
- L IV a 褐色粘土で、均一な土層。水成堆積土である。下部は灰色に変化している。0.8m以上の厚さがある。
- L IV b 青灰色土。厚さ0.5m以上である。水成堆積土である。
- L V 砂礫層で、湧水が激しい。地表下約3mで確認したが、これ以上の掘り下げは行っていない。

今回の3次調査では、縄文時代前期後半頃の縄文土器が数点出土した。近年の発掘調査でも、会津盆地内で縄文時代前期後半の土器(大木6式期)の出土例が知られてきている。湯川村堂後遺跡(2010年調査)でも大木6式の縄文土器が出土している。

沼沢火山の噴火は、紀元前3,400年頃(山元1995)とされる。この時の火山噴出物は、会津盆地中央部の低地で、水成堆積の粘土層中で確認されていることから、当時の会津盆地に大きな湖があったと考えられている。このことは桜町遺跡の基本土層からも、これと矛盾する結果は確認できない。従来からの定説的見解では縄文時代前期末は会津盆地内が湖沼化して、縄文人の居住に適さない土地になったと考えられてきた。しかし、近年の大木6式土器の出土例からも、会津盆地内の低地にも当時の人々の諸活動の一端が見えてきている。今後、発掘調査の成果が増加すれば、湖沼化した会津盆地の低湿地における土地利用や集落のあり方について、再検討すべき調査事例が得られるかもしれない。

(福 田)

第2節 縄文・弥生時代の遺構と遺物

3次調査北区では、弥生時代に属する遺構として、土坑6基、溝跡1条、小穴数基を確認した。2次調査に比べて遺構や遺物は希薄であるが、昨年度までの調査で出土例が少なかった桜町Ⅲ式期の資料がまとまって確認できたことが特筆される。その他に調査区内から縄文土器が2点出土した。紙面の都合から、これについても本節に収録した。

1. 土 坑 (図7～11, 表4・5, 写真9～12)

弥生時代に属する土坑は、100号・103号・112号・122号・132号・133号土坑の6基が該当する。100号土坑は桜町Ⅲ式期の井戸跡である。その他の土坑は桜町Ⅰ～Ⅱ式に属するが、遺構の性格を特定できるだけの所見は得られていない。そのため、本項では100号土坑を中心にまとめる。なお土坑の位置や計測値などは、表4にまとめた。

100号土坑 中世の屋敷地となる調査区中央から検出した。遺構の南端は攪乱で失われるが、検出面での平面形は楕円形である。100号土坑の構造は、土坑の北側に長方形を基調とする平坦面が設けられ、南部に円形となる深い掘り込みを持つ。その直径は0.75mで、検出面から井戸底までの深さは0.8mである。中段の平坦面から井戸底までの高さが0.15mである。遺構内堆積土は12層に分けた。いずれも黒褐色土を基調とし、壁面の崩落土を含み、遺構の外側からの自然流入土によって埋没したと判断した。土坑の底面は、湧水層であるLⅣaに達している。

遺物は堆積土中から破片となって出土したものが大半を占めるが、図7-2は3層からはほぼ完形の状態で出土した。100号土坑の廃絶後に投棄されたものである。図7-1は土坑中段の平坦面に正立した状態で出土した。周辺に上半部の破片が全くないことから、人為的に分割した土器を据え置いて使用していた可能性が高い。土坑が機能していた時期の遺物と判断した。

図7-1は壺の体部下半である。上半部の破片がなく、破断面が平滑に整っていることから、人為的に分割されて用いられていた可能性がある。全体的な器形は不明であるが、底部の径が小さく、体部はやや下膨れ気味の器形となる。外面の調整は、体部下半はケズリが観察でき、単位幅の狭い横位から斜位のミガキで仕上げられる。内面は粘土紐積み上げ痕が残り、ハケメの後に横位の指ナデで整えられている。さらに体部内面の中位には整形後の補修痕であろうか、指先を器面に押し当てた痕跡が多数観察できる。また、外面には漆が付着している。漆は体部中位と底部直上から体部下端に認められる。約5cm単位の長さで器面を平行するように連続して塗られている。漆の塗布にあたっては、刷毛などが用いられたのであろうが、刷毛先がバサバサで塗りにムラが顕著であり、均一に塗られた精緻な印象はない。

2・4～6は北陸系の甕である。2・6は口縁部が「く」の字に外反して開く。口唇部は上方に積み上げられ、その断面形は三角形になる。体部の器形は、体部上半から中位に最大径を持ち、直

第2章 北区の調査成果

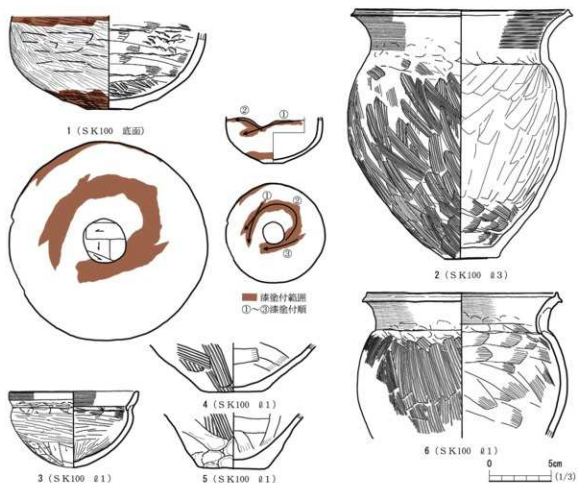


図7 100号土坑・出土土器(1)

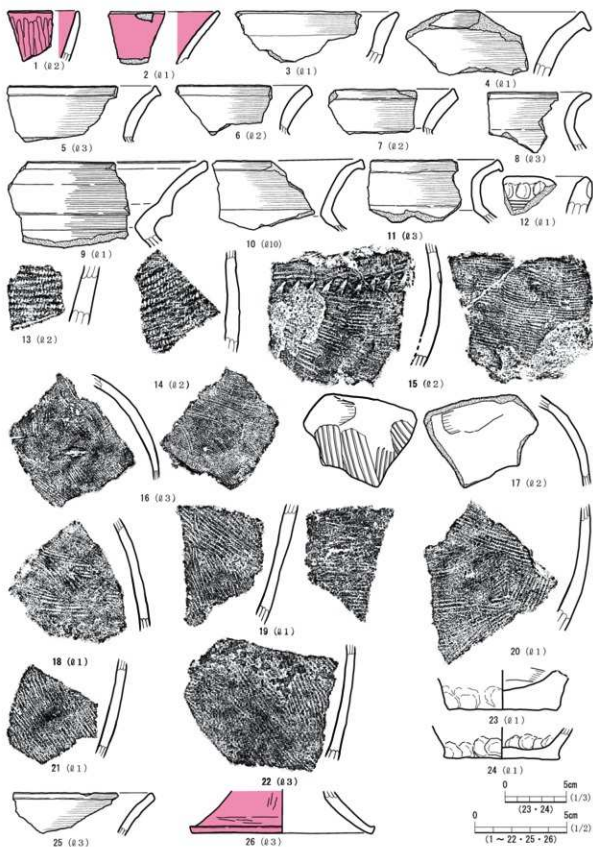


図8 100号土坑・出土土器(2)

径の小さい底部に向かってすぼまる。これらは桜町Ⅲ式土器に顕著に見られる特徴となる。体部外面の調整痕として、ハケメが多用される。体部下半部にはハケメの前に施されたケズリの痕跡が観察できる。口縁部は内外面ともにヨコナデによって仕上げられる。内面の調整痕は、体部上半部はカキトリが顕著で、器面が薄く造られている。体部下半はナデが観察できる。6は体部下半を欠損するが、全体的な器形や調整痕は2と同じであろう。2に比べ口縁部と体部の接合部分が肥厚する特徴がある。4・5は底部資料である。底径が小さいことから、北陸系の甕と推察している。外面はハケメ、内面はナデを主体とする調整痕が観察できる。

3は小型鉢である。口縁部は体部との境で屈曲し、わずかに外反して開く。底部が丸底で、底部に向かってややすぼまる半球形の器形となる。口縁部には軽い屈曲があり、ヨコナデで仕上げられる。体部下半はケズリを残すが、体部上半は単位幅の狭い横位ミガキによって仕上げられる。口縁部内面に明瞭な段を持ち、体部は底部に向かって丸くなる。見込み部分には、直径1cmほどのくぼみが観察できる。内面は指ナデを主体に器面が整えられ、横位のミガキによって仕上げられる。

図8は破片資料を掲載した。1・2は壺の口縁部破片であろうか。内外面ともにベンガラで赤彩される。3～11は図7-2と同様な器形となる北陸系甕の口縁部破片である。口縁部が「く」の字に屈曲し、口唇部がつまみあげられて、断面形が三角形になる。9は口縁部下端に明瞭な段を持つが、内面の段がわずかである。11号周溝墓の資料(甕C6)に類似する。15～23は北陸系の壺または甕の体部破片である。器面調整にハケメを多用する。15はへら状工具を押し当てたキザミが巡る。

13・14は外面に地文となる燃糸文が施された在地系壺の体部破片である。23・24は底部資料である。円盤状となる底部の形状から、縄文を施す在地系の壺であろう。25・26は高坏の脚部であろうか。26はベンガラで赤彩される。

その他の土坑 112号・122号・132号・133号土坑は、それぞれの配置から四隅切れ周溝墓の可能性が指摘されよう。特に122号土坑と132号土坑の距離は10mほどで、5・9号周溝墓などの四隅切れ周溝墓に匹敵する規模となる。一方、大型四隅切れ周溝墓の周溝や底面と比較すれば、これら土坑の壁面や底面の造りが凸凹で安定していない。四隅切れ周溝墓とするには積極的根拠を欠くことから、これらを土坑と判断した。なお、土坑の性格を特徴付ける所見は得られていない。

年代は図10・11に示すとおり、地文に燃糸文を施し、交互刺突文が施された在地系の壺が多く出土する。北陸系土器は壺・甕、高坏がある。図10-6・27は坏部の口唇部内面に段を持つ。桜町Ⅰ式期の高坏の特徴と矛盾しない。図10-28に示した高坏の脚部は、粘土塊を充填して坏部と接合する。楕円形となる、すかし孔が1対見られる。桜町Ⅰ～Ⅱ式期の高坏の特徴であろう。

図10-29は体部の器形が球形となる甕であろう。体部の調整はケズリの後にナデによって仕上げられる。図11-12はいわゆる直口壺の口縁部破片であろう。内外面ともミガキが顕著で丁寧な作りの印象がある。この直口壺は、桜町遺跡では類例が少ない資料である。

これら土坑の年代については、出土遺物の特徴から、弥生時代後期後半の桜町Ⅰ式～Ⅱ式期に属すると考えている。

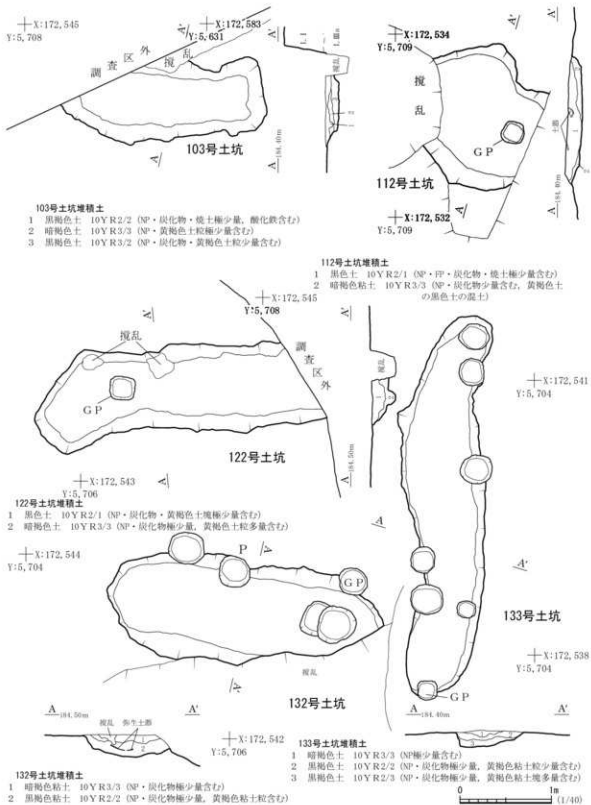


図9 103・112・122・132・133号土坑

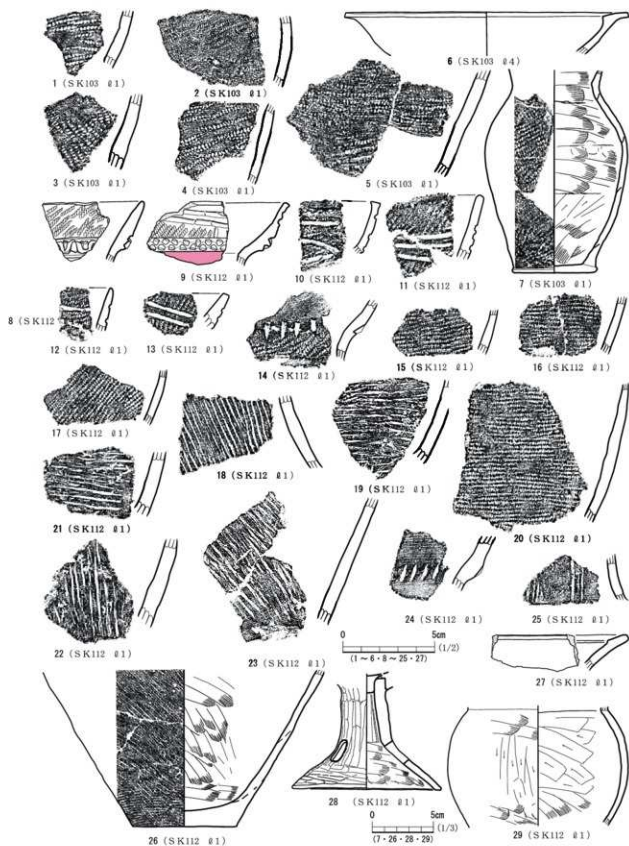


図10 弥生時代の土坑出土土器（1）

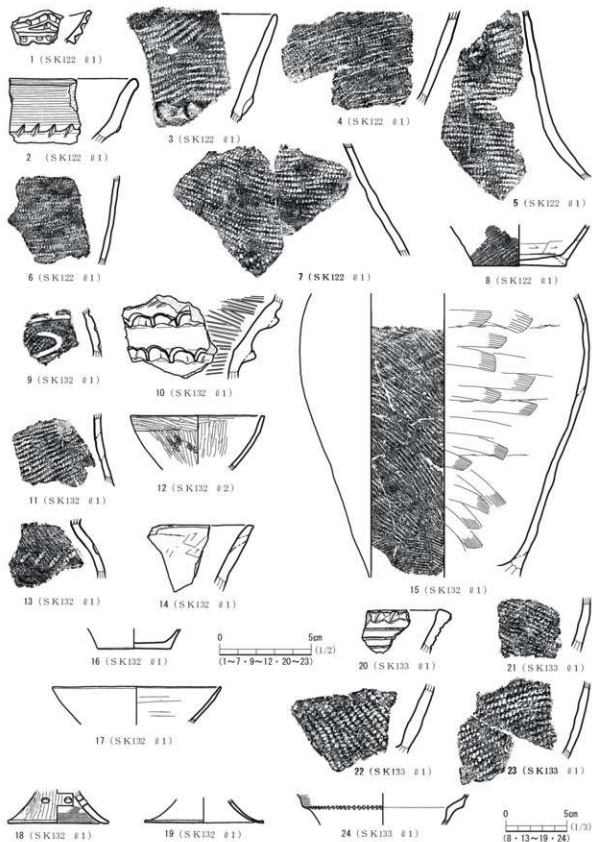


図11 弥生時代の土坑出土土器(2)

2. 溝 跡 (図5・6・12, 写真13)

弥生時代の溝跡は43号溝跡だけである。44号溝跡は遺物が出土していないため年代が不明であるが、堆積土は43号溝跡と近似する。弥生時代に属する可能性を指摘するだけに止めておく。

43号溝跡 43号溝跡の位置や堆積土などの特徴から、2次調査で確認した21号溝跡に連続する溝跡と判断した。しかし、湯川村教育委員会が平成16年度に実施した村道部分の発掘調査では、43号溝跡と合致する溝跡は確認されていない。『湯川村文化財調査報告書第4集』(2006年)

43号溝跡は中世の屋敷地を区画する46号溝跡によって壊されて途切れて連続しない。2次調査区の21号溝跡から続いて、北東方向へ向かって延び、C5-J3グリッドで調査区外となる。21号溝跡と併せると、全長が97.8mを測る。検出面からの深さは、C5-G6グリッドでは0.1mと浅く、C5-I4グリッドでは0.58mと深い。底面の標高は183.60m～183.50mであり、北側に向かってわずかに深くなる。壁はC5-I3・I4グリッドでは、いわゆる葉研堀の形状となる。検出面から溝上半部に比べ、底面付近の溝幅が狭く、急峻な立ち上がりとなる。一方、21号溝跡で確認した溝の造り替えの痕跡は確認できない。

43号溝跡の堆積土は、最も良好に遺存するC5-I4グリッドで確認した。堆積土は4層に分けた。2層は薄い砂層で、溝跡の埋没過程において水の影響を受けている。最下層となる4層は黄褐色粘土と黒色粘土の混ざった土で、人為的に埋め戻されたものと判断した。堆積状況においても、21号溝跡の埋没過程と矛盾しない。

43号溝跡から出土した遺物は、図12に示した。遺物の出土状況に人為的な所作は認められず、埋没過程において流入したものと考えている。図12-1～5は沈線文が描かれる在地系壺の破片である。弧文・楕円形文などがある。6は口縁部下端に指頭押圧によるキザミが施されている。7は体部上半にヘラ状工具の先端を押し当ててキザミが巡る。8～11は地文に燃糸文が施された壺の体部下半から底部の資料である。

12～20は北陸系壺の破片である。12は口唇部が細く上につまみ上げられる形状である。93号土坑資料の内、桜町Ⅰ式の壺C3に類似する(『会津10』2011年)。13・16は頸部で「く」の字に屈曲する口縁部で、口唇部の断面が三角形となる。桜町Ⅲ式に特徴的に見られる壺の口縁部形態である。14はやや小振りの壺で、体部上半が直立気味に立ち上がる。在土器の器形が優先されて在地化した土器であろうか。17～20は体部下半から底部にかけての資料である。内外面ともハケメが観察できる。21は体部が球形となる壺であろう。外面は摩滅するが、ベンガラによる赤彩される。22は蓋である。二穴一対の貫通孔が観察できる。23は装飾壺であろう。体部の最大径となる部分に尖帯が貼り付けられる。

24～33は高環または器台であろう。25は坏部の破片である。坏部下端に明瞭な段があり、口縁部が軽く外反して開く。桜町Ⅱ式期に属する。26はやや柱状となる脚部である。27は脚部中位に明瞭な段が設けられている。段の上面には櫛歯状施文具による浅い凹線が巡り、円孔が3～4個開けら

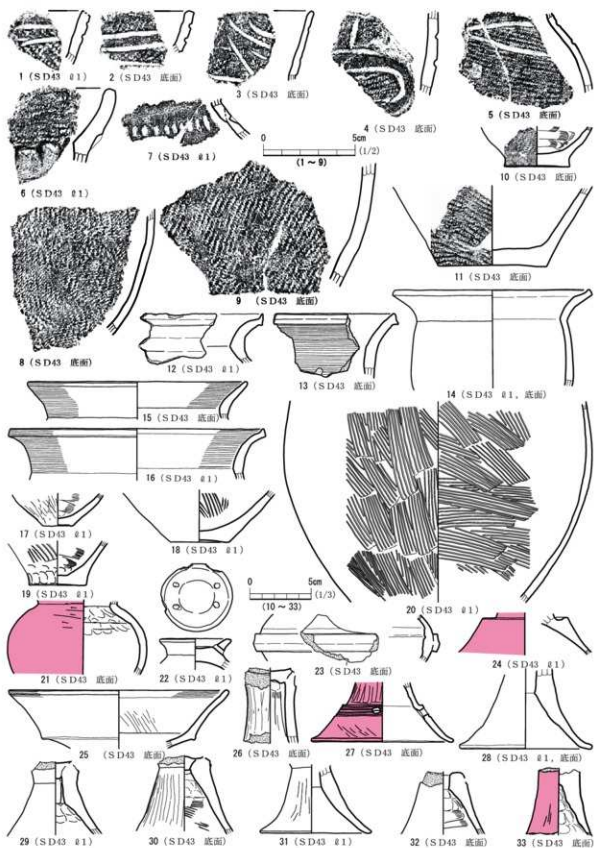


図12 43号溝跡出土弥生土器

れる。29・30は坏部との接合に粘土塊を充填させる特徴がある。33は高坏脚部で、坏部との接合に粘土塊を充填しない作りである。脚部と坏部の接合面は指頭を押し付けて凸凹面となる。桜町Ⅲ式期に属する。

21号溝跡と併せて、弥生時代の遺構群が所在する微高地を分断する溝跡である。43号溝跡の北側にも100号土坑などが分布することから、当時の生活域を区画する溝(環濠)などと機能を限定的に捉えることにはやや慎重を要する。出土遺物は桜町Ⅰ式～Ⅲ式までが混在することから、43号溝跡は桜町Ⅲ式期まで開口していたのであろう。

3. その他の遺構と遺物 (図13～15, 写真13・15)

小 穴 弥生時代の小穴は、調査区南西側D5-A7グリッド周辺で確認した。D5-B7グリッドP1などが該当する。中近世の柱穴が多数分布する範囲であるため、明確な弥生時代の掘立柱建物跡を抽出できなかった。2次調査で確認した43号掘立柱建物跡や94号土坑の出土建築部材などから勘案すれば、高床建物を含む掘立柱建物跡が存在することは確実である。

図14-10・11は、D5-B7グリッドのP1から出土した長頸壺である。P1の断面観察から、柱穴の埋土に混入した弥生土器と判断した。10に示す口縁部の破片が少なく、11の頸部片と接合しないが、同一個体である。口縁部幅が短く、下端部が肥大した段となる。口縁部下端の段に、ヘラ状工具を押圧したキザミが巡る。体部の器形は、やや肩が張った上半部に最大径を持ち、底部に向かってすぼまる。頸部の文様は、4本歯となる櫛歯状施文を用いて長方形区画が2段描かれる。長方形区画内は無文になる区画と横位櫛歯文の区画を交互に配し、上下2段でも面違いになるように配されている。内面は粘土接合痕が残り、指オサエや指ナデによって器面が整えられている。

縄文土器 調査区中央C5-H3グリッドのP1から出土した縄文土器で、桜町遺跡では初見となる資料である。図13-1・2は同一個体で、深鉢形土器の上半部破片であろう。二本一組の細い

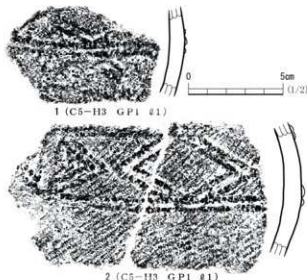


図13 北区出土の縄文土器

粘土紐を横位に貼り付けて文様帯を区画し、文様帯内部に菱形文を配している。胎土は砂粒が顕著で器面が粗い。縄文時代前期後半の大木6式と判断した。

弥生土器 図14・15には、LⅡとした遺物包含層から出土した弥生土器、中世の遺構など弥生土器と関連のない遺構から出土したものをまとめて示した。

図14-1・2は、地文が燃糸文で沈線文が描かれる。2は横位沈線の下部に下向きの連弧文描かれる。3・4は長頸壺の口縁部破片であろう。口唇部に指頭によるツマ

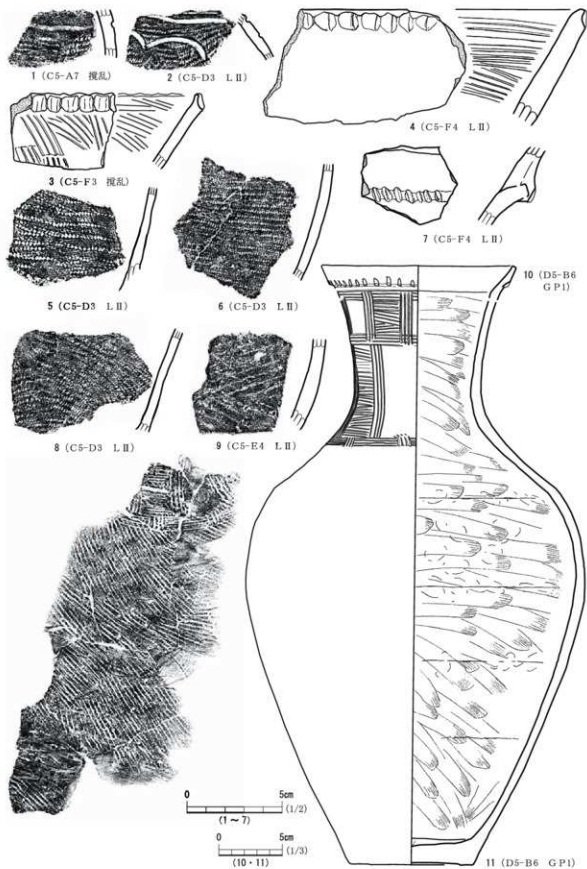


図14 北区出土の弥生土器（1）

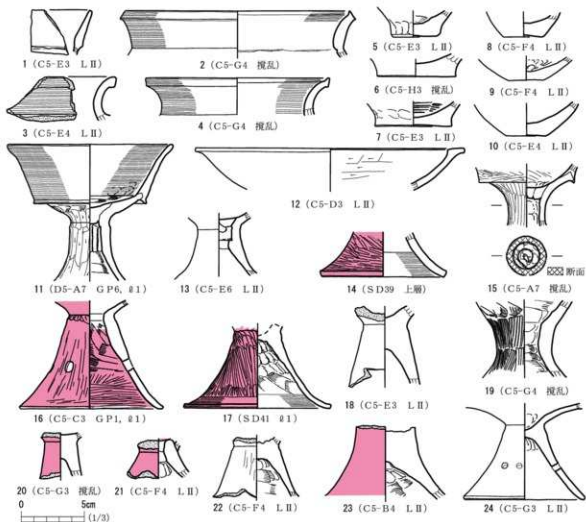


図15 北区出土の弥生土器（2）

ミ上げによるキザミが巡る。3は内外面ともにハケメが観察できる。5～8は壺の体部下半の破片であろう。8は綾杉状の燃糸文が施される。9は壺であろう。肥厚した口縁部下端に棒状工具の側縁を押圧したキザミを施す。

図15-1は桜町Ⅲ式の壺である。口縁幅が長く、下端部に軽い段を持つ。2～4は壺の口縁部破片である。口唇部がつまみ上げられ、断面が三角形となる。桜町Ⅲ式の特徴である。5～10は壺または甕の底部資料である。9・10は底部が小さくなる。

11～24は高坏を示した。11～15は桜町Ⅰ式期の高坏であろう。11は坏部の下端に段があり、その端部が鋭く垂下する。12は高坏の口縁部破片である。坏身はやや丸みを帯びて立ち上がる。口唇部内面が肥厚し、その上面が幅広く平らに整えられる。15の器形は11と同じであろう。脚部との接合部分に、渦巻状に丸めた粘土塊を充填している。

18～24は高坏や器台の脚部破片である。脚部が裾に向かって「ハ」の字状に開く器形で、24は2穴1組の円孔が一对認められる。11・12・15は坏部から脚部に粘土塊を充填させて接合する。17・23～24は粘土塊が充填していない。これらは桜町Ⅲ式の高坏で見られる特徴である。（福田）

第3節 奈良・平安時代の遺構と遺物

北区で確認した平安時代の遺構は、掘立柱建物跡3棟、土坑3基、溝跡3条である。これらの遺構は、調査区の西半部に集中する傾向があるが、2次調査の成果に比べれば極めて希薄である。

1. 掘立柱建物跡

48号掘立柱建物跡 (図16, 写真14・15)

48号掘立柱建物跡は調査区の西側、C5-B3・B4グリッドに位置する。49号掘立柱建物跡と

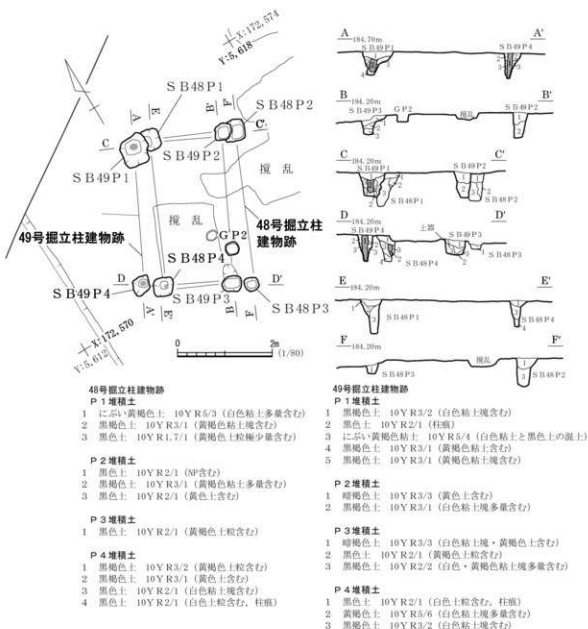


図16 48・49号掘立柱建物跡

同所で建て替えられた小型の掘立柱建物跡で、48号掘立柱建物跡が古く、49号掘立柱建物跡が新しい。本遺構の東側には、建物の主軸方向を同じくして大型の50号掘立柱建物跡が分布する。また、南側には小穴群が分布するが、明確な建物跡は確認できなかった。遺構検出面はLⅢa層である。

48号掘立柱建物跡は1間×1間で、その平面形は南北に長い長方形である。柱間の規模は、南北柱列のP1-P2が2.00m、P2-P4が1.84m、東西柱列のP1-P4が3.05m、P2-P3が3.2mを測る。建物跡の主軸方向は、真北に対して27度東に傾く。

柱穴の平面形は隅丸方形である。柱穴の規模は一辺40cm程度であるが、P3は削平されているため、一辺が24cmと小さい。柱穴の深さは、P1が最も深く60cmである。柱穴は上半部がやや開くが、下半部は垂直気味に掘り込まれている。明確な柱痕を確認できた柱穴はP4だけで、柱材として直径10cm程の細い丸太材が用いられたと判断した。柱痕は黄褐色土を含む黒褐色土である。埋土は黒褐色土と黄褐色土の混土で、硬くしまっている。

本遺構の柱穴からは、平安時代の土師器片が14点出土しているが、いずれも摩滅した小破片であるため図示していない。48号掘立柱建物跡は1間×1間の小型建物跡である。50号掘立柱建物跡と主軸方向が揃うことから、これに付属する倉庫で、出土遺物から平安時代前半と考えている。

49号掘立柱建物跡 (図16、写真14・15)

本遺構は、48号掘立柱建物跡に後続する掘立柱建物跡である。48号掘立柱建物跡から0.3m程東側にずれた位置に建て替えられている。規模は南北1間、東西1間で、柱間の距離は、南北柱列のP1-P2間が2.00m、P3-P4間が1.90m、東西柱列のP1-P4間が2.95m、P2-P3間が3.25mを測る。48号掘立柱建物跡とほぼ同じ規格である。

柱穴の平面形は、いずれも不整な隅丸方形であるが、底面の形状は整った方形となる。規模はP1が最も大きく、一辺が60cmを測る。その他は30~40cmである。遺構検出面から柱穴底面までの深さは40~58cmである。柱痕跡はP1・P4で確認している。柱材には直径15cm程度の細い丸太材を用いたと推測される。

柱穴内の堆積土は、柱痕跡と埋土に大別できる。柱痕跡は黒色土を基調とし、P4は白色粘土粒を含んでいる。埋土は黒色土・黒褐色土の混土である。P1・P4は黄褐色土と黒色土が交互に堆積し、硬くつき固めている。

本遺構の柱穴からは、平安時代に属する土師器片が4点、須恵器片が2点出土しているが、いずれも細片であるために図示していない。

48・49号掘立柱建物跡は、同所で連続して建て替えられた1間×1間の小型建物跡である。東側には主軸方向を同じくして50号掘立柱建物跡が分布する。桜町遺跡の平安時代集落の特徴として、大型建物跡と小型建物跡がセットで分布する傾向が看取できる。この点を評価すれば、48・49号掘立柱建物跡の性格について、50号掘立柱建物跡に付属する小型倉庫となる可能性が高い。ただ、2次調査で確認した小型建物跡は、すべて2間×2間の総柱建物跡である。本遺構の建物構造と異なる点を指摘しておく。本遺構の年代は、出土した土器類の特徴から、平安時代前半頃と考えている。

50号掘立柱建物跡 (図17, 写真16・17)

本遺構は調査区西部, C5-C3-C4グリッドに位置する。本遺構の周囲は, 近年の水路など擾乱が顕著であるが, 標高184.0mほどの平坦地に立地する。本遺構の西側6mには, 主軸方向を同じくする48・49号掘立柱建物跡, 南側4mには109号土坑が分布する。柱穴P4・P5は40号溝跡によって壊されていることから, 本遺構が古いと判断した。遺構検出面はLⅢa層である。

本遺構は, 東側柱列が擾乱をうけて西側柱列のP9とP10に対応する柱穴を欠くが, 東西4間, 南北2間の側柱建物跡と判断した。建物跡の平面形は南北に長い長方形である。その規模は, 東西柱列が7.1m, 南北柱列が4.9mを測る。柱間の距離は, 東西柱列の柱間は1.7m~2.0mである。南北柱列では2.3m~2.6mで, 南北柱列の柱間距離が広くなる特徴がある。

柱穴の平面形は方形を基調とする。P5・P7・P9は円形となる。遺存状態の良いP1の規模は, 一辺が40cmを測る。検出面から底面までの深さは24~28cmである。明確な柱痕跡を確認できた柱穴はない。柱穴内の埋土は, 砂粒や褐色粘土塊を含む黒褐色土である。

本遺構の柱穴からは, 平安時代に属する土師器片が6点, 須恵器片が1点出土している。いずれ



図17 50号掘立柱建物跡

も摩滅した小破片であるため、図示していない。

50号掘立柱建物跡は2間×4間の側柱建物である。主軸を同じくして48・49号掘立柱建物跡と同時期の建物群と考え、50号掘立柱建物跡は居住施設となる。本遺構を含めた建物群の主軸は2次調査における建物群の主軸とほぼ同一である。明確に時期を把握できる遺物は出土していないが、その点から本遺構は平安時代に属し、40号溝跡よりは古い時期となる。

2. 土 坑 (図18・19, 写真18)

平安時代に属する土坑は109・114・121号土坑の3基である。掘立柱建物跡と同様に、調査区西部に分布する。109号・121号土坑は廃棄坑、114号土坑は貯水施設であろう。

109号土坑 調査区の北西側であるC5-C4・C5グリッドに位置する。40号溝跡と重複し、本土坑が古い。遺構検出面はLⅢa層である。

本土坑の平面形は、やや不整な楕円形である。規模は長径が0.98m、短径が0.8mを測る。検出面から底面までの深さは0.35mである。周壁は両側が乱れて緩やかになるが、それ以外の壁は急峻に立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は3層に分けた。いずれも炭化物や焼土を含む黒褐色土を基調とする。2・3層は黄褐色土粒を含むことから、人為的に埋め戻されていると判断した。

本土坑からは土師器片が20点、須恵器片が6点出土した。出土遺物は2・3層とした堆積土の下部から出土したものが大半を占めるが、図19-1・8は土坑の底面付近から出土している。また、底面上からは直径10cm前後の石が2個出土したが、人為的な加工や使用痕跡は確認できなかった。図19-1・2は、ロクロ成形された土師器坏である。外面は底部から体部下半に回転ヘラケズリによる再調整される。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施す。3は小型甕の底部であろう。5・6は土師器の長胴甕である。外面に平行タキ具の痕跡が残る。

4は須恵器坏である。器高に対して底径が大きく、底面から口縁部に向かって直線的に開く器形である。底面は回転ヘラケリで切り離されている。7・8は須恵器甕である。8は外面に平行タキ具の痕跡が、内面には同心円文となるアテ具痕が観察できる。

本土坑の北側に分布する50号掘立柱建物跡に伴う廃棄坑と考えている。年代は、出土した土器の特徴から、9世紀中葉頃の所産であろう。

114号土坑 調査区西部のC5-C5グリッドに位置する。本土坑と重複する遺構はないが、西側には40号溝跡、北側には42号溝跡が分布する。遺構検出面はLⅢa層である。

本土坑は、近年の掘乱によって北東隅を失うが、その平面形は隅丸長方形と推察される。規模は長辺が4.5m、短辺が2.75mを測る。底面までの深さは0.47mである。本土坑は、その西壁と40号溝跡の方向が一致するように造られている。さらに土坑の北西隅には溝を伴う施設が認められる。この溝状施設が40号溝跡と直交するように設けられる。114号土坑は、40号溝跡に関連する施設の可能性が高い。周壁は北壁側が崩落のために緩やかな傾斜となるが、その他の壁面は、急峻な傾斜と

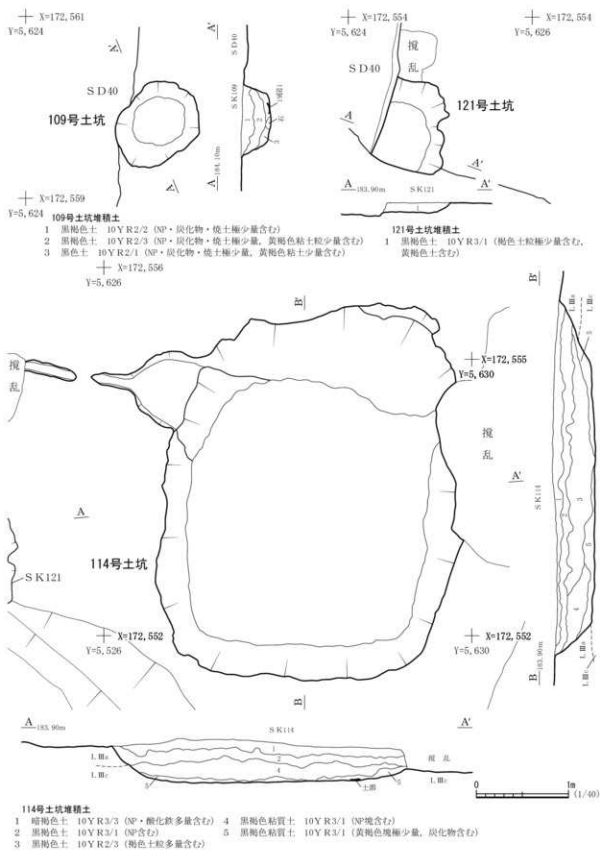


図 18 109・114・121号土坑

なる。底面は細かな凹凸があるが、ほぼ平坦でなる。

遺構内堆積土は5層に分けた。1～4層は褐色土塊を多量に含む黒褐色土を基調とし、土坑の廃絶後に人為的に埋め戻された堆積土であろう。酸化鉄の影響であろうか赤褐色に変色する特徴が認められることから、土坑に水が溜まっていた状態で埋め戻した可能性がある。5層は底面を薄く覆う黒褐色粘質土である。土坑が機能していた時期から廃絶直後に堆積したものと判断した。

本土坑の堆積土中からは、土師器と須恵器、銭貨が出土した。土器類は平安時代に属する坏・甕の小破片である。銭貨は錆化が著しい小破片で、銭名は判読できない。この銭貨は、調査区内で出土している中国銭と同様に、中世期の銭貨である可能性が高い。

本土坑の機能については、酸化鉄を含んだ堆積土の特徴から、貯水施設と考えている。さらに本土坑の北西隅に設けられた溝状施設から、40号溝跡から取水していたのであろう。本土坑の年代は、50号掘立柱建物跡よりは新しく、40号溝跡と同時期であり、おおむね平安時代前半頃と考えている。

121号土坑 調査区西部のC5-C5グリッドに位置する。40号溝跡と重複し、本土坑が古い。本土坑の東側に114号土坑が分布する。遺構検出面はLⅢa層である。

本土坑は西側が40号溝跡、南側が掘乱によって壊されているが、その平面形は楕円形と推定される。遺構検出面から底面までの深さは12cmと極めて浅い。周壁はなだらかで、底面と壁面の境は不明瞭である。遺構内堆積土は黄褐色土や褐色土粒を含む黒褐色土で、堆積状況から人為堆積と判断した。

本土坑からは、平安時代の土師器片が16点、須恵器片が3点出土した。いずれも摩滅した小破片のため図示していない。

本土坑は遺存状態が極めて悪いが、109号土坑と同様に50号掘立柱建物跡に伴う廃棄坑と考えている。年代は出土遺物の特徴から、9世紀中葉頃の所産であろう。

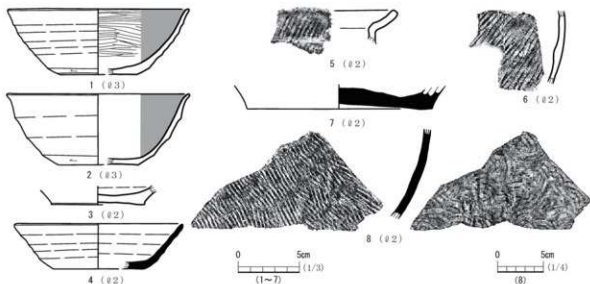


図19 109号土坑出土土器

3. 溝 跡 (図20・21, 写真18・19)

40・41号溝跡 40号・41号溝跡は南西から北東方向に向かって、それぞれ平行して延びる溝跡である。41号溝跡は、東側に位置する40号溝跡に比べて、溝幅が狭く浅い特徴がある。両溝跡の配置と形状から、2次調査で確認した19号・20号溝跡と同様に、道路遺構と考えている。40号溝跡は50号掘立柱建物跡、109号・121号土坑と重複し、いずれの遺構よりも新しい。遺構検出面はLⅢaである。

40号溝跡の規模は、全長が30.8m、溝幅は1.0～1.2mである。深さは13～19cmを測る。41号溝跡の全長は10.4m、溝幅は30～45cmと狭い。深さは13cmと浅い。両溝跡で区画された路面の幅は、内法で5.0mを測る。両溝跡とも底面は平坦で、周壁はやや急峻に立ち上がる。底面から周壁にかけて、その断面形が整った逆台形をなす。各溝跡の堆積土は、風化した沼沢火山灰を含む黒褐色土である。土質が均質であることから、自然堆積によって埋没したと判断した。

40号・41号溝跡からは、弥生土器片が50点、土師器片が90点・須恵器片が30点出土した。遺物の出土量は、40号溝跡から出土したものが多く、図21-8は口縁部を欠損するが、須恵器の高台付皿であろう。高台の端部が小さく張り出す。4・12・15・16・18は、須恵器甕の体部破片である。外面に平行タタキ具痕、内面には波文や同心円文のアテ具痕が観察できる。

40・41号溝跡は、2次調査で確認した19号・20号溝跡とは方向が異なるだけでなく、道路幅も40号・41号溝跡が広い特徴がある。現状では両道跡が直接的に接続する地点も確認できない。所属時期を異にした道跡の造り替えを留保しながら、本来的に連続しない可能性を指摘しておく。年代については、重複する50号掘立柱建物跡や109号土坑よりは新しい。中世の遺物が全く出土していないことから、溝跡の機能時期は平安時代に位置付けられる。

42号溝跡 114号土坑の北側に位置する溝跡で、114号土坑の北壁と並行するように東西方向に延びる。規模は、全長が5.4m、溝幅が1.1mを測る。深さは8cmと極めて浅い。底面はほぼ平坦であるが、草木根の影響で細かな凹凸が認められる。遺構内堆積土は沼沢火山灰・白色粘土を含む黒色土である。遺構自体が浅いが、人為的に埋め戻されたと判断した。

本溝跡の出土遺物は、小破片のため図示していないが、平安時代の土師器片が13点、須恵器片が5点出土した。本溝跡は、貯水施設である114号土坑を囲むように配された溝跡であることから、その排水に関連する溝の可能性がある。

4. その他の遺物 (図21)

北区では、LⅡとした遺物包含層や中世の溝跡などから奈良・平安時代の遺物が出土している。

土師器 図21-1・2は坏で、その形状などの特徴から8世紀後半頃に属する。1の外面は口縁部にヨコナデを施した後に、体部にケズリ調整を行う。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。2は底部から丸みを帯びて立ち上がる。外面は口縁部にヨコナデを施す。内面は1と同様に

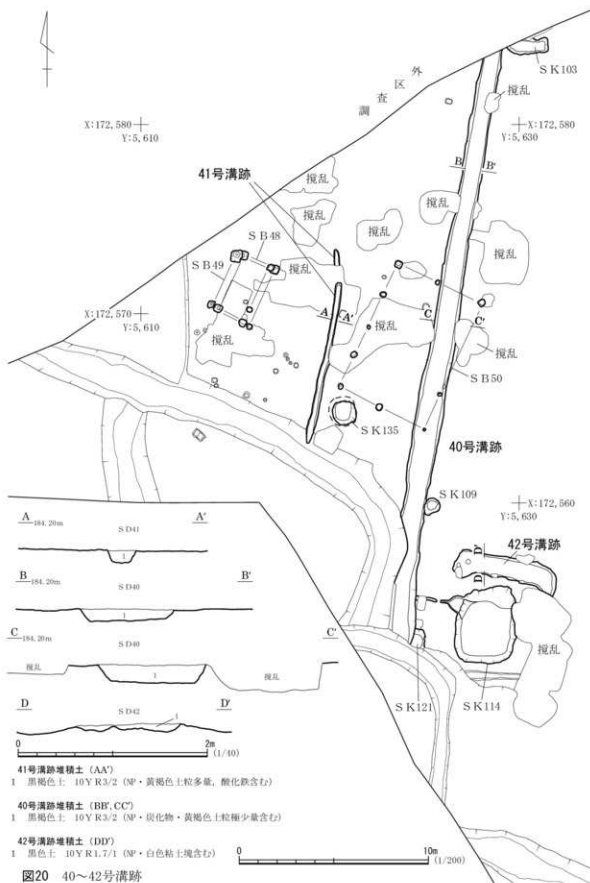


図20 40～42号溝跡

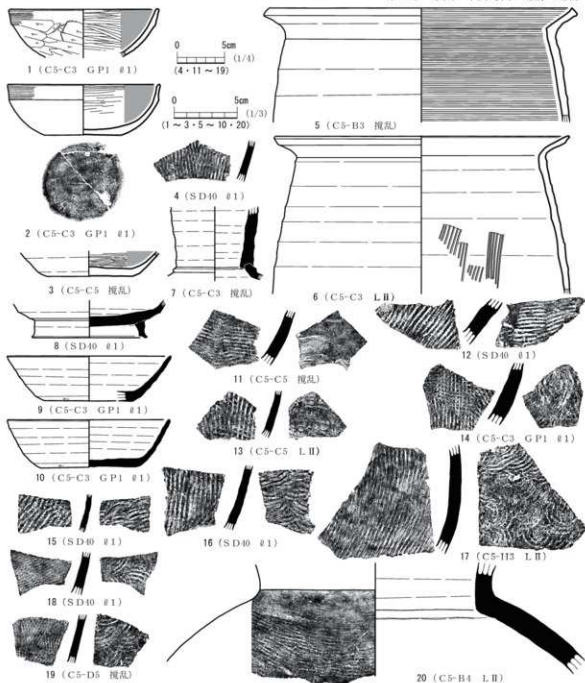


図21 奈良・平安時代の出土土器

ヘラミガキの後に黒色処理を施す。底部外面には刻書が認められるが判読できない。5・6はロクロを用いて整形された長胴甕である。器形は頸部でわずかにすぼまり、口縁部が「く」の字に外傾して開く。5は内面にカキメが残る。6は内面には体部下半部には縦位のハケメ痕が観察できる。

須恵器 7は長頸瓶である。頸部と体部の境にリング状突帯が認められる。8は高台付の皿であろう。9・10は坏である。10は器高が低く、口縁部径に対し底径が大きい特徴がある。底部から直線的に口縁部へ立ち上がる器形である。4・11～19は甕の体部破片である。外面には平行タキ具の痕跡を残す。内面のアテ具痕は、13・14・17が同心円文、11が無文、19が波文である。20は甕の頸部破片である。丸みを帯びた肩部から頸部が垂直に立ち上がる。(大野)

第4節 中・近世の遺構と遺物

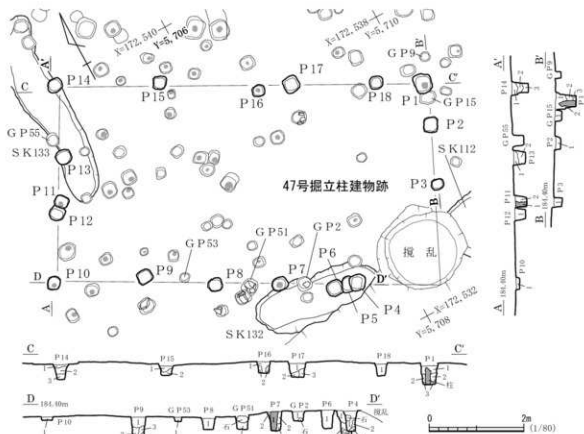
中世以降の時期に該当する遺構は、北区のほぼ中央部に集中して認められた。検出された遺構は土坑・溝跡・小穴である。遺構の時期は大きく中世と近世に分けられる。しかし、検出された遺構の大部分は中世に属していると考えられる。

中世の遺構は46号溝跡によって区画された区域に濃い密度で数多く認められ、また区画外である46号溝跡の東にも散見される。中世に属すと判断した遺構は、掘立柱建物跡6棟、土坑34基、溝跡3条、小穴多数である。46号溝跡よりも北に位置する遺構群は、これら溝跡によって方形に区画された中世の館跡と想定される。これらの遺構群は、土坑・溝跡・小穴などで構成されている。この館跡は近代からの排水溝によって大きく破壊されているが、46号溝跡は東・西・南に面している溝跡の一部が遺存する。46号溝跡は直線的に北の調査区外へのびる。46号溝跡の先には自然流路である39号溝跡が位置している。調査区外のため確認できなかったが、おそらく46号溝跡は39号溝跡に接続していると考えられる。そのため、39号溝跡が北の区画溝として機能していたとも考えられる。また、45溝跡は本館跡に関連する施設である可能性も高く、46号溝跡と合わせて区画溝を構成しているようみえる。これらの状況から本館跡は、複郭式の館跡であったと推測される。

方形館跡内に認められる遺構は、掘立柱建物跡5棟、土坑16基、溝跡3条、小穴多数である。小穴は多数検出しているが、土坑や攪乱などが大きく掘り込まれているために、ほとんどの小穴は建物跡として構成することができなかった。51～55号掘立柱建物跡は区画内のほぼ中央や南寄りに位置している。いずれも溝跡に面して造られている。53～55号掘立柱建物跡は重複が認められたことから、少なくとも3時期に及ぶ変遷が考慮できる。土坑は区画内に散在して認められた。検出した土坑の多くは井戸跡と考えられる。井戸跡の数が多いことから、井戸の掘削と埋め戻しを繰り返しながら、数時期にわたって居住域として営まれたと考えられる。溝跡は方形に区画する溝である45・46号溝跡と館内を南北に分断する44号溝跡が認められる。館跡外の中世の遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑13基が検出された。46号溝跡の東に認められた。建物跡は方形区画溝と軸線を同一にしている。土坑は井戸跡と判断している。これらの遺構は、館とその周囲に営まれた集落跡とも認識でき、その一端が部分的にうかがえる検出例とも考えられる。中世以外の近世遺構として明確に認識できたのは、161号土坑1基、39号溝跡1条である。土坑は近世の井戸跡である。溝跡は出土遺物より、近代まで流路としての機能を有していたようである。

1. 掘立柱建物跡 (図22～26、写真20～28)

47・51～55号掘立柱建物跡が該当する。中世以降の掘立柱建物跡は6棟認められた。掘立柱建物跡は方形区画内に位置し館跡を構成する5棟と区画外に1棟が位置する。方形区画内の51～55号掘立柱建物跡、区画外に位置する47号掘立柱建物跡のいずれも中世に属すると判断した。なお、以下



47号掘立柱建物跡

P 1 堆積土

- 1 暗褐色土 10Y R3/3 (NP・炭化物・黄褐色粘土多量含む)
- 2 黒褐色土 10Y R3/2 (黄褐色粘土と黒色土の混土)
- 3 黒褐色粘土 10Y R2/2 (黄褐色粘土少量含む)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色粘土 10Y R3/2 (NP・炭化物・黄褐色粘土少量含む)

P 3 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/3 (NP・炭化物・黄褐色粘土少量含む)

P 4 堆積土

- 1 黒褐色粘土 10Y R3/2 (NP・炭化物・黄褐色粘土含む)
- 2 暗褐色粘土 10Y R3/3 (黄褐色粘土と黒色土の混土)

P 5 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/3 (黄褐色粘土多量含む)
- 2 黒褐色土 10Y R2/2 (炭化物・黄褐色土少量含む)

P 6 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (NP・炭化物・黄褐色粘土を含む)

P 7 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (NP・炭化物・黄褐色粘土多量含む)
- 2 褐色粘土 10Y R4/4 (黒色土少量含む)
- 3 暗褐色粘土 10Y R3/3 (黄褐色粘土含む)

P 8 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (NP・黄褐色粘土少量含む)

P 9 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/3 (NP・黄褐色粘土少量含む)
- 2 黒褐色土 10Y R2/2 (NP・黄褐色粘土多量含む)
- 3 明黄褐色粘土 10Y R6/6
- 4 黒褐色土 10Y R3/2 (NP・黄褐色土含む)

P10堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (NP・炭化物極少量、黄褐色土較含む)

P11堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (黄褐色土少量含む)
- 2 暗褐色土 10Y R3/3 (黄褐色土と黒褐色土の混土)

P 13 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (NP・炭化物・黄褐色粘土少量含む)

- 2 暗褐色土 10Y R3/3 (黄褐色土と黒色土の混土)

P 14 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (NP・炭化物・黄褐色土少量含む)

- 2 暗褐色土 10Y R3/3 (黄褐色粘土と黒色土の混土)

- 3 黒褐色粘土 10Y R3/2 (黄褐色土少量含む)

P 15 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (黄褐色粘土少量含む)

- 2 暗褐色土 10Y R3/3 (黄褐色多量と黒色土の混土)

P 16 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (NP・炭化物・黄褐色粘土少量含む)

- 2 褐色粘土 10Y R4/4 (黄褐色粘土と黒色土の混土)

P 17 堆積土

- 1 暗褐色土 10Y R3/3 (黄褐色粘土と黒色土の混土)

- 2 黒褐色粘土 10Y R2/2 (黄褐色粘土少量含む)

- 3 明黄褐色粘土 10Y R6/6 (黒色土少量含む)

P 18 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (黄褐色粘土と黒色土の混土)

G P 2 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (NP・炭化物・黄褐色粘土含む)

G P 15 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (黄褐色土較含む)

G P 51 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (黄褐色土境含む)

G P 53 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (NP・黄褐色粘土少量含む)

図22 47号掘立柱建物跡

て報告する柱間距離は柱痕遺存の場合は芯々間距離、その他は掘形中央間を計測値とした。

47号掘立柱建物跡 本遺構は北区のD5-A7グリッドに位置する建物跡である。配列構成が認められた18個の小穴を本建物跡と認定した。検出面はLⅢ面である。平面的には122・123号土坑や多数の小穴との重複が認められる。122・123号土坑よりは新しい。本建物跡の南東隅が近世の井戸跡によって壊されているが、平面形が長方形となる建物跡と推測される。南北軸のP10-P14は約4.2m、東西軸のP1-P14は約7.8mを測る。主軸方位は南北軸を主軸とした場合N26°Eとなる。建物跡を構成する柱穴の平面形は、円形または隅丸方形である。規模は直径25~40cm、検出面からの深さは15~56cmを測る。P1・7・11には柱痕が認められた。

本遺構の機能時期については、出土遺物がなく明確ではないが、方形区画内で検出された51~55号掘立柱建物跡と同様に中世以降の時期と推測している。

51号掘立柱建物跡 本遺構は北区のC5-F4・5グリッドに位置する建物跡である。規則的に配列構成が認められた7個の柱穴を本建物跡と認定した。柱穴はLⅡ面で認められたが、柱穴が著しく多い地区であったためにLⅡを掘り下げ、LⅢ面を検出面としている。本建物跡は、46号溝跡に軸線を合わせて面している。館跡内の中央で最も南に面した位置に造られている。平面的には158号土坑や多数の柱穴との重複が認められるが、前後関係は不明である。

本建物跡は東西北2間、南1間の平面形が正方形となる建物跡である。南北軸のP1-P3は約4.2m、P4-P6は約4.1mを測る。東西軸のP1-P6は約4.1m、P3-P4は約4mを測る。四隅の柱穴で囲まれた範囲の面積は、16.8㎡である。主軸方位は南北軸を主軸とした場合N14°Eとなる。建物跡を構成する柱穴の平面形は、円形または楕円形である。規模は直径約30~40cmを測

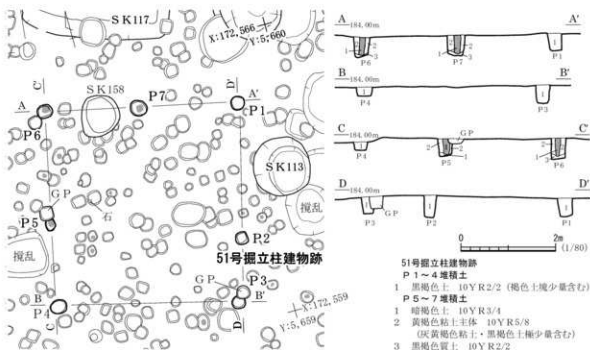


図23 51号掘立柱建物跡

る。検出面からの深さは、約20~50cmであり、南に位置するP3・4が浅い。この南に位置する柱穴の深さが浅いということは、溝跡の北側が土盛りされ土塁状の高まりを掘り込んで柱を建てていた可能性もあると想像できる。掘形内堆積土はP1~4は単層で、褐色土塊を含んだ黒色土層である。土に締りがある。P5~7は柱痕が認められた。堆積土から掘形底面上のℓ3の上にℓ1とした柱を立て、その周囲を黄褐色粘土層のℓ2を充填して構築している様子が看取できる。

本遺構は平面形が正方形となる掘立柱建物跡である。P5~7では柱痕が認められた。機能時期については、出土遺物がなく明確ではないが、52~55号掘立柱建物跡や46号溝跡など、関連して構築された建物跡であると推測できる。

52号掘立柱建物跡 本遺構は北区のC5-F3・4グリッドに位置する建物跡である。規則的に配列構成が認められた6個の柱穴を本建物跡と認定した。柱穴はLⅡ面で認められたが、小穴が著しく多い地区であったためにLⅡを掘り下げ、LⅢを検出面としている。本建物跡は、方形の区画内を北西から南西へのびる44号溝跡に軸線をほぼ合わせて面している。館跡内のほぼ中央に位置して造られている。平面的には多数の小穴との重複やI17号土坑と近接するが、前後関係は不明である。本建物跡は東西2間、南北1間の平面形が長方形となる建物跡である。南北軸のP1-P2は約3.9m、P4-P5は約4.3mを測る。東西軸のP5-P1は約4.7m、P2-P4は約4.7mを測る。四隅の柱穴で囲まれた範囲の面積は、19.2㎡である。主軸方位は南北軸を主軸とした場合N9°E

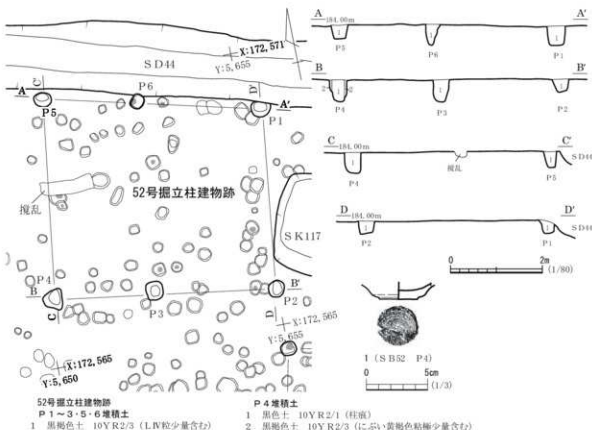


図24 52号掘立柱建物跡・出土土器

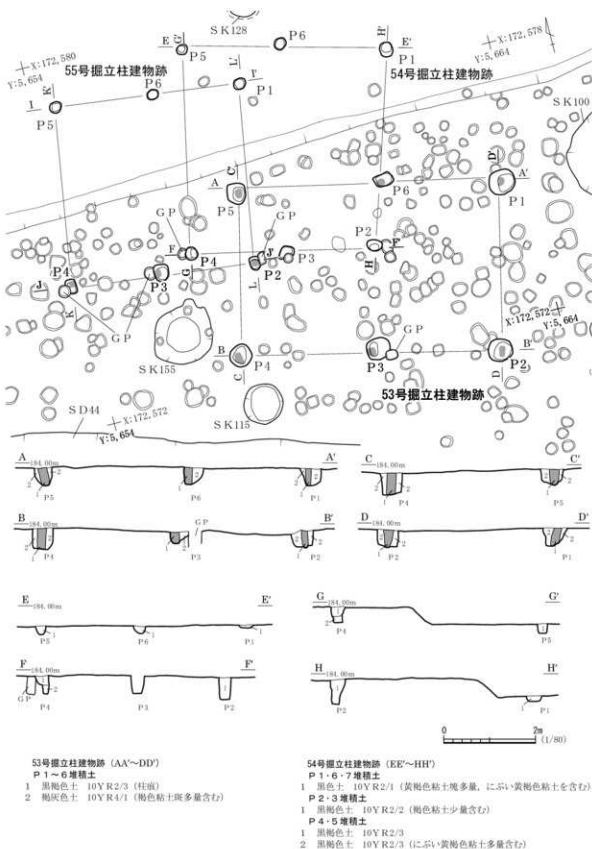


図25 53~55号掘立柱建物跡 (1)

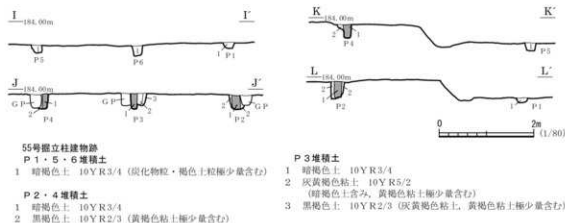


図26 53～55号掘立柱建物跡(2)

となる。建物跡を構成する柱穴の平面形は、やや不整な楕円形である。規模は直径約35～45cmを測る。検出面からの深さは、約25～45cmである。掘形内堆積土はP 1～3・5・6は単層で、褐色粒を含んだ黒色土層である。P 5は柱痕が認められた。

本遺構は平面形が長方形となる掘立柱建物跡である。P 4では柱痕が認められた。本遺構の機能時期については、51号掘立柱建物跡同様、中世に属すと考えている。

53～55号掘立柱建物跡 53～55号掘立柱建物跡は北区の方形館跡内のほぼ中央に認められた。53・54号掘立柱建物跡はC 5-F 3・G 3グリッド、55号掘立柱建物跡はC 5-F 3グリッドに位置する。規則的に配列構成が認められた、それぞれ6個の柱穴を各掘立柱建物跡と認定した。柱穴はL II面で認められたが、小穴が著しく多い地区であったためにL IIを掘り下げ、L IIIを検出面としている。これらの建物跡は、44・46号溝跡に軸線をほぼ合わせて構築されている。館跡内のほぼ中央に位置して造られている。平面的に重複していることから、3時期の変遷が想定できる。

53号掘立柱建物跡は東西2間、南北1間の平面形が長方形となる建物跡である。南北軸のP 1-P 2は約3.7m、P 4-P 5は約3.6mを測る。東西軸のP 5-P 1は約5.7m、P 2-P 4は約5.8mを測る。四隅の柱穴で囲まれた範囲の面積は、21.5m²である。主軸方位は南北軸を主軸とした場合N13°Eとなる。建物跡を構成する柱穴の平面形は、やや不整な楕円形である。規模は直径36～52cmを測る。検出面からの深さは、24～44cmである。すべての柱穴に柱痕が認められ、掘形内堆積土は柱痕であるℓ 1と掘形埋土であるℓ 2が認められた。

54号掘立柱建物跡は東西2間、南北1間の平面形が長方形となる建物跡である。南北軸のP 1-P 2は約4.2m、P 4-P 5は約4.4mを測る。東西軸のP 1-P 5は約4.4m、P 2-P 4は約4.0mを測る。四隅の柱穴で囲まれた範囲の面積は、18.0m²である。主軸方位は南北軸を主軸とした場合N17°Eとなる。建物跡を構成する柱穴の平面形は、ほぼ円形である。規模は直径26～28cmを測る。P 1・5・6が位置する北側が40cm程度削平されてしまっているため、北側の柱穴の深さは浅くなっている。検出面から底面までの深さは、10～54cmである。堆積土は黒色土や黒褐色土を主体とした

層が認められた。

55号掘立柱建物跡は東西2間、南北1間の平面形が長方形となる建物跡である。55号掘立柱建物跡は南北軸のP1-P2は約3.9m、P4-P5は約4.0mを測る。東西軸のP1-P5は約4.0m、P2-P4は約4.0mを測る。四隅の柱穴で囲まれた範囲の面積は、15.8㎡である。主軸方位は南北軸を主軸とした場合N12°Eとなる。建物跡を構成する柱穴の平面形は、ほぼ円形となる。規模は直径24~36cmを測る。54号掘立柱建物跡と同様にP1・5・6が位置する北側が40cm程度削平されてしまっているため、北側の柱穴の深さは浅くなっている。検出面から底面までの深さは、14~36cmである。P2~4で柱痕が認められた。掘形内は黄褐色粘土や黒褐色土で埋められていた。

53~55号掘立柱建物跡は平面形が正方形または長方形となる掘立柱建物跡である。機能した時期は、51・52号掘立柱建物跡や44・46号溝跡などと関連した建物跡の可能性が考えられる。

2. 土 坑 (図27~35, 写真29~32・63)

本時期に該当する北区で検出された土坑は、34基を数える。検出された土坑は形状や堆積土による分類が可能である。まず中世と近世以降の土坑に大別し、さらにそれぞれの遺構を形状により細別した。出土遺物が認められず、遺構の構築年代が明確にわかるものは少ないが、多くの土坑は中世から近世にかけての時期として認識している。

66・113・115・118~120・123・124・130・149号土坑に関して、各土坑の出土遺物は放射性炭素年代測定法を用いて年代値を推測している。以下、遺構番号ごとではなく、類別に記述する。さらに必要に応じて個別に説明を加える。遺物については、最後にまとめて記述する。

A群土坑 (66・113・115・116・118・119・123・125・127~131・134・149~160・162号土坑)
機能した年代が中世から近世に属すると考えられる土坑である。時期を特定できる遺物の出土は少なかった。方形区画内に認められた土坑やその土坑に形状や堆積土の質が類似していることから判断した。土坑の多くは方形区画内に散在して認められた。また、区画外である46号溝跡の東からも認められている。A群土坑は、検出面から底面までの深さによって1~3類に細分した。

1類 平面形が円形基調で、検出面から底面までの深さが1m以上の土坑を本類とした。堆積土は黒褐色土・黒褐色粘土を主体とする。66・113・115・118・119・123・125・129・130・134・149・150号土坑が該当する。1類土坑の分布状況は、方形区画内外に散在している。区画内に認められた土坑は、66・113・115・118・119・125・129・130・134・149・150号土坑である。区画外に位置する土坑は、66・123・134・149・150号土坑である。区画外にある土坑は、すべて区画溝の東に位置する。

1類土坑の平面形は、円形を基調としている。129・130号土坑の平面形は楕円形であるが、円形基調の形状には大きく逸脱するものではない。検出面が開いてから垂直に底面へ至る土坑である113・118・123・134・149・150号土坑と検出面からほぼ垂直に底面へ至る115・119・125・129・130号土坑がある。土坑底面は平坦またはやや丸みを帯びている。検出面から底面までの深さは、102

～240cmを測る。土坑内堆積土の多くは1～3層の人為堆積層を示す。66号土坑は方形区画内の北端に認められた。

これら1類土坑は、北区の土坑群の大部分を占める土坑である。掘削深度も深いことから、当時は井戸跡として機能していたと判断できる土坑である。また、ほとんどの遺構で調査中に湧水した。掘立柱建物跡や区画溝と関連し、館跡内の一施設として構築された遺構であろう。ただ、区画内には多くの井戸跡が検出され、重複・近接している遺構も認められることから使用時期には時間的差異があったものと判断しているが、今回の調査では詳細な時期差については判明できなかった。

2類 1類土坑と類似するが、検出面から底面までの深さが1m未満の土坑を本類とした。116・124・127・128・131・151号土坑が該当する。分布域は区画内外に散在して認められた。116・127・128号土坑は方形区画内、124・131・151号土坑は方形区画外に位置する。形状は1類土坑と変わりなく、検出時においての判別は困難である。また、堆積土も1類土坑との大きな差異は認められない。このことから、機能としては、1類土坑同様に井戸跡であった可能性が高い。しかし、掘削深度が湧水点まで掘り下げられていない土坑が認められることなど、井戸跡と判断するにはやや課題が残る。その他の機能として、ゴミ穴や貯蔵穴などの機能を有していたとも考えられる。

3類 検出面から底面までの深さを計測できなかった遺構をまとめた。152～160・162号土坑である。平面形や堆積土から、その多くは井戸跡として機能していたと考えている。

B群土坑 (117・120・124・126・135・136・161号土坑) 近世以降または時期不明な土坑である。分布域は、北区の中央から東にかけて散在して認められた。B群土坑は平面形から3類に分類した。

1類 円形を基調とした土坑である。120・124・126・135・161号土坑を本類とした。方形区画内に位置し、126号土坑は44号溝跡の2m北に認められた。127号土坑と接している。120・124号土坑は区画溝よりも東、135号土坑は西に位置する。161号土坑は北区ほぼ中央の方形区画内南東隅に位置する。いずれも検出面から底面までの深さは1m超であることから、井戸跡として機能していたと判断している。また、いずれも掘削時に湧水が認められた。161号土坑では本調査で唯一、掘り下げ時に人頭大の礫を部分的に据えて補強している様子が認められた。

2類 隅丸方形の土坑である。66・136号土坑を本類とした。136号土坑は区画溝である46号溝跡西端において重複していて、本土坑が古い。136号土坑の検出面から底面までの深さは97cmを測るが、溝跡で上端は掘削されたことを考慮すると、深さ1m以上であったことは想像に難くない。いずれの土坑も井戸跡として機能していたと想定している。136号土坑は方形区画を造る以前に井戸跡として利用されていたことから、この地は方形館跡構築以前から利用されていたことがわかる。

3類 方形を基調とする大型の土坑である。117号土坑が該当する。方形区画内のほぼ中央に位置する。52号建物跡と接し、44号溝跡に面している。規模は約3.14×2.20mを測る。検出面から底面までの深さは36cmである。底面は平坦に造られている。底面から壁面にかけてはやや丸みを帯びて立ち上がっている。底面には柱穴や焼土面などは認められなかった。堆積土は黒褐色土を主体とした層で、自然堆積と判断できる。中世の遺跡で認められる堅穴状遺構であることも考慮して調査

第2章 北区の調査成果

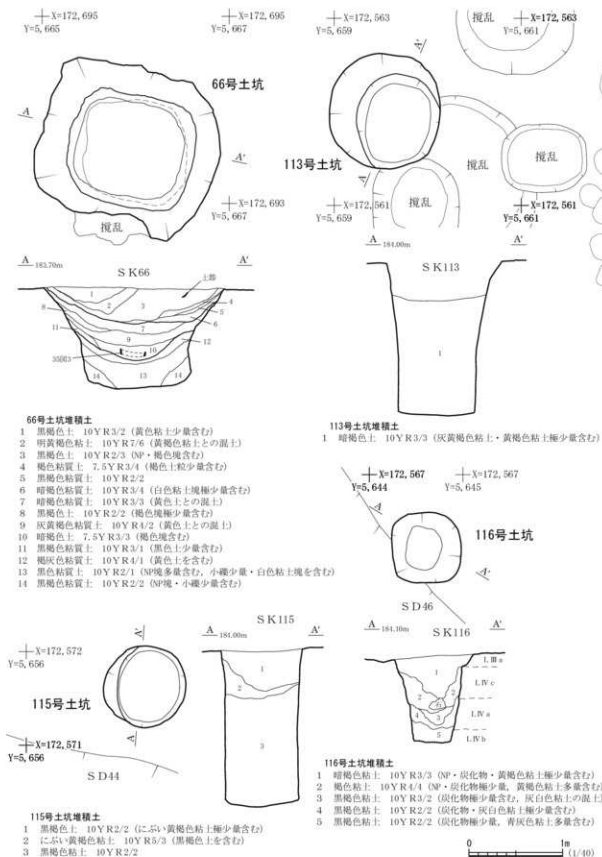


図27 66・113・115・116号土坑

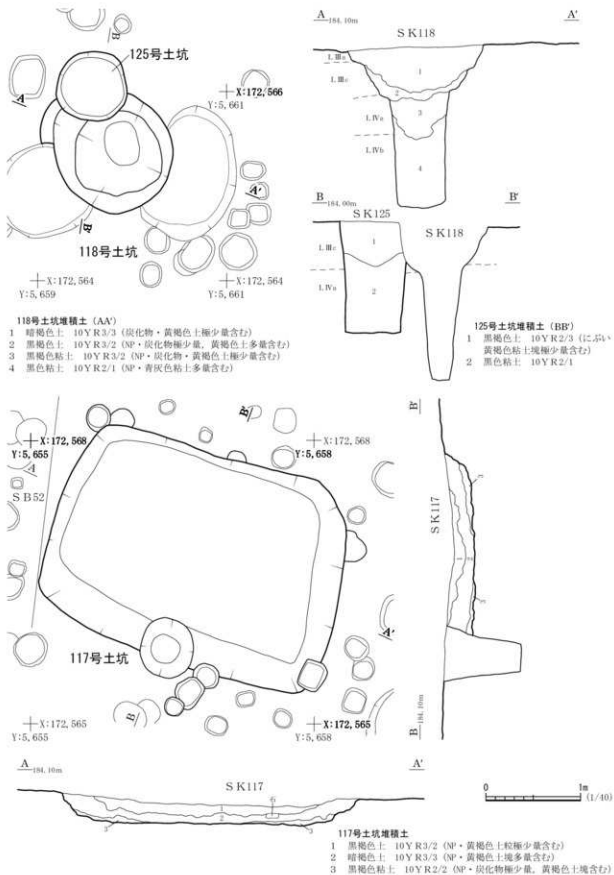


図28 117・118・125号土坑

第2章 北区の調査成果

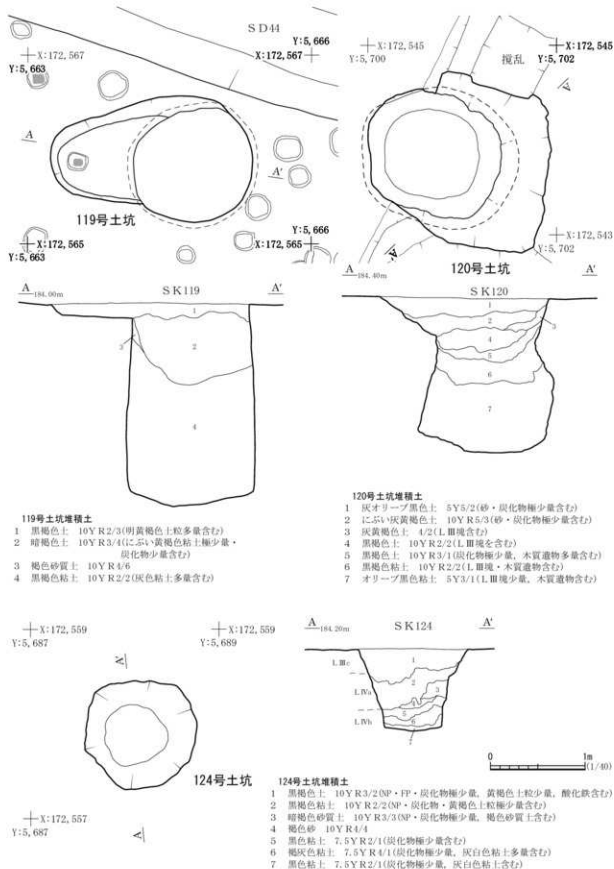


図29 119・120・124号土坑

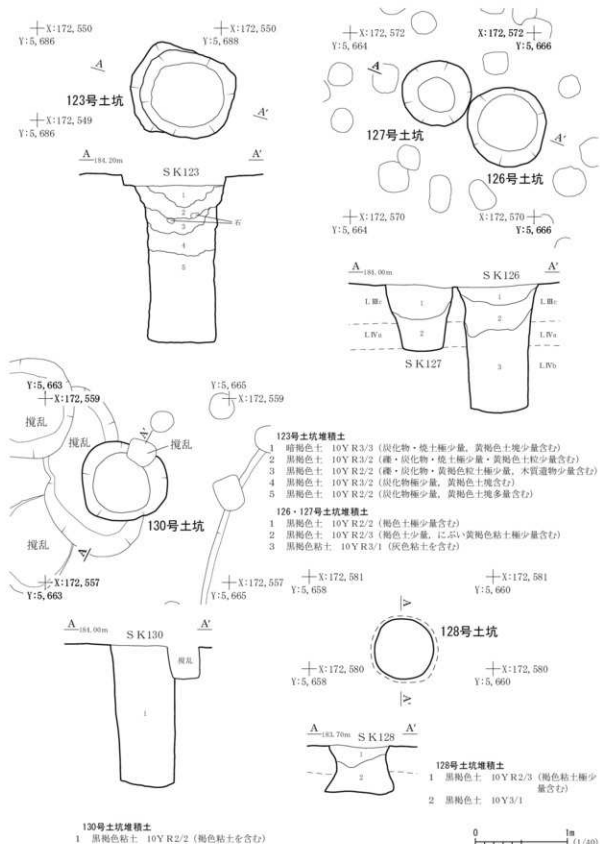


図30 123・126~128・130号土坑

第2章 北区の調査成果

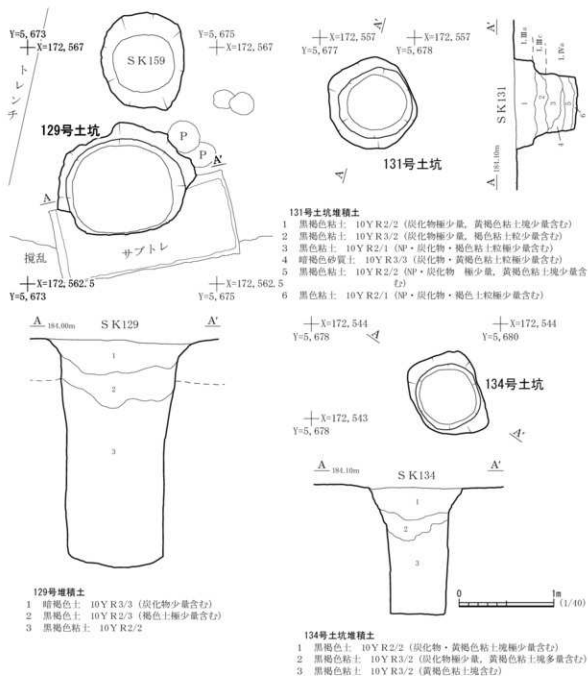


図31 129・131・134号土坑

を行ったが、重複関係や出土遺物から近世と判断した。機能を判断する所見は得られていない。

土坑出土遺物 (図33~35, 写真63) 各土坑内から出土した遺物を記述する。出土した遺物は、曲物・木製品がほとんどで、土器などの年代を想定できる資料は少ない。

図33・34には120号土坑出土遺物を図示した。本土坑からは多量の木製品が出土した。今回の調査で出土した木製品の約半数を占める。井戸跡として利用された後に、ゴミ穴として再利用されたと推測できる。図33-1は小箱とした。文箱や箸箱のような用途が考えられる。背はやや反っている。長さ20.3cm, 幅4.7cm, 厚さ2.3cmを測る。内面は長さ16.4cm, 幅1.4cm, 厚さ1cmほど斜り貫い

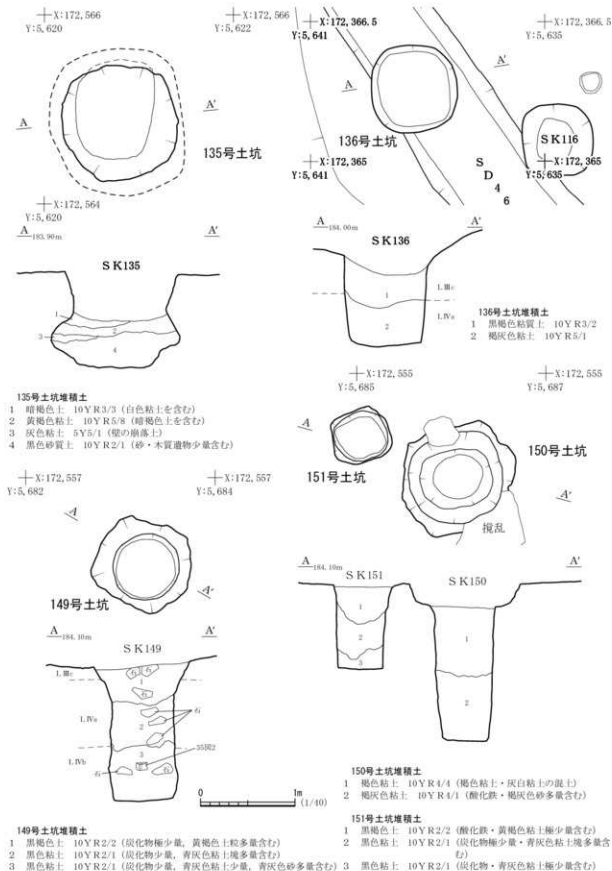


図32 135・136・149～151号土坑

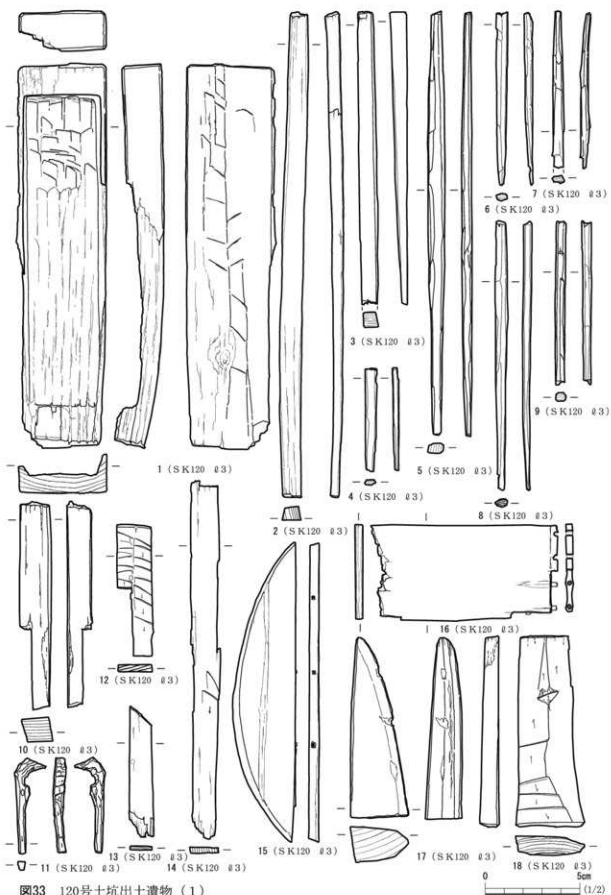


図33 120号土坑出土遺物 (1)

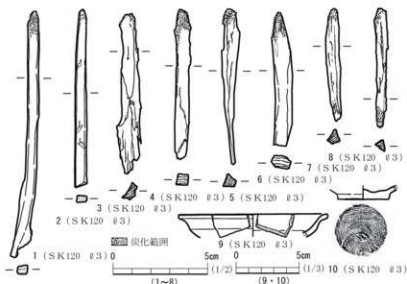


図34 120号土坑出土遺物（2）

5は完形品で、長さ22.5cmを測る。10は3cm四方の角材である。11は軸の先端に挟りを入れた鉤状の木製品である。細かく削り落として、挟りを成形している。10・11の用途は不明である。12～14は折敷の側板または曲物の底板と考えられる。幅2cmほどのノミ状工具を用いて、板状に加工された木製品である。15は曲物の底板である。断面には3ヶ所に竹釘が打ち込まれている状況が確認できた。底板の接合方法が明瞭にわかる資料である。16は折敷の側板端部である。竹釘を用いた折敷の組み合わせ方が看取できる資料である。17は刀形をした木製品である。断面は舟形になる。残存部位からは、どのような木製品になるのか不明である。18は板材とした。工具痕が観察できるが、まだ成形途中であるようで未成品と判断した。

図34-1～8には火付木を掲載した。1～7は一方の先端にのみ、燃焼の痕跡が確認できる。8では両端に燃焼した痕跡が認められることから、両端ともに使用されたようである。これらの火付木には工具痕が認められることから、箸からの転用品である可能性も考えられる。9は貫入が認められる灰軸陶器片である。器形は皿になるだろうか。口縁部が外反する器形である。断面には漆の塗布が観察できることから、破損後に漆を用いて破損部位を接合し、再利用したと想定できる。10にはかわらけの底部を掲載した。底部には回転糸切痕が明瞭に残る。

図35には66・113・115・124・125・130・149号土坑出土木製品を図示した。1～3には曲物を掲載した。1は124号から出土した。杉の樹種は不明である。直径は10.6cm、高さ20.5cmを測る。合わせ目は樹皮で綴じられている。2は149号土坑から出土した完形品のひしゃくの頭である。直径10.6cmを測る。綴じ目の背後に柄を差し込む孔が確認できる。3は66号土坑出土曲物である。直径は26.5cm、高さは5.3cmを測る。井戸跡と考えられる土坑からの出土であるが、井筒とするにはやや小さいようである。道具として使用後、井戸跡に廃棄された資料と判断している。合わせ目に使用されたであろう綴じ皮は認められなかった。4・5には板材を掲載した。4は125号土坑から出土した。桶の材と考えられる。側板の立ち上がりが緩いので、比較的浅い桶であったと推測できる。

て凹みを成形している。内外面にノミ状の工具痕が認められる。2は細長い角棒状の木製品である。先端から末端まで遺存し、長さ25.7cmを測る。箸などの材料やひしゃくの柄とも考えられるが、用途は不明である。3～9は箸と判断した。幅や厚さは1cm弱に成形している。箸の断面形は正方形または六角形に作られている。

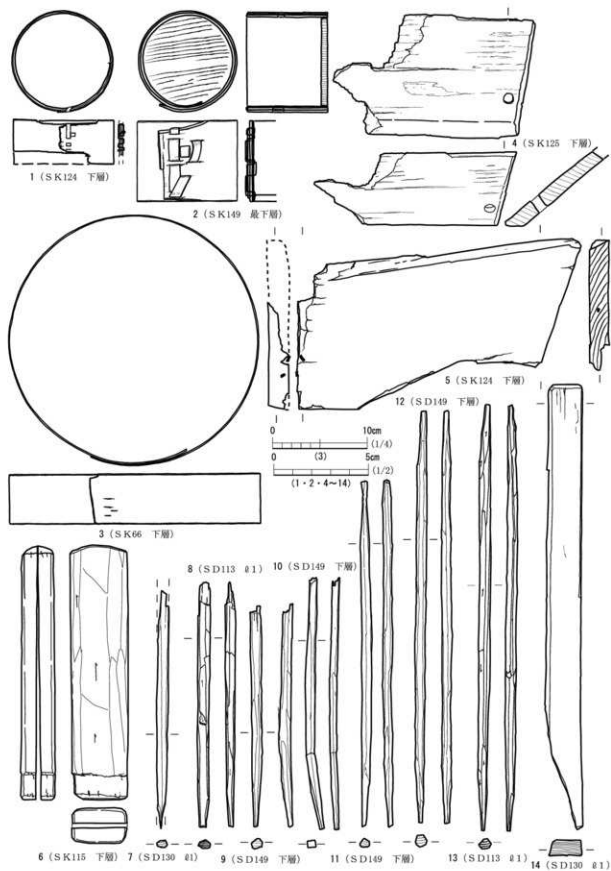


図35 66・113・115・124・125・130・149号土坑，グリッド・ビット，木質出土遺物

側板の下方には孔が穿たれている。5は124号土坑出土で、組み合わせ箱の側板と判断した。断面には角鉄釘が認められ、この鉄釘を用いて組み合わせていた。6は115号土坑の底面近くから出土した、刀子の柄である。一つの材を半分に分割し、切断面は茎を装填できるように削り出している。切断面には装填されていた刀子の錆が付着していた。刀子の身は認められなかった。

7～13には箸を掲載した。7は130号土坑、8・13は113号土坑、9～12は149号土坑より出土した。7～10は欠損した箸、11～13は完品である。7は両端欠損、8～10は箸先だけが遺存する。13は両端とも先細りしていることから、両端を箸先として使用する祝箸である可能性も考えられる。11の長さは18.3cm、12の長さは21.8cm、13の長さは22.5cmを測ることから、箸の長さを一咫半と推測すると11は女性、12・13は男性用とも理解できる。14は130号土坑から出土した。断面長方形をした細長い角状木製品である。先端が欠損しているが、長さ23.5cmを測る。用途は不明である。

3. 溝 跡 (図36・37, 写真33・37)

本時期に該当する溝跡は39・44～47号溝跡の5条である。44～47号溝跡は北区中央に認められる溝跡である。45・46号溝跡が方形館の区画溝として機能していたと考えられる。44号溝跡は方形館跡内部を隔てる区画溝である。これらの溝跡により、方形館の区画を形成している。いずれの溝跡もほぼ直線的に掘られ、主軸方位が建物跡と一致する。水路や宅地跡の攪乱により破壊され、遺存状況は悪い。47号溝跡は方形区画外に位置する溝跡である。39号溝跡は自然流路と判断した。

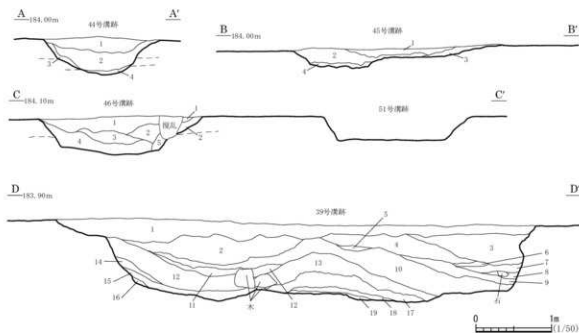
39号溝跡 本遺構は北区の北東端に溝跡の一部のみが認められた溝跡である。C4-H10・J10, C5-G1・H1・J1グリッドに位置する。検出面は他の遺構検出面よりも、30cm程削平されている。規模は検出面で幅約7m、溝底面で幅約4mになる。検出面から底面までの深さは1m程にもなる。周囲の地形から類推すると、北西方向の湯川に向かって流れていたものと推測される。堆積状況から埋没を繰り返しながらも流路として機能し、何時期かの変遷が認められる。

堆積土中の出土遺物から、部分的には近代初頭まで開口していたと考えられる自然流路である。想像を逞くすれば、この溝跡は方形館跡の北方の区画溝であった溝跡を掘り下げ、幅を広げて再利用していたものか、または北側の区画として、もともとあった自然流路を区画溝として利用していた可能性も考慮できる。また、明治期の地籍図には本溝跡と思われる溝跡が描かれている。

44号溝跡 本溝跡は北区中央部に認められた。C5-E3, F3・4, G4, H4グリッドに位置する。46号溝跡によって方形に囲まれた範囲の中央に位置している。46号溝跡と軸線と同じくし、ほぼまっすぐにのびている。東端はトレンチで破壊されているため不明であるが、西端は急激に立ち上がる。46号溝跡にも繋がらない溝である。本溝跡によって方形区画内を南北に分割するが、遺構の検出状況から南北の区域の利用状況には、差異は認められなかった。検出面においての幅は約1m、底面幅は60cmほどである。検出面から底面までの深さは50cmを測る。

堆積土中からは弥生土器片が出土している。小破片であるため、図示していない。時期的には46号溝跡と軸線をあわせて造られていることから、46号溝跡と同時期であると考えられる。

第2章 北区の調査成果



44号溝跡増積土(AA)

- 1 褐色土: 10Y R4/6(黄褐色粘土多量含む)
- 2 暗褐色土: 10Y R3/4(にぶい、黄褐色粘土を含む)
- 3 黄褐色土: 10Y R5/6(暗褐色土粒極少量含む)
- 4 黒褐色粘土: 10Y R2/3

45号溝跡増積土(BB)

- 1 黒褐色粘土: 10Y R2/2(炭化物, 褐色粘土塊極少量)
- 2 暗褐色粘土: 10Y R3/2(NP, 炭化物極少量, 黄褐色粘土塊少量含む)
- 3 暗褐色土: 10Y R3/3(NP, 砂極少量, 黄褐色粘土塊少量含む)
- 4 黒褐色粘土: 10Y R3/2(NP極少量, 黄褐色粘土・灰白色粘土を含む)

46号溝跡増積土(CC)

- 1 暗褐色土: 10Y R3/4(炭化粒極少量含む)
- 2 暗褐色砂質土: 10Y R3/4(炭化粒極少量含む)
- 3 黒褐色粘質土: 10Y R2/3(褐色粘土塊少量含む)
- 4 黒褐色粘土: 10Y R2/2(褐色粘土を含む)

39号溝跡増積土(DD)

- 1 褐色土: 10Y R4/1(耕作土, 褐色土粒多量含む)
- 2 黒褐色土: 10Y R3/1(NP・炭化物・褐色土粒含む)
- 3 灰黄褐色土: 10Y R5/2(黒褐色土と黄褐色土の混土)
- 4 褐色土: 10Y R4/1(砂多量含む)
- 5 灰黄褐色土: 10Y R4/2(薄い砂層が入る)
- 6 褐色土: 10Y R4/1(薄い砂層が入る)
- 7 黒色粘質土: 5Y 2/1
- 8 オリブ黒色土: 5Y 3/1(薄い砂層が入る)
- 9 オリブ黒色土: 7.5Y R2/2(礫含む, 薄い砂層が入る)
- 10 オリブ黒色粘質土: 7.5Y R3/1(礫少量, 炭化物含む)
- 11 オリブ黒色粘質土: 5Y 2/2(褐色砂少量含む)
- 12 暗オリブ灰色土: 2.5G Y3/1(薄い砂層が入る)
- 13 オリブ黒色土: 5G Y2/1(砂と黒色粘質土の混土)
- 14 黒褐色粘質土: 2.5Y 3/1(褐色砂粒極少量含む)
- 15 オリブ黒色土: 5Y 3/1(礫多量含む)
- 16 オリブ黒色土: 5Y 3/1(薄い砂層が入る)
- 17 黒色土: 5Y 2/1(薄い砂層が入る)
- 18 オリブ黒色土: 5Y 3/1(礫多量含む)
- 19 オリブ黒色土: 7.5Y 3/1(薄い砂層が入る)

図36 39・44～46号溝跡

45号溝跡 本溝跡は北区中央の南寄りに認められた。C5-D5・D6～8グリッドに位置する。46号溝跡の南に位置し、方形の区画を描く。46号溝跡と連結して、2つの区画溝を構成する。本溝跡は46号溝跡の南に位置し、馬出し状の縄張りを描く。このことから、方形館跡は2つの方形区画溝をもつ連郭式の館跡であった可能性が高い。45号溝跡で囲まれた東西長は約22mである。45・46号溝跡で囲まれた南北長は約15mを測る。検出面の幅約3mである。検出面から底面までの深さは、約25cmである。底面には段が認められ、南側が10cm程度低く造られている。

本遺構から出土した図37-11の破損した砥石を図示した。遺存するすべての面で研磨痕が確認できる。遺棄されたものと考えられる。

46号溝跡 本溝跡は北区中央に認められた。攪乱や削平を受け、遺存状況は悪い。C5-E4・F5, F5, G5, H4～6, I2～4に位置する。北区中央部を大きく方形に区画する溝跡である。

調査区北東から直線的に南へ認められ、H5グリッドで直角に曲がり、西方へ直線的にのびる。E5グリッドで方向を北西へわずかに角度を変える。区画された範囲は東西約40m、南北約35mが認められた。南に面する溝跡の底面が立ち上がり、土橋状に溝跡が途切れていることが確認できた。館跡内への出入口施設の可能性がある。出入口施設の前には、45号溝跡で区画された範囲が位置する。検出面の幅は約90～320cmを測る。検出面から底面までは最も深い部分で、約60cmである。重複している遺構は138・160号土坑、51号溝跡で、いずれの遺構よりも新しい。

本遺構から遺物の出土は少なく、明確に時期を想定できる資料は得られなかった。図示したのは図37-4の北宋銭である。底面より出土した。聖宋元寶の行書体である。

47号溝跡 本溝跡は北区南寄り、46号溝跡の南に位置する。C5-H6・I6・I7グリッドに位置する。北西-南東方向に直線的にのびる。いくつかの小穴と重複しているが、本遺構が古いようである。方形館跡を構成する区画溝とは、直接的に関連は認められない。認められた規模は、長さ約16m、幅は30cmほどである。検出面から底面までの深さは浅く、20cm程度である。

本遺構から出土した遺物として、図37-12を図示した。軟質の石材を用いた断面正方形の砥石で、各面ともに使用されている。破損している。本溝跡は方形館跡の区画溝跡とは異なるようである。時間的には、方形館跡の区画溝跡と同時期の中世の範疇で捉えている。

4. その他の遺構と遺物 (図37, 写真6～7, 62・63)

ここでは、その他の遺構として調査区内に点在する小穴群と遺構外出土遺物を報告する。小穴群は建物跡を構成する柱穴と考えられるが、不規則な配置で明確な建物跡として組み合わせなかった。小穴の多くは建物跡として方形館跡と分布域を同じくし、建物跡が検出された区域と重複する。方形区画外では、小穴の検出状況は希薄となる。これらのことから、小穴の多くは方形館跡と同時期と想定している。小穴内からの出土遺物は少なく、図示できる資料も少ない。小穴の形状は円形を基調としたものと方形のものが認められた。異なる小穴の形状から、時期差による形状の相違の可能性も考慮したが、明確に時期差を肯定できる要素が認められなかった。そのため中世以降の小穴であるという言及にとどめる。

中世の遺物は非常に少なく、陶磁器片と渡来銭、石製品、木製品がわずかに出土した。図37-1～10・14はグリッドビット出土遺物を掲載した。1は青磁片である。外反する器形で、碗であろうか。口唇部が肥厚する。2は曲物の底板と考えられる木製品である。全形の4分の1ほどしか遺存していない。3～10は渡来銭を集めた。3～9は宋銭、10は明銭である。3は景德元寶、5は政和通寶である。6は元豊通寶である。7・8は皇宋通寶で、7は行書体、8は篆書体である。9は熙寧元寶である。10は永樂通寶である。14は穀臼の下臼である。破損品である。心棒孔を中心に放射状に溝が刻まれている。磨面は使用による摩滅が著しい。13は遺構外出土の石鉢である。小穴が密集する方形区画内のL1より出土した。破損品である。石質は安山岩で、推定口径は31cmを測る。中近世に属する資料である。

(三 浦)

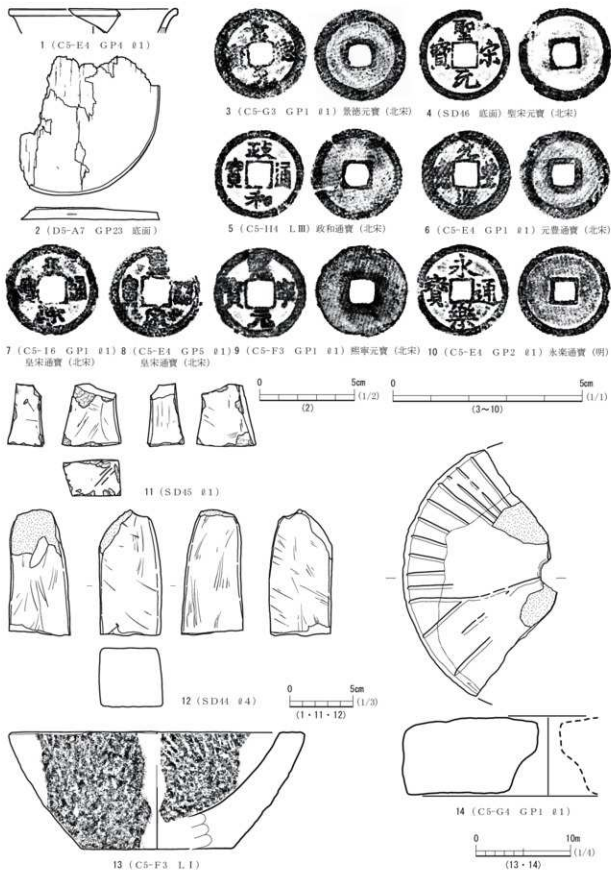


図37 中近世の出土遺物

第3章 南区の調査成果

第1節 遺構の分布

南区は、2次調査区の南東側で、農道から1次調査区までの範囲である。八日町集落から30～40mほど南にあたる。現況は水田で、昭和40年代と平成6年の2回に渡る大規模な圃場整備が行われている。そのため地形の改変が顕著で、遺構や遺物は希薄である。

南区で検出した遺構は、掘立柱建物跡6棟、土坑12基、溝跡4条である。平安時代に属する遺構が中心であり、明確な弥生時代の遺構はなかった。遺物は極めて少なく、弥生土器や平安時代の土器類の他に、井戸跡からは木製品も出土した。

調査区内の基本土層について、水田部分は削平が著しく、耕作土の直下がLⅢbとした黄褐色砂質土である。調査区中央の農道部分は圃場整備による削平が少なく、弥生時代と平安時代の遺物を包含するLⅡがわずかに遺存していた。さらに、この農道部分では遺構が遺存していることから、本来は1次調査と同様な密度で遺構が分布していたのであろう。

掘立柱建物跡は6棟確認した。掘立柱建物跡の周辺には柱穴群が分布することから、本来的には調査区内に数多くの掘立柱建物跡が存在していたのであろう。南側には58号・59号掘立柱建物跡が主軸方向を同じくして分布する。58号掘立柱建物跡は2間×3間以上の側柱建物で、桜町遺跡の中でも大型に属する掘立柱建物跡である。59号掘立柱建物跡は2間×2間の小型総柱建物である。

溝跡はいずれも残りが悪く、部分的に途切れて連続しない。北端部では2次調査で確認した37号溝跡の東側部分を検出している。平安時代の集落を区画する溝の一部であろう。49・50号溝跡は、1次調査の3・9・14号溝跡と関連する溝跡と推定している。堆積土などの特徴から、平安時代以降の溝跡と推定しているが、その機能を特定するだけの所見は得ていない。

139・143号土坑は井戸跡と推定している。139号土坑は素掘りで、遺構の底面や下層から土師器甕が出土している。143号土坑は曲物を転用して井戸枠としている。両遺構ともに、平安時代に属すると考えている。

桜町遺跡の平安時代集落は、南東方向に延びる幅の狭い微高地上に掘立柱建物跡が分布している。さらに2間×3間の側柱建物と2間×2間の総柱建物がセットで分布する傾向が看取でき、1・2次調査の成果とも矛盾しない。このことは桜町遺跡の周辺に位置する屋敷遺跡や上吉田遺跡でも確認でき、会津盆地に点在する平安時代集落のあり方と共通した特徴が見出される。

南区は近年の削平で遺構や遺物が希薄であったが、本来的には数多くの遺構が分布していたと推察される。これまでの調査成果を勘案すれば、3次調査で確認した平安時代の集落だけでなく、弥生時代後期の集落や墓域も存在していた可能性が高い。(大野)

第3章 南区の調査成果

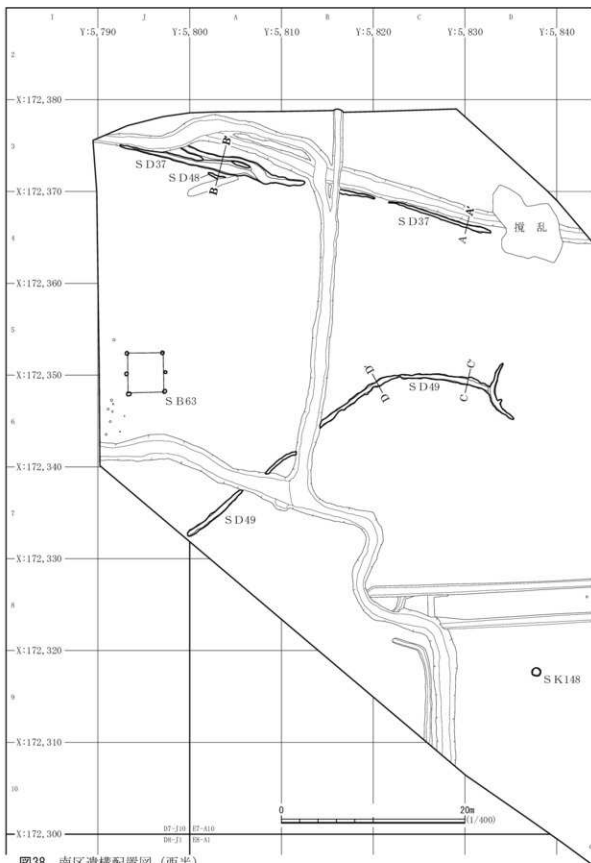


図38 南区遺構配置図 (西半)

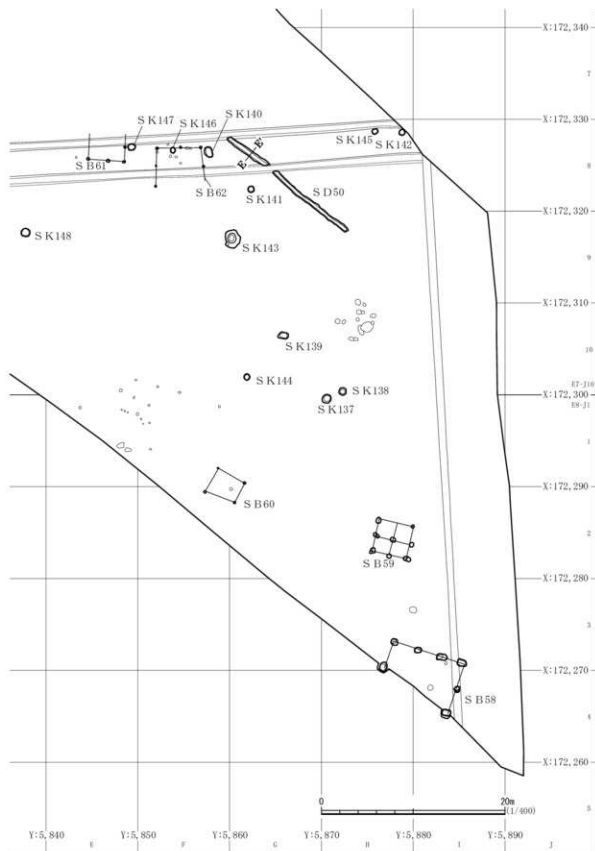


図39 南区遺構配置図(東半)

第2節 掘立柱建物跡

58号掘立柱建物跡 (図40, 写真37~39)

58号掘立柱建物跡は調査区の南東端、E8-H7、I3・I4グリッドに位置する。本建物跡の8m北側に主軸をほぼ同じくする59号掘立柱建物跡が分布する。遺構検出面はLIIIb層である。

本建物跡の南半が調査区外へと続くため、その全容は不明である。東西3間、南北2間を確認した。建物の向きは真北に対して16度東に傾く。北側柱列は8.2m、その柱間距離は2.6~2.8mを測る。柱穴の平面形は隅丸長方形を基調とし、その規模は長辺が50~90cm、短辺が46~70cmを測る。柱痕跡はP1~6で確認した。隅に位置するP2・5の柱痕跡は周壁に接していた。柱材には直径20cm程の丸太材が使われたと考えられる。柱痕跡の堆積土は、焼土や炭化物を含む黒褐色土を基調とする。掘形埋土は、黒色土・黒褐色土・黄褐色土が交互に堆積している。

柱穴から土師器・須恵器・弥生土器が出土している。外面体部下半にはクロコ回転によるヘラケズリが施される。2は土師器の甕の体部で、内外面にカキメ痕が残る。3~7は弥生土器である。3・5は壺の頸部で、3は4本単位の櫛歯状施工具による横位文様が2条巡り、その上位は鋸歯状に区画される。外面は赤彩される。4・6・7は甕の破片である。

本建物跡は全容が不明であるが、桜町遺跡では比較的大型となる掘立柱建物跡である。小型総柱建物跡を伴うことから、居住施設であろう。年代は出土遺物の特徴から、9世紀前半頃と考えている。

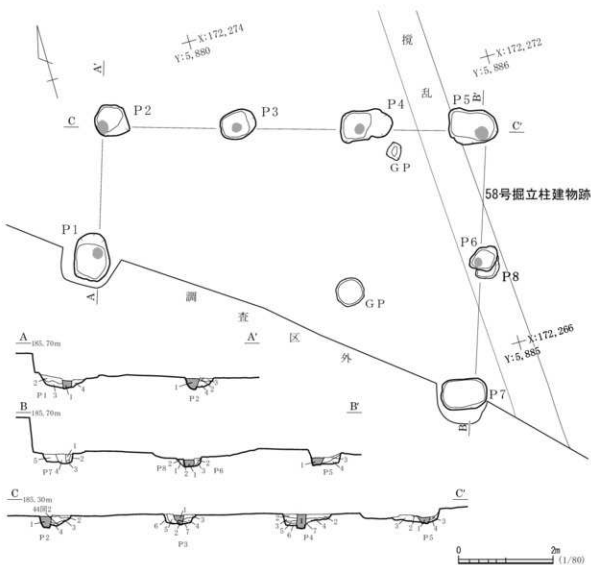
59号掘立柱建物跡 (図41, 写真37・40・41)

本建物跡は、58号掘立柱建物跡の北側8mに主軸方向を揃えて位置する。本建物跡は2間×2間の総柱建物であるが、北側柱列の中央に配される柱穴は確認できない。この特徴は1次調査で確認された5号掘立柱建物跡にも見られる。建物の向きは真北に対して16度東に傾く。

建物跡の平面形はP2が西側にずれるが、ほぼ正方形になる。規模は北側柱列が3.9m、南側柱列が4.26m、東西柱列が3.6~3.7mを測る。柱間距離は1.8~2.2mで、西側の柱間が若干狭くなる。P5・8・10は古い段階の柱穴であり、建て替えの痕跡と判断した。柱穴の平面形は隅丸長方形を基調としている。規模は一辺が30~42cmを測る。柱痕はP6・9・10で確認している。柱痕はいずれも炭化物を含む黒色土である。埋土は黒色土と黄褐色土の混土である。

柱穴から土師器・須恵器・弥生土器が出土している。図44-8・9は桜町I式の弥生土器で、壺の破片である。8は捺糸文を地文とし、押し引き状の沈線文で文様が描かれる。9は櫛歯状施工具による連続波状文が観察できる。

本建物跡は小型の総柱建物である。柱穴に建て替えの痕跡が確認できる。主軸方向を同じくする



58号掘立柱建物跡

P 1 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (焼土塊・灰褐色塊多量含む, 柱根)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (黒褐色土と黄褐色土の混土)
- 3 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 (黒褐色土含む)
- 4 黒褐色土 10YR3/1 (灰褐色砂含む)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (焼土塊多量・粘土塊含む, 柱根)
- 2 黒色土 10YR2/1 (白色砂粒含む)
- 3 にぶい黄褐色粘質土 10YR6/3 (黒褐色土含む)
- 4 灰黄褐色粘質土 10YR5/2 (黒・黒褐色土含む)

P 3 堆積土

- 1 黒褐色砂質土 10YR3/1 (焼土粒含む, 柱根)
- 2 黒褐色土 10YR3/1 (焼土塊・黄色粘土塊含む, 柱根)
- 3 灰黄褐色土 10YR4/2 (灰白色土と黄褐色土の混土)
- 4 黒褐色土 10YR3/1 (黒色土との混土)
- 5 にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3 (黒褐色土含む)
- 6 黒褐色土 10YR3/1 (黄褐色砂含む)
- 7 にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3 (黒褐色土含む)

P 4 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (炭化物・灰黄褐色塊, 褐色塊含む, 柱根)
- 2 黒色土 10YR2/1 (黒褐色土含む)
- 3 褐色砂質土 10YR4/4 (黒褐色砂含む)

- 4 黒褐色土 10YR3/1 (褐色砂含む)
- 5 褐灰色土 10YR4/1 (褐色土粒含む)
- 6 暗褐色砂質土 10YR3/3
- 7 暗褐色砂質土 10YR3/3

P 5 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (褐色塊含む, 柱根)
- 2 黒褐色土 10YR3/2 (黒色土との混土)
- 3 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (砂質・黒褐色土含む)
- 4 褐色土 10YR4/4 (砂質・黒褐色土含む)

P 6 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1 (褐色塊含む, 柱根)
- 2 黄褐色粘質土 10YR5/6 (砂質・黒褐色土極少量含む)
- 3 灰黄褐色土 10YR4/2 (砂質・黒色土含む)

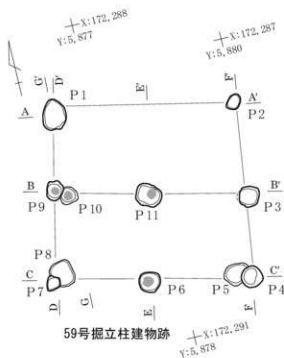
P 7 堆積土

- 1 黒色土 10YR2/1 (炭化物含む)
- 2 黒褐色土 10YR3/1 (褐色砂含む)
- 3 黒色土 10YR2/1 (暗褐色土含む)
- 4 黒褐色土 10YR3/1 (褐色土粒, 暗灰褐色土含む)
- 5 黒褐色土 10YR4/1 (褐色塊多量含む)

P 8 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (褐色塊少量含む)
- 2 灰黄褐色砂質土 10YR4/2 (黒色土含む)

図40 58号掘立柱建物跡



59号掘立柱建物跡

P 1 堆積土

- 1 黒色土・10Y R2/1 (白色砂粒含む)
- 2 灰黄褐色土・10Y R4/2 (黒色土含む)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色土・10Y R3/1 (黄褐色粘土含む)

P 3 堆積土

- 1 黒色土・10Y R2/1 (褐色土粒極少量含む, 柱根)
- 2 黒褐色土・10Y R3/1 (明黄褐色粘土含む)
- 3 黒褐色土・10Y R3/2 (黄褐色粘土含む)

P 4 堆積土

- 1 黒色土・10Y R2/1 (褐色土粒極少量含む)
- 2 黒褐色土・10Y R3/2 (黄褐色粘土含む)

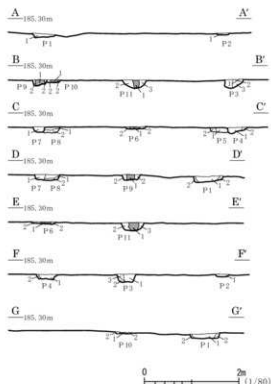
P 5 堆積土

- 1 黒褐色土・10Y R3/2 (黄褐色粘土含む)
- 2 黒褐色土・10Y R3/1 (灰白色粘土, 黄褐色土塊含む)

P 6 堆積土

- 1 黒色土・10Y R2/1 (黄褐色粘土含む)
- 2 灰黄褐色土・10Y R4/2 (黒色土含む)

図41 59号掘立柱建物跡



P 7 堆積土

- 1 黒色土・10Y R2/1 (黄褐色粘土含む)

P 8 堆積土

- 1 黒褐色土・10Y R3/1 (黄褐色土含む)
- 2 黒褐色土・10Y R3/2 (黄褐色土含む)

P 9 堆積土

- 1 黒色土・10Y R2/1 (褐色土粒極少量含む, 柱根)
- 2 灰黄褐色土・10Y R4/2 (黒色土含む)

P 10 堆積土

- 1 黒色砂質土・10Y R2/1 (褐色土含む, 柱根)
- 2 灰黄褐色土・10Y R4/2 (黒色土含む)

P 11 堆積土

- 1 黒色土・10Y R2/1 (黄褐色土粒極少量含む, 柱根)
- 2 黒褐色土・10Y R3/1 (黄褐色土少量含む)
- 3 黒褐色土・10Y R3/2 (黒色土・黄褐色粘土含む)

58号掘立柱建物跡に伴う、倉庫としての役割を想定している。出土遺物が少なく、詳細な存続期間は不明であるが、58号掘立柱建物跡と同時期で、9世紀前半頃と考えている。

60号掘立柱建物跡 (図42, 写真42・43)

調査区の南東, E 8 - F 1・F 2, G 1・G 2 グリッドに位置する。本建物跡の周辺に明確な遺構はないが、北西側に小穴群が分布する。遺構検出面はLⅢbとした砂層である。

本建物跡は1間×1間の規模で、P 3 の位置が北東方向にずれて、平面形が台形をなす。主軸方向は真北に対して28度東に傾く。規模は東西柱列が3.30m~3.48m, 南北柱列が2.40m~2.96mを測る。柱穴の平面形は円形を基調とする。P 3・4の規模は一辺が24cm前後、深さは16cmである。柱痕跡はP 3・4で確認した。

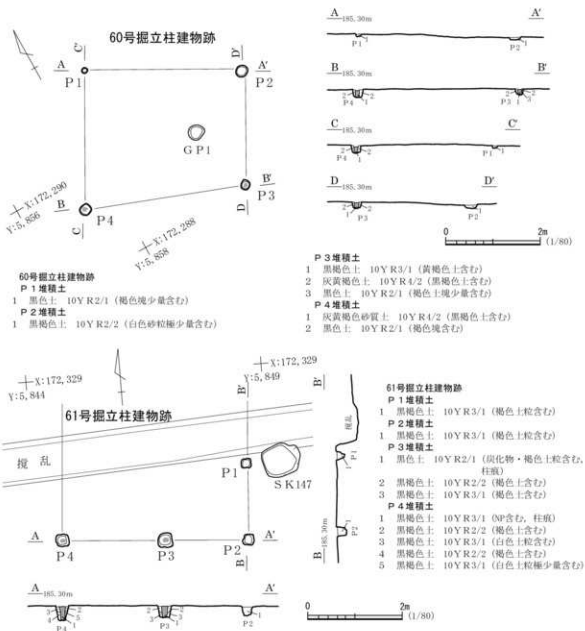


図42 60・61号掘立柱建物跡

本建物跡は簡素な造りの小型建物である。詳細な年代は不明であるが、平安時代の倉庫であろう。

61号掘立柱建物跡 (図42, 写真44・45)

本建物跡は調査区の中央、E7-E8グリッドに位置する。本建物跡と主軸方向を同じくする62号掘立柱建物跡や147号土坑など分布する。遺構検出面はLII層である。

61号掘立柱建物跡は南側柱列と東側柱列の一部を確認した程度で、全体的な規模は不明である。主軸方向は真北に対して12度東に偏る。南側柱列は2間で、その距離は3.96mである。柱間距離は、P2-P3間が1.76m、P3-P4間が2.20mと西側が広い。東側柱列のP1-P2間間は1.7mであ

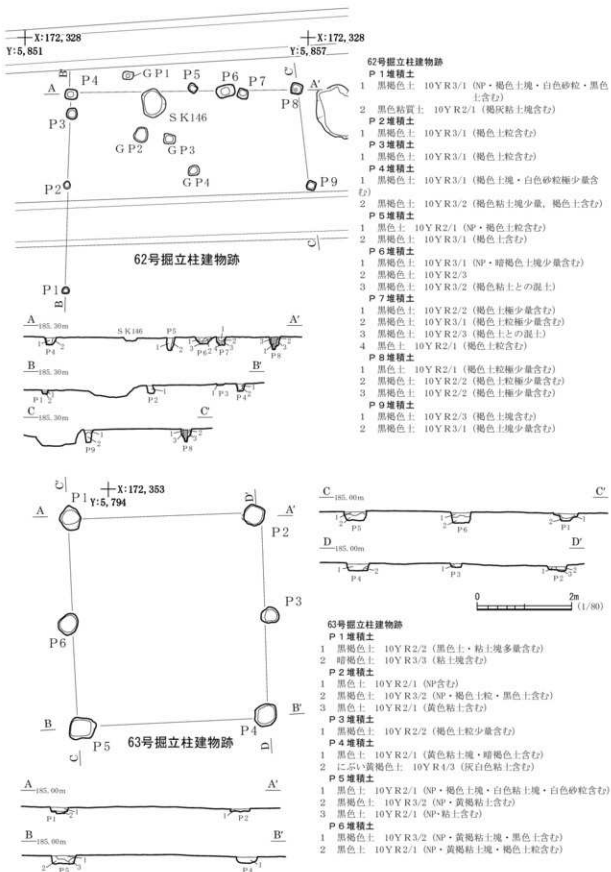


図43 62・63号掘立柱建物跡

る。柱穴の平面形は隅丸方形である。その規模は一辺が20~30cm、深さは20~32cmである。柱痕跡はP 3・4で確認した。柱痕跡の観察から、柱材は直径15cm程の丸太材である。

本建物跡は、62号掘立柱建物に伴う小型倉庫であろう。年代はおおむね平安時代であろう。

62号掘立柱建物跡 (図43, 写真46・47)

本遺構は調査区中央部の農道部分に位置する。本建物跡の周辺には、61号掘立柱建物跡、50号溝跡、140号・146号・147号土坑が分布している。遺構はL IIとした黒色土を掘り込んでいる。

本建物跡は、北側柱列と東西柱列の一部を確認しただけで、全体的な規模は不明である。建物の向きは、近接する61号掘立柱建物跡と平行する。北側柱列は2間で、4.72mを測る。柱間距離はP 4 - P 5間が2.50m、P 5 - P 8間が2.22mと東側が狭い。東西柱列の柱間距離は、2.0m~2.3mである。柱穴の平面形は円形である。規模は直径が30cm前後、深さはP 8が最も深く30cmを測る。本建物跡は、小型建物となる61号掘立柱建物跡を伴う居住施設であろう。

63号掘立柱建物跡 (図43, 写真48・49)

本遺構は調査区北部、D 7 - J 5・J 6グリッドに位置する。周辺は標高184.8mの平坦地である。近年の削平のため、平安時代の遺構は極めて希薄である。遺構検出面はL III c層である。

本建物跡は東西1間、南北2間の側柱建物跡である。建物の向きは西に4度傾く。規模は南北柱列が3.9~4.0m、東西柱列が4.20~4.40mである。東西柱列の柱間距離は2.0~2.2mである。柱穴の平面形は隅丸方形を基調とする。規模は32~58cm、深さは10~24cmである。柱痕は確認できていない。柱穴の埋土は、風化した沼沢火山灰や黄褐色粘土塊を含む黒褐色土である。

本建物跡は、ほぼ南北に主軸を持つ小型建物跡である。年代は平安時代であろう。(大野)

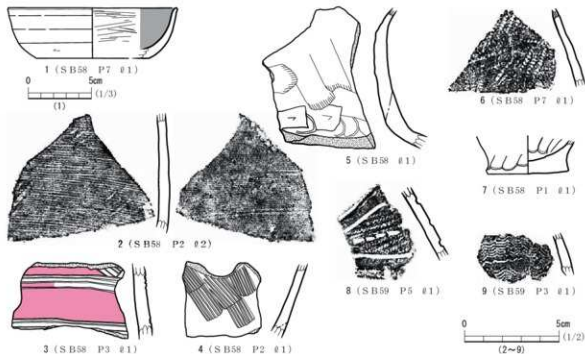


図44 58・59号掘立柱建物跡出土土器

第3節 土 坑 (図45~47, 写真51・52)

調査区南部では、土坑を12基確認した。これら土坑は、近年の水田造成による地形の改変が著しく、遺存状態が極めて悪い。井戸跡と推定した139号・143号土坑を除き、性格や年代を特定できた土坑はない。なお、土坑の出土位置や計測値等は、表4に掲載した。

139号土坑 調査区の中央やや南寄り、E7-F4グリッドに位置する。遺構検出面はLIIIcである。本土坑は曲物を積み上げて井戸側とした井戸跡である。井戸のつくりは、湧水層に達する深さの掘形を掘り、曲物を用いた井戸側を積み重ね、それを裏込め土で固定している。なお、井戸底の水溜め施設や井戸の上屋構造を示す痕跡は確認できない。

掘形上半部は、底面の形状に比べて、大きく不整形になっている。一方、掘形下半部は、整った円筒形である。掘形の上端部で、直径1.05m、短径0.67mを測り、底面の直径が0.53mと狭くなる。底面までの深さは1.03mである。井戸底は湧水層となるLIVbに達している。

曲物は2段分を確認した。下段の側は掘形壁面に接して井戸底から6cm上の部分から設置されている。上段の側は上半部が腐食しているが、井戸底から50cmの高さまで遺存していた。この部分までは井戸跡の廃絶後まで湧水があり、井戸側が腐食せず遺存したのであろう。

遺構内堆積土は9層に分けた。1~8層は井戸の廃絶後に井戸側内に堆積する土である。3~5層は、黒褐色土と黄褐色粘土の混土で、裏込め土の崩落土であろう。9層は井戸と掘形壁面の間に充填された裏込め土である。井戸の痕跡が井戸の上部まで真っ直ぐに認められないことから、井戸を人為的に埋め戻したとは考えにくく、井戸上半部の崩落を起因として廃絶したと推察している。

本土坑からは土師器・須恵器・木質遺物が出土した。土器類は全て1・2層から出土している。図47-5は1層から出土した須恵器長頸瓶の頸部破片である。

8は下段の円筒形曲物で、直径50.8cm、高さ25.5cm、厚さ6mmを測る。樹種はアスナロである。内面には木目に直交するようにケビキ線が1cm間隔で認められる。下端から5cmの部位で綴じ合わせられており、一部樹皮が遺存していた。綴じ皮はサクラの樹皮が用いられ、その幅が0.7cmである。また下端から1cm上部にも樹皮が8箇所認められた。その他に目釘穴の痕跡も4箇所観察できる。底板の固定には竹釘と綴じ皮が用いられている。7は上段の井戸側である。腐食して不明であるが、8と同様な大きさの曲物である。樹種はヒノキ科である。綴じ合わせの痕跡は認められるが、綴じ皮は遺存していない。内面は木目に直交するケビキ線が5mm間隔で密に施されている。

6は井戸枠内から出土した柱目の板材である。樹種はコナラ属である。割材であり、その先端を斜めに裁ち切っている。本遺物の用途は不明である。

本土坑は曲物を積み重ねて井戸とする構造で、桜町遺跡では初見となる例である。本土坑の年代については、井戸枠の放射性炭素年代測定から、9世紀代とする測定結果を得た。この年代観は出土した土器の年代観と大きく矛盾しない。

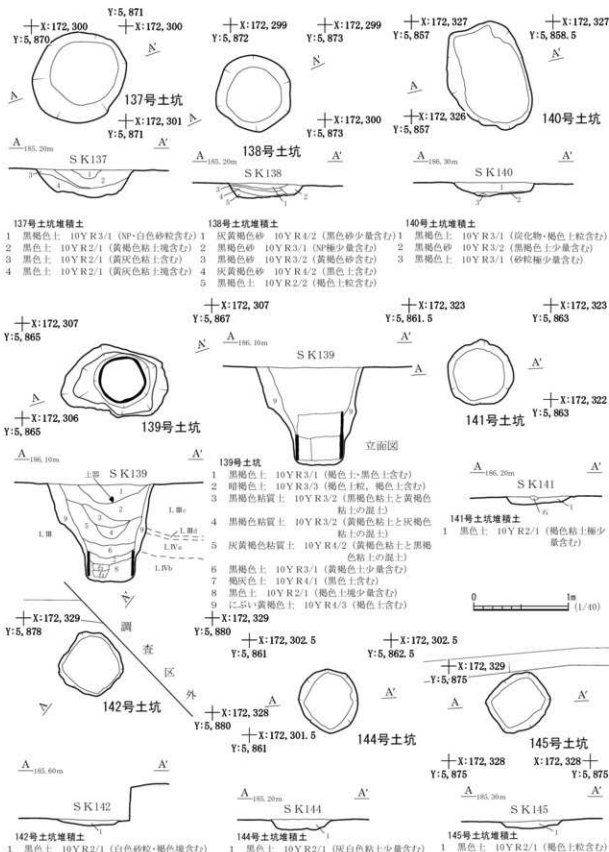


図45 137～142・144・145号土坑

第3章 南区の調査成果

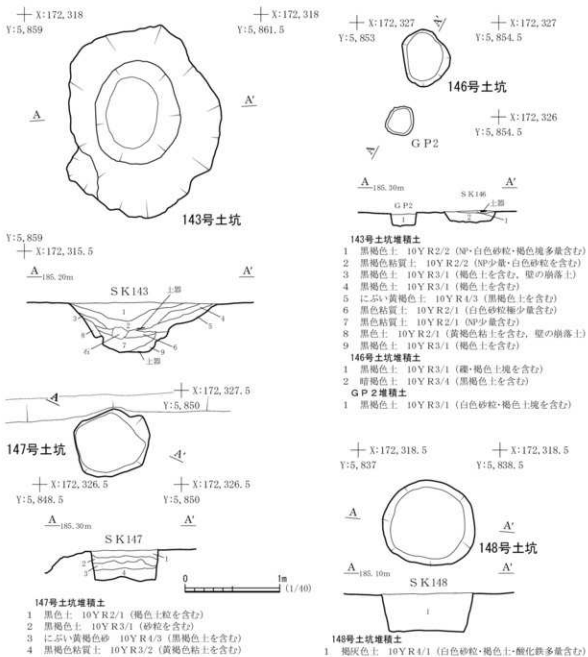


図46 143・146～148号土坑

143号土坑 調査区南部の中央、E 7-F 4 グリッドに位置する。61号・62号掘立柱建物跡の5 m南に分布する。遺構検出面はL III cである。平面形は楕円形で、南北方向に主軸を持つ。規模は、上端が長径2.05m、短径1.58m、底面では長径が0.74m、短径が0.55mを測る。底面までの深さは0.53mである。周壁の上半部は、崩落して緩やかな傾斜で立ち上がり、下半部の壁面は垂直気味な傾斜となる。遺構内堆積土は9層に分けた。1・2層は沼沢火山灰を含む黒褐色土でレンズ状堆積を示す自然流入土である。3～9層は壁面の崩落土を含む黒褐色土を基調とする。本土坑は廃絶に伴って人為的に埋め戻されることなく、壁面の崩落が廃絶の起因となったのであろう。

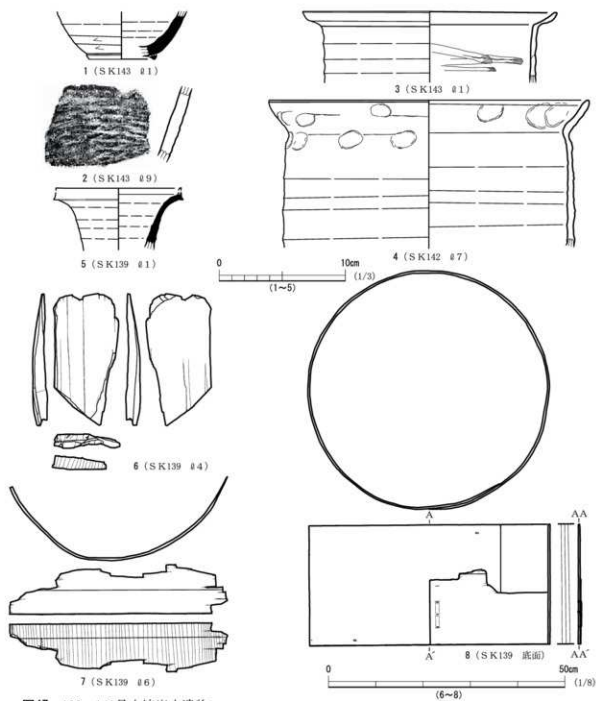


図47 139・143号土坑出土遺物

本土坑からは土師器、須恵器が出土した。図47-1は1層から出土した須恵器で、小型瓶類であろう。断面形が三角形となる高台が貼り付けられる。体部下半はロクロの回転を利用したケズリが施される。2～4は土師器の長胴甕である。2は底面から出土した破片で、外面にタタキ具の痕跡を残す。3・4は長胴甕の口縁部から上半部の資料である。整形にロクロが用いられている。胴部は垂直に立ち上がる器形で、口縁部は頸部から「く」の字状に開く。

本土坑は1次調査で確認した6号土坑に類似する形状から、素掘りの井戸跡と考えている。年代は底面付近から出土した土器の特徴から、9世紀前半頃と考えている。(大野)

第4節 溝 跡 (図48~49)

37・48号溝跡 2次調査区から連続して延びる溝跡である。2次調査の成果をあわせた規模は、全長が94mを測る。最大幅が1.14mである。深さは4~16cmと極めて浅い。遺存状態の良いE7-A3グリッド付近の堆積土は、砂粒を含む黒褐色土で、流水の影響を受けていると判断した。48号溝跡は37号溝跡の南に近接する小溝で、その流れが乱れた際の痕跡である。

本溝跡からは土師器30点、須恵器17点が出土した。図49-2はロクロを用いて成形された坏である。体部はやや丸みを帯びた器形となる。内面はミガキの後に黒色処理を施している。3~5は土師器の長胴甕である。3・4は口唇部が上方につまみあげている。6は須恵器の長頸瓶であろう。底部に断面が台形を呈す高台を貼り付けられている。8は須恵器の横瓶であろうか。

桜町遺跡では、北端の50号掘立柱建物跡から南端に位置する2号掘立柱建物跡まで、約450mに渡る南北に長い集落域が確認されている。37号溝跡は集落内の建物群を分ける区画溝であろう。

49号溝跡 49号溝跡は、調査区西端となるD7-J7グリッドから北東に向かって延び、E7-B6グリッドで東西方向に方向を変える。東端部は、E7-D6グリッドで矩形に曲がる50号溝跡と重複して途切れる。全長38m、幅84cmを測る。深さは10cmと極めて浅い。

49号溝跡の出土遺物は、図49-7に示す須恵器の稜碗がある。高台が剥落している。坏部下端に稜を持ち、口縁部に向かって軽く外反して開く器形である。

49号溝跡は50号溝跡よりは古いが、その詳細な年代や機能を把握する所見は得られていない。

50号溝跡 50号溝跡は、E7-D6・E7-F8グリッドで確認しただけで、連続しない。49号溝跡と接する地点で、北に向かって矩形に曲がる。溝跡の方向や堆積土などの特徴から、1次調査

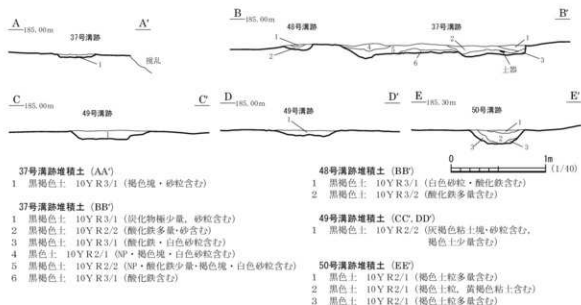


図48 37・48~50号溝跡

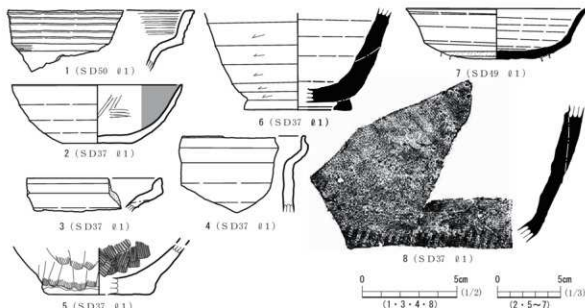


図49 37・49・50号溝跡出土土器

で確認した3号溝跡へと続き、全長が109mを超える規模となる。

50号溝跡からは弥生土器と平安時代の土師器が出土した。図49-1は弥生土器で、北陸系の有段口縁となる壺である。口縁部の幅が広く、外面に擬凹線が観察できる。

本溝跡は3号溝跡の北東側に平行して延びる9号・14号溝跡と併せて道路遺構となる可能性が高い。これら溝跡の重複関係を整理すると、年代は平安時代以降と考えている。(大野)

第5節 遺構外出土土器 (図50)

3次調査の南部では、遺構外出土遺物として弥生土器・土師器・須恵器がそれぞれ極少量ながら出土している。これら遺物の形状や特徴が把握できたものを図50に示した。

弥生土器 弥生土器はすべて桜町1式期である。1は壺または甕の体部破片で、地文に撚糸文が施される。2は北陸系の高坏である。脚部の中位に二孔一對の円孔が配される。調整は外面に縦位のナデが施され、内面に指頭痕が残る。3・4は甕または壺の底部資料である。

土師器 5・6はロクロ成形の坏である。5は丸みを持って立ち上がる器形である。内面は横位のミガキの後に黒色処理を施す。6は内外面ともに黒色処理が施された坏である。体部下半を回転ヘラケズリで調整され、内面にミガキが観察できる。7は甕の底部である。

須恵器 9は須恵器の坏で、体部外面と底部に墨書が観察できる。墨書はいずれも文字の一部であるため判読できない。12は大型の瓶類であろう。体部外面の下半部には製作過程で用いた布目痕が観察できる。13~20は甕の体部破片である。外面は平行タキ痕、内面は無文や同心円文となるアテ具痕が観察できる。13・14は体部外面にいわゆる螺旋沈線文が確認できる。(大野)

第3章 南区の調査成果

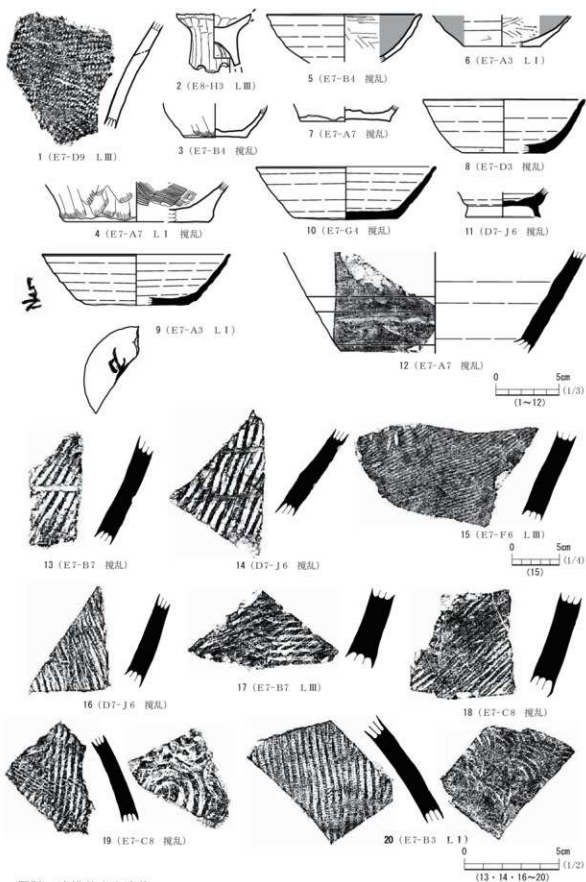


図50 遺構外出土遺物

表4 土坑一覽

土坑 番号	探検 番号	位置	平面形	規模 (cm)			年代	性格	遺物	備考
				長径	短径	深さ				
SK66	図27	(C5-G1)	隅丸方形	191	140	110	時期不明	井戸跡	木	
SK100	図7	(C5-G3)	楕円形	252	158	90	弥生時代後期	井戸跡	弥	
SK103	図9	(C5-C2・D2)	楕円形	220	82	15	弥生時代後期	性格不明	弥	
SK109	図18	(C5-C4・5)	楕円形	98	80	35	平安時代	性格不明	土・須	
SK112	図9	(D5-A7・B7)	不整形	170	135	22	弥生時代後期	性格不明	弥	
SK113	図27	(C5-F4)	円形	124	83	165	中世～近世	井戸跡	土	
SK114	図18	(C5-C5)	隅丸方形	450	375	50	平安時代	貯水施設	土・須・葦	
SK115	図27	(C5-F3)	円形	89	75	172	中世～近世	井戸跡	木	
SK116	図27	(C5-E4)	隅丸方形	78	77	95	中世～近世	井戸跡	土	
SK117	図28	(C5-F4)	長方形	314	220	36	近世	性格不明	弥・土・須・陶	
SK118	図28	(C5-F4・G4)	円形	125	60	165	中世～近世	井戸跡	木・石	
SK119	図29	(C5-G4)	円形	210	132	162	中世～近世	井戸跡	木	
SK120	図29	(D5-A6)	円形	200	160	165	中世～近世	井戸跡	土・陶・木	
SK121	図18	(C5-C5)	円形	95	58	14	平安時代	性格不明	土	
SK122	図9	(D5-A6)	長楕円形	320	95	25	弥生時代後期	性格不明	弥	
SK123	図30	(C5-16)	円形	95	70	180	中世～近世	井戸跡	木	
SK124	図29	(C5-15)	円形	118	118	90	中世～近世	井戸跡	土	
SK125	図28	(C5-F4)	円形	75	65	119	中世～近世	井戸跡	木	
SK126	図30	(C5-G3)	円形	87	65	140	時期不明	井戸跡	土	
SK127	図30	(C5-G3)	円形	75	49	72	中世～近世	井戸跡	土	
SK128	図30	(C5-F2)	円形	65	73	52	中世～近世	井戸跡	木・須	
SK129	図31	(C5-H4)	楕円形	140	111	240	近世以降	井戸跡	須・木	
SK130	図30	(C5-G5)	楕円形	93	65	155	中世～近世	井戸跡	木	
SK131	図31	(C5-H6)	円形	100	100	66	中世～近世	井戸跡	土	
SK132	図9	(D5-A7)	楕円形	270	100	26	弥生時代後期	性格不明	弥	
SK133	図9	(D5-A6・7)	長楕円形	410	95	18	弥生時代後期	性格不明	弥	
SK134	図31	(C5-H6)	円形	70	70	70	中世～近世	井戸跡	土	
SK135	図32	(C5-C4)	円形	120	98	102	時期不明	井戸跡	土	
SK136	図32	(C5-E4)	隅丸方形	95	75	97	時期不明	井戸跡	土	
SK137	図45	(E8-H1)	円形	100	90	29	平安時代	性格不明	土	
SK138	図45	(E7-H1・10)	円形	80	77	15	平安時代	性格不明	土	
SK139	図45	(E7-G10)	長方形	105	67	103	平安時代	井戸跡	土・須・木	
SK140	図45	(E7-G8)	不整形長方形	115	85	15	平安時代	性格不明	土	
SK141	図45	(E7-G8)	円形	69	68	9	平安時代	性格不明	土	
SK142	図45	(E7-H8)	長方形	66	60	6	平安時代	性格不明	土	
SK143	図46	(E7-F9・G9)	不整形円形	205	158	53	平安時代	井戸跡	土・須	
SK144	図45	(E7-G10)	円形	65	62	11	平安時代	性格不明	土	
SK145	図45	(E7-H8)	長方形	63	56	8	平安時代	性格不明	土	
SK146	図46	(E7-F8)	不整形円形	60	49	12	平安時代	性格不明	土・須	
SK147	図46	(E7-E8)	隅丸長方形	79	67	32	平安時代	性格不明	土	
SK148	図46	(E7-D9)	楕円形	100	90	40	時期不明	性格不明	土	
SK149	図32	(C5-15)	円形	120	64	150	中世～近世	井戸跡	陶・木	
SK150	図32	(C5-15)	円形	180	120	170	中世～近世	井戸跡	土	
SK151	図32	(C5-15)	隅丸方形	65	65	95	中世～近世	井戸跡	土	
SK152	図5・6	(C5-J6)	円形	125	118	—	中世～近世	井戸跡	土	
SK153	図5・6	(C5-14)	円形	100	95	—	中世～近世	井戸跡	土	
SK154	図5・6	(C5-14)	円形	105	92	—	中世～近世	井戸跡	土	
SK155	図5・6	(C5-F3)	円形	130	125	—	中世～近世	井戸跡	土	
SK156	図5・6	(C5-E4)	円形	85	80	—	中世～近世	井戸跡	土	
SK157	図5・6	(C5-E4)	円形	65	55	—	中世～近世	井戸跡	土	
SK158	図5・6	(C5-F4)	円形	92	82	—	中世～近世	井戸跡	土	
SK159	図5・6	(C5-H4)	楕円形	100	90	—	中世～近世	井戸跡	土	
SK160	図5・6	(C5-G5)	円形	82	75	—	中世～近世	井戸跡	土	
SK161	図5・6	(C5-H5)	円形	135	130	—	中世～近世	井戸跡	土	
SK162	図5・6	(C5-15)	円形	100	95	—	中世～近世	井戸跡	土	

* () 内の数値は遺存値を表す

* 弥: 弥生土器 石: 石器 土: 土器 須: 須器 木: 木製品 陶: 陶器

第3章 南区の調査成果

表5 桜町遺跡(3次)出土木製品樹種同定・年代測定一覧

遺構名	出土層位	遺物名	種別番号	種別番号	写真番号	時代	計測値 (cm)			樹種同定試料番号 年代測定番号	樹種同定年代測定 (10期年代範囲)	樹種同定		
							長さ	幅	厚さ					
120号土坑	F3	輪	B033	1	63	室町時代	30.3	4.7	2.3	1	—	アスナロ		
120号土坑	F7	板材	B033	2	63	室町時代	(25.7)	(1.1)	0.7	30	—	スギ		
120号土坑	F3	箸	B033	3	63	室町時代	15.5	0.9	0.9	3	—	サワラ		
120号土坑	F3	箸	B033	4	63	室町時代	(5.4)	(0.7)	(0.4)	8	—	スギ		
120号土坑	F3	箸	B033	5	63	室町時代	22.5	0.9	0.5	2	—	スギ		
120号土坑	F3	箸	B033	6	63	室町時代	(9.2)	0.6	0.4	6	—	スギ		
120号土坑	F3	箸	B033	7	63	室町時代	(14.2)	(0.6)	(0.5)	4	—	サワラ		
120号土坑	F3	箸	B033	8	63	室町時代	(8.3)	0.6	0.5	7	—	スギ		
120号土坑	F3	箸	B033	9	63	室町時代	(13.7)	0.5	0.5	5	—	スギ		
120号土坑	F3	角材	B033	10	63	室町時代	(11.0)	(1.7)	(1.3)	26	—	アスナロ		
120号土坑	F3	不明	B033	11	63	室町時代	5.1	0.6	0.6	28	—	マツ属		
120号土坑	F3	新敷の側板	B033	12	63	室町時代	(7.0)	(1.8)	(0.4)	18	—	サワラ		
120号土坑	F3	板材	B033	13	63	室町時代	(6.9)	(1.3)	0.2	19	—	サワラ		
120号土坑	F3	新敷の側板	B033	14	63	室町時代	(19.0)	(1.5)	0.4	—	—	—		
120号土坑	F7	曲物の底板	B033	15	63	室町時代	23.0	3.4	0.5	32	—	サワラ		
120号土坑	F3	新敷の端	B033	16	63	室町時代	(9.9)	(5.0)	0.4	35	—	サワラ		
120号土坑	F7	不明	B033	17	63	室町時代	(9.5)	(3.1)	(1.9)	34	—	コナラ属		
120号土坑	F3	板材	B033	18	63	室町時代	10.1	3.7	1.1	21	—	アスナロ		
120号土坑	F3	水付本	B034	1	63	室町時代	(13.0)	(0.8)	(0.5)	9	—	マツ属		
120号土坑	F7	水付本	B034	2	63	室町時代	(9.4)	(0.6)	(0.4)	33	—	マツ属		
120号土坑	F3	水付本	B034	3	63	室町時代	8.5	1.2	0.6	14	—	マツ属		
120号土坑	F3	水付本	B034	4	63	室町時代	(8.0)	(0.8)	(0.6)	11	—	マツ属		
120号土坑	F3	水付本	B034	5	63	室町時代	8.3	0.8	0.7	12	—	マツ属		
120号土坑	F3	水付本	B034	6	63	室町時代	(7.2)	1.0	0.8	10	—	マツ属		
120号土坑	F3	水付本	B034	7	63	室町時代	6.0	0.8	0.6	15	—	マツ属		
120号土坑	F3	水付本	B034	8	63	室町時代	6.3	0.6	0.6	13	—	マツ属		
124号土坑	下層	曲物	B035	1	63	江戸時代	10.6	(4.7)	0.4	—	—	—		
149号土坑	最下層	曲物	B035	2	63	室町時代	10.6	8.5	0.7	56	—	アスナロ		
60号土坑	下層	曲物	B035	3	63	鎌倉時代 13世紀前半	26.5	5.3	0.4	50	IAAA-103007	I286nAD-1257nAD	サワラ	
125号土坑	下層	榧	B035	4	63	—	(10.7)	(6.5)	(0.8)	45	—	—	スギ	
125号土坑	下層	輪	B035	5	63	江戸時代 19世紀中葉	15.2	9.9	1.1	65	IAAA-103012	I700nAD-1766nAD	マツ属	
115号土坑	下層	刀子の柄	B035	6	63	鎌倉時代 12世紀後半	12.4	3.1	1.7	64	IAAA-103011	I155nAD-1215nAD	サワラ	
130号土坑	F1	箸	B035	7	63	鎌倉時代	(12.6)	(0.7)	(0.5)	—	—	—	—	
113号土坑	F1	箸	B035	8	63	室町時代	(18.0)	(0.6)	(0.6)	46	—	—	スギ	
149号土坑	下層	箸	B035	9	63	室町時代	(11.7)	(0.6)	(0.6)	59	—	—	スギ	
149号土坑	下層	箸	B035	10	63	室町時代	(13.4)	(0.6)	(0.4)	60	—	—	スギ	
149号土坑	下層	箸	B035	11	63	室町時代	(18.3)	(0.6)	(0.6)	58	—	—	スギ	
149号土坑	下層	箸	B035	12	63	室町時代	21.8	0.6	0.6	57	—	—	スギ	
113号土坑	F1	箸	B035	13	63	室町時代	22.5	0.6	0.6	47	—	—	スギ	
130号土坑	F1	板材	B035	14	63	鎌倉時代 13世紀後半	(23.5)	(1.8)	(0.8)	51	IAAA-103008	I275nAD-1291nAD	スギ	
65-A7 GP20	底面	曲物の底板	B037	2	63	—	(7.4)	(7.4)	(0.7)	—	—	—	—	
139号土坑	F4	井戸枠	B047	6	63	平安時代	27.5	23.5	3.1	63	—	—	コナラ属	
139号土坑	F4	井戸枠	B047	7	63	平安時代 9世紀中葉	(50.8)	(10.4)	0.6	62	IAAA-103010	I80nAD-466nAD	ヒノキ科	
139号土坑	底面	井戸枠	B047	8	63	平安時代	50.8	25.5	0.6	52	—	—	アスナロ	
113号土坑	F1	箸	未記載	—	—	室町時代	—	—	—	48	—	—	スギ	
113号土坑	F1	水付本	未記載	—	—	室町時代 14世紀前半	—	—	—	49	IAAA-103006	I311nAD-1369nAD	スギ	
118号土坑	F1	榧	未記載	—	—	鎌倉時代	—	—	—	35	—	—	スギ	
118号土坑	F1	加工痕のある木	未記載	—	—	鎌倉時代	—	—	—	36	—	—	スギ	
118号土坑	F1	加工痕のある木	未記載	—	—	鎌倉時代	—	—	—	37	—	—	スギ	
118号土坑	F1	加工痕のある木	未記載	—	—	鎌倉時代	—	—	—	38	—	—	スギ	
118号土坑	F1	加工痕のある木	未記載	—	—	鎌倉時代	—	—	—	39	—	—	スギ	
118号土坑	F1	榧	未記載	—	—	鎌倉時代 12世紀後半	—	—	—	40	IAAA-103004	I157nAD-1216nAD	ヒノキ科	
119号土坑	F2	板材	未記載	—	—	鎌倉時代	—	—	—	41	—	—	ヒノキ科	
119号土坑	F2	板材	未記載	—	—	鎌倉時代 12世紀後半	—	—	—	42	IAAA-103005	I166nAD-1213nAD	スギ	
119号土坑	F2	板材	未記載	—	—	鎌倉時代	—	—	—	43	—	—	スギ	
120号土坑	F2	板材(%) ^(註1)	未記載	—	—	室町時代	—	—	—	16	—	—	ヒノキ科	
120号土坑	F3	板材	未記載	—	—	室町時代	—	—	—	17	—	—	ヒノキ科	
120号土坑	F3	板材	未記載	—	—	室町時代	—	—	—	20	—	—	スギ	
120号土坑	F3	榎葉(編)	未記載	—	—	室町時代 16世紀中葉	—	—	—	—	IAAA-102998	I325nAD-1573nAD	—	
120号土坑	F3	板材	未記載	—	—	室町時代	—	—	—	23	—	—	ヒノキ科	
120号土坑	F3	板材	未記載	—	—	室町時代	—	—	—	24	—	—	ヒノキ科	
120号土坑	F3	漆	未記載	—	—	室町時代 16世紀中葉	—	—	—	—	IAAA-102999	I325nAD-1573nAD	—	
120号土坑	F7	板材	未記載	—	—	室町時代	—	—	—	29	—	—	ブナ属	
120号土坑	F7	板材	未記載	—	—	室町時代	—	—	—	31	—	—	アスナロ	
123号土坑	最下層	貝	未記載	—	—	室町時代 15世紀前半	—	—	—	—	IAAA-103000	I412nAD-1412nAD	—	
149号土坑	下層	自然木	未記載	—	—	室町時代 14世紀前半	—	—	—	—	IAAA-103003	I296nAD-1321nAD	—	
149号土坑	下層	自然木	未記載	—	—	室町時代	—	—	—	61	—	—	ウツバ属	
65-B1 GP7	底面	杭	未記載	—	—	江戸時代 17世紀前半	—	—	—	—	55	IAAA-103009	I610nAD-1655nAD	サリ

* 樹種同定試料番号・年代測定番号は色糸に収録した付帯の表と対応する。

第4章 弥生時代の遺構と遺物について

桜町遺跡で確認した弥生時代の遺構と遺物については、2次調査の成果を収録した『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告10』でまとめ、弥生時代後期後半から古墳受容期までの土器の変遷や在地社会の変化に着目した考察を加えた。

今回の3次調査は、弥生時代に属する遺構群の北端部にあたる。2次調査に比べれば遺構や遺物は極めて希薄であったが、これまでの調査において資料数が少ない桜町Ⅲ式期の遺構と遺物が確認できた。本章では、3次調査の成果のまとめとして、桜町Ⅲ式土器を補うこととする。

1. 3次調査の桜町Ⅲ式土器

3次調査で確認した桜町Ⅲ式期の遺構は、100号土坑と21号・43号溝跡である。本項では、これら遺構の特徴と遺物の出土状況を確認する。

21号・43号溝跡 43号溝跡は、2次調査で確認した21号溝跡と連続して、南西から北東方向に延びる。弥生時代の遺構群が分布する微高地を南北に分断する溝跡で、両溝跡の北側は遺構・遺物共に極端に少なくなる。調査区内で確認できた規模は、全長が97.8m、検出面から底面までの深さは最大でも0.5mである。

弥生時代後期の地表面を復元的に考えた場合、9号周溝墓の墳丘の高さを2m前後と想定すれば、当時の地表面は、現代の遺構検出面よりも約1.0m高くなる。この時、21号・43号溝跡の規模は、深さが1.5～2.0mで、溝幅が3.0m前後となる。現況よりもはるかに重厚な造りの溝跡となる。さらに、2次調査の成果から、21号溝跡では溝の掘り直しを行った痕跡が認められた。これらの溝が長期に渡って維持・管理されていたことが分かっている。

遺物の出土状況については、21号・43号溝跡が開口した状態で機能していたため、桜町Ⅰ式～Ⅲ式土器が相当量混在して、破片となって出土したものが大半を占める。そのため、桜町Ⅲ式の明確な器種組成やセット関係を示すものではない。

これら溝跡の性格は、集落域の北端を区画する溝と推察している。一方、溝の底面や壁面に杭列などの防衛的な施設は確認できない。さらに遺跡内からも武器・武具などの出土もない。このことから、桜町遺跡の集落には、環濠集落や高地性集落などに代表されるいわゆる防衛性集落とは異なり、集落の維持・経営にあたって極度の緊張状態を示す事象がない点を改めて指摘しておく。

100号土坑 100号土坑は井戸跡である。集落域の北端を区画する43号溝跡の北側約20mに位置する。つまり集落域の外部に設けられた井戸跡となる。100号土坑は円筒形をなす素掘りの井戸で、井戸底付近の中段に平場を持つ特徴がある。

100号土坑の出土遺物には、井戸機能時の土器、廃絶後の埋没時期に混入した土器に大別できる。井戸の機能時に関わる土器は、図7-1だけである。図7-1は人為的に分割した壺の下半部で、

井戸の中段に設けられた平場に正立した状態で置かれていた。堆積土中から出土した土器は、多くが破片となって、井戸を埋め戻した土砂に混入したのであろう。堆積土中から完形で出土した甕(図7-2)の時期に井戸が廃絶したのであろう。

桜町遺跡で確認した弥生時代の井戸跡は、集落内に設けられた93号土坑だけである。93号土坑の構造は、割り貫き材を用いた井戸枠とその外側に割り材を井桁状に組み上げて井戸枠を固定している。さらに井戸枠に下部からは、井戸構築に関わる祭祀に用いたのであろうか土器が一括で埋められていた。井戸の構造としては、100号土坑に比べれば、極めて嚴重な造りである。両土坑の機能時期には若干の年代差があり、93号土坑が桜町Ⅰ式期、100号土坑が桜町Ⅲ式期には廃絶を迎えている。桜町遺跡では93号土坑が嚴重な造りで、井戸の構築時に祭祀を行っている点を評価すれば、100号土坑に見られる素掘りの井戸とは用途に違いがあるのであろう。

会津盆地において弥生時代の井戸跡は少ない。特に100号土坑に類似する中段に平場を伴う井戸の類例として、屋敷遺跡(会津若松市)の8号井戸跡が挙げられる。8号井戸跡は直径1mほどの円筒形をなす素掘りの井戸で、中段部分に平場が設けられる。年代は弥生時代中期後半と報告される。また屋敷遺跡における弥生時代の井戸跡は、全て素掘りの井戸である。これらの井戸跡と比較しても、中段に平場を持つ8号井戸跡が特別な用途を示す所見は得られていない。

桜町Ⅲ式土器 2次調査で確認した18号・20号・23号周溝墓、21号溝跡の資料に加えて、100号土坑、43号溝跡の資料を追加し、『会津10』で示した桜町Ⅲ式土器の特徴を確認する。

- ①地文に縄文・捺糸文を施す在地系土器が減少する。北陸系土器が卓越する。
- ②北陸系土器の器種は甕・壺・高環・鉢・器台がある。中でも甕C7・甕C8とした、口縁部が「く」の字に屈曲し、口唇部が鋭い三角形になる甕が顕著となる。
- ③高環の製作技法、特に脚部と環部の接合方法に違いがある。脚上部に粘土塊を充填しない高環が含まれてくる。

100号土坑・43号溝跡の資料を概観すると、100号土坑の資料(図7・8)には、在地系土器が極めて少なく、北陸系土器が大半を占める。さらに100号土坑の図7-2は、②で示す甕C7に分類できる。その他甕口縁部資料でも甕C7・甕C8が多い。また図7-3の鉢は、21号溝跡の資料に類似する。高環は口縁部破片のみで、③を検討する資料はない。43号溝跡が基本的には開放する遺構のため、桜町Ⅲ式土器の明確な器種組成を示していないが、甕や高環などに②・③の特徴を持つ資料が一定量認められる。100号土坑・43号溝跡の資料は、桜町Ⅲ式土器を特徴付ける①～③を逸脱しない。

会津地域の桜町Ⅲ式土器を含む古墳受容期前半期との比較を試みる。『会津10』で示すとおり、周溝墓では宮東遺跡(会津坂下町)3号・4号周溝墓、4号土坑が該当する。集落跡では中西遺跡(会津坂下町)4号・6号竪穴住居跡の資料がある。

これら資料の内、甕の口唇部形態に着目すると、桜町Ⅲ式の甕を特徴付ける甕C7に酷似するものがある。さらに古墳受容期後半で顕著となる甕、頸部が「く」の字に屈曲し、口唇部端部が丸く

なるものも一定量含む。桜町Ⅲ式よりも若干新しく位置付けられる。高坏では製作技法等に桜町Ⅲ式との違いはない。桜町18号周溝墓から出土した高坏に類似するものが宮東4号周溝墓、中西6号住居の資料に見られる。この点から桜町Ⅲ式を含む古墳受容期前半においては、桜町Ⅲ式→宮東4号周溝墓・中西6号住居跡への変遷をたどることができる。

2 桜町Ⅲ式土器の伝播について 一桜町式土器の編年予察一

図51には福島県浜通り地域の浪江町に所在する本屋敷古墳群第2号竪穴住居跡から出土した土器を参考資料として提示した。これらの土器は十王台式土器と初期土師器が供判する事例として、学史的に有名で、前方後方墳である本屋敷古墳1号墳の出現時期に関わる重要資料でもある。

本屋敷古墳第2号竪穴住居跡の資料については、阿部朝衛が報告で指摘するように、口唇部が上方につまみ上げられる甕が特徴的で、会津地域を経由した北陸地域の影響を想定している。前述した桜町Ⅲ式土器と比較すると、甕C7・甕C8と口縁部の形状が共通するが、体部下半が細長い器形になる点に北陸系土器の要素がある。さらに十王台式系土器とされる小型壺は、体部の地文が綾杉状になる擦糸文である。桜町遺跡21号溝跡の小型壺とは、地文に違いが認められるが、体部の器形や頸部の刺突文などに類似点が見られる。阿部が指摘するように、本屋敷古墳第2号竪穴住居跡の資料は、甕や壺の体部器形が丸い球形になる点を関東系土器との在地化の影響しているのであろうが、桜町Ⅲ式土器の特徴と類似すると評価できる。

以上のことから、会津地域の桜町Ⅲ式土器を含む古墳受容期の土器が本県浜通り地域にも見られる点が興味深い。さらに、その時期まで北関東地域の十王台式期に併行する点が指摘できる。ただし、浜通り地域における土器の変遷では、北陸系土器の変遷を示す継続的な資料がない。墓制では桜町Ⅰ式～Ⅱ式期の平窪諸荷遺跡（いわき市）の方形周溝墓、桜町Ⅲ式期のイカヅチ遺跡（須賀川市）の円形周溝墓があるが、桜町遺跡で確認したように、方形周溝墓から前期古墳の出現まで継続的な墳墓の造営が見られない。当然、桜町遺跡で見られた西日本的な弥生文化を経て、古墳文化を受容した社会ではなく、浜通り地域・中通り地域は、十王台式土器に表出される北関東地域との交流を継続することを選択したのであろう。

本県中通り地域・浜通り地域では、定型的な前期古墳の出現に二期が求められ、本屋敷古墳群1号墳（浪江町）、玉山1号墳（いわき市）、大安場1号墳（郡山市）などで、同時に集落遺跡が増加する傾向も見られる。これら変革時期は、土器型式では塩釜式（五領式）である。会津地域に遅れて古墳文化を受容する地域で、その変化には関東地域の影響が強いと位置付けられる。

今後の課題は、東北地方南部の古墳受容期における、小地域ごとの社会の実態を考慮に入れた細かな検討が必要であり、桜町式土器を定点とした分析を試みることにする。（福田）

写真図版



1 調査区遠景（北西から）



2 調査区全景（北から）



3 北区遠景（南東から）



4 北区全景（1）（南西から）



5 北区全景（2）（東から）



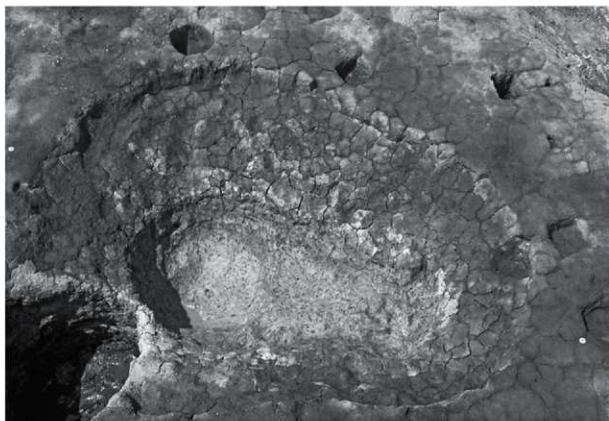
6 北区全景（3）（真上から）



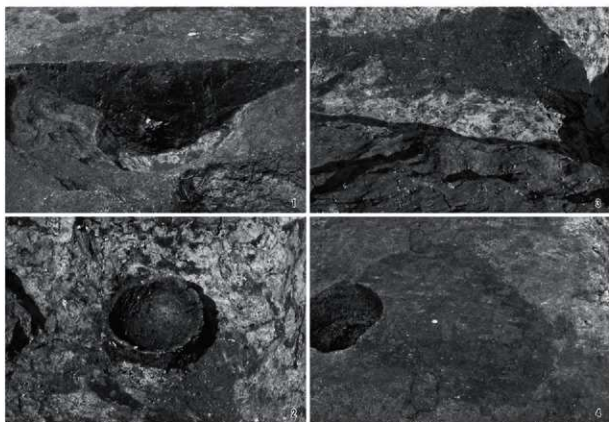
7 北区中央部 (真上から)



8 51~55号掘立柱建物跡周辺 (真上から)

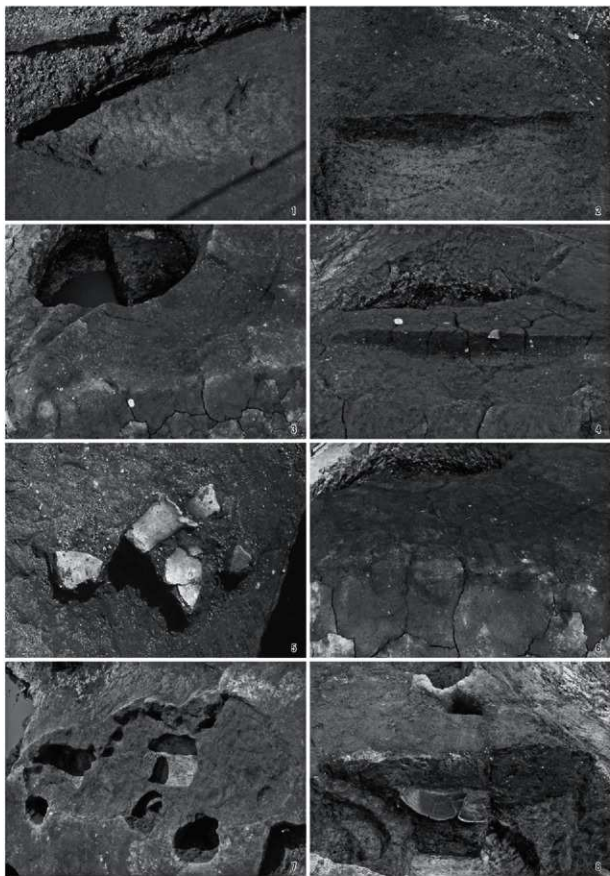


9 100号土坑全景（東から）



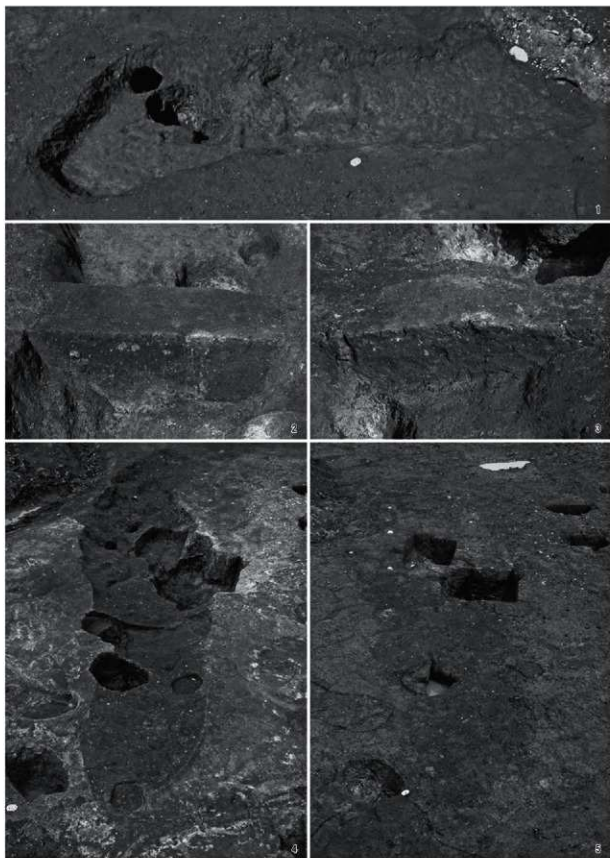
10 100号土坑細部

1 土層断面（西から） 2 土層断面下層（西から）
 3 遺物出土状況（南から） 4 掘出状況（南から）



11 103·112·132号土坑

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1 103号土坑全景 (南↖东) | 2 103号土坑断面 (东↖东) |
| 3 112号土坑全景 (东↖东) | 4 112号土坑断面 (东↖东) |
| 5 112号土坑遗物出土状况 (南↖东) | 6 112号土坑出土状况 (东↖东) |
| 7 132号土坑全景 (西↖东) | 8 132号土坑断面 (西↖东) |



12 122·133号土坑

- | | |
|------------------|-------------------|
| 1 122号土坑全景 (西北→) | 3 133号土坑断面 (南→) |
| 2 122号土坑断面 (南→) | 5 133号土坑横切状况 (南→) |
| 4 133号土坑全景 (南→) | |



13 43号溝跡・ピット



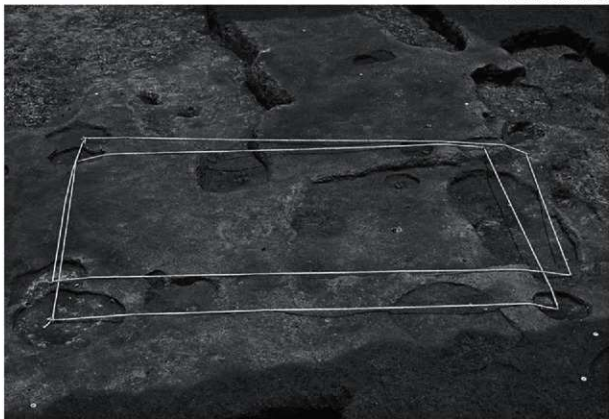
1 43号溝跡全景 (南西から)



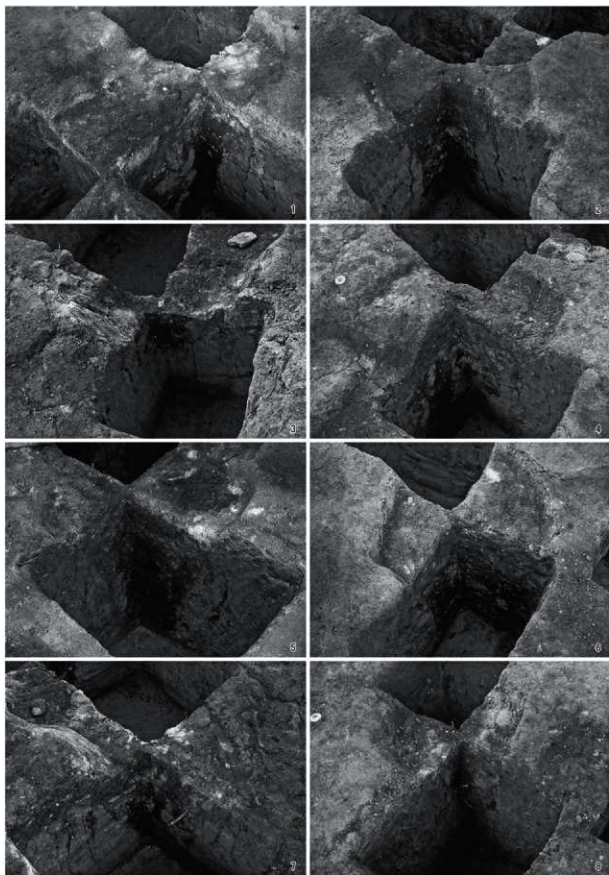
2 43号溝跡断面 (南西から)

3 D5-B6グリッド

G P 1 遺物出土状況 (南から)



14 48・49号掘立柱建物跡全景 (北西から)

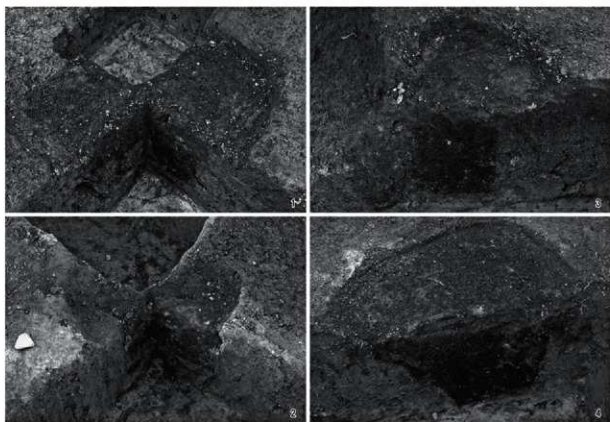


15 48・49号掘立柱建物跡細部

- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1 48号掘立柱建物跡 P 1断面 (南東 ϕ 5) | 2 48号掘立柱建物跡 P 2断面 (北東 ϕ 5) |
| 3 48号掘立柱建物跡 P 3断面 (南西 ϕ 5) | 4 48号掘立柱建物跡 P 4断面 (東 ϕ 5) |
| 5 49号掘立柱建物跡 P 1断面 (北西 ϕ 5) | 6 49号掘立柱建物跡 P 2断面 (南東 ϕ 5) |
| 7 49号掘立柱建物跡 P 3断面 (北西 ϕ 5) | 8 49号掘立柱建物跡 P 4断面 (南東 ϕ 5) |

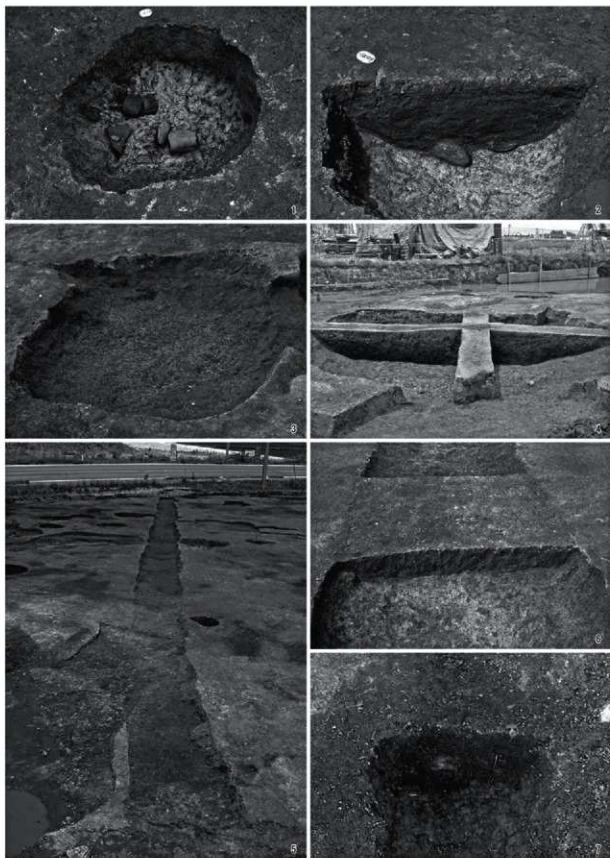


16 50号掘立柱建物跡全景（南東から）



17 50号掘立柱建物跡細部

1 P 1断面（北西+5） 2 P 2断面（北西+5）
 3 P 7断面（東西+5） 4 P 10断面（西西+5）



18 109·114号土坑, 40·41号溝跡

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 109号土坑全景 (南から) | 2 109号土坑断面 (東から) |
| 3 114号土坑全景 (南から) | 4 114号土坑断面 (東から) |
| 5 40号溝跡全景 (南から) | 6 40号溝跡断面 (南から) |
| | 7 41号溝跡断面 (東から) |



19 42号溝跡



2



3

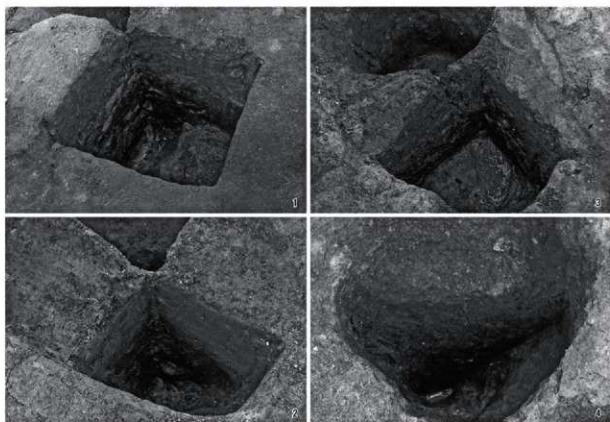
1 全景 (東から) 2 検出状況 (南から)
3 断面 (東から)



20 52~55号掘立柱建物跡周辺 (真上から)



21 52号掘立柱建物跡全景（南から）

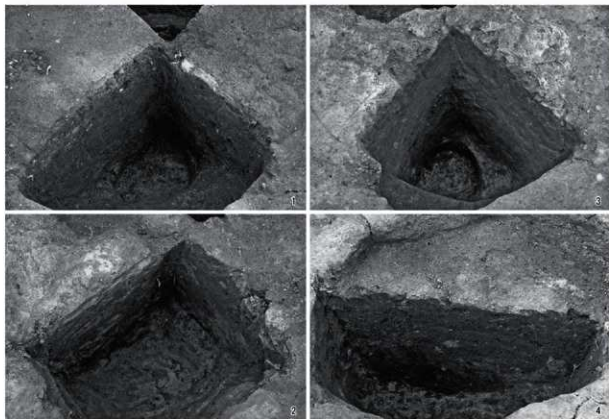


22 52号掘立柱建物跡細部

1 P 1断面（南西から） 2 P 2断面（南東から）
 3 P 4断面（北東から） 4 P 6断面（南から）



23 53号掘立柱建物跡全景（南から）

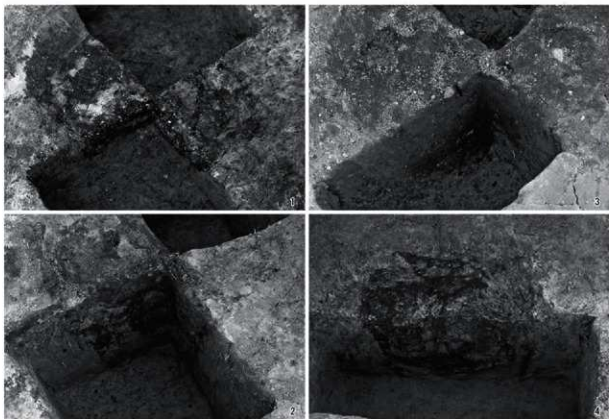


24 53号掘立柱建物跡細部

1 P 1断面（北東から） 2 P 4断面（南東から）
3 P 3断面（北西から） 4 P 6断面（南から）



25 54号掘立柱建物跡全景（東から）

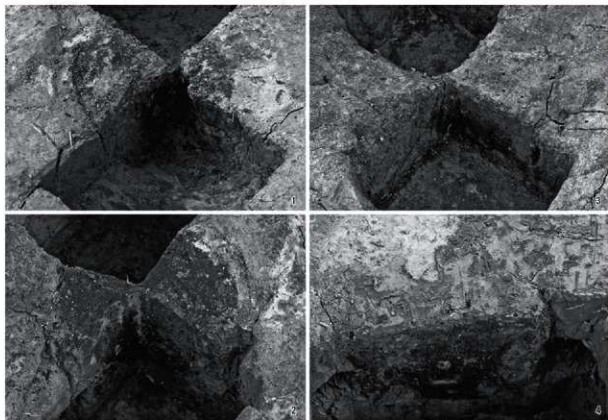


26 54号掘立柱建物跡細部

1 P 1断面（西側中心） 2 P 4断面（北東中心）
 3 P 5断面（北西中心） 4 P 6断面（北中心）

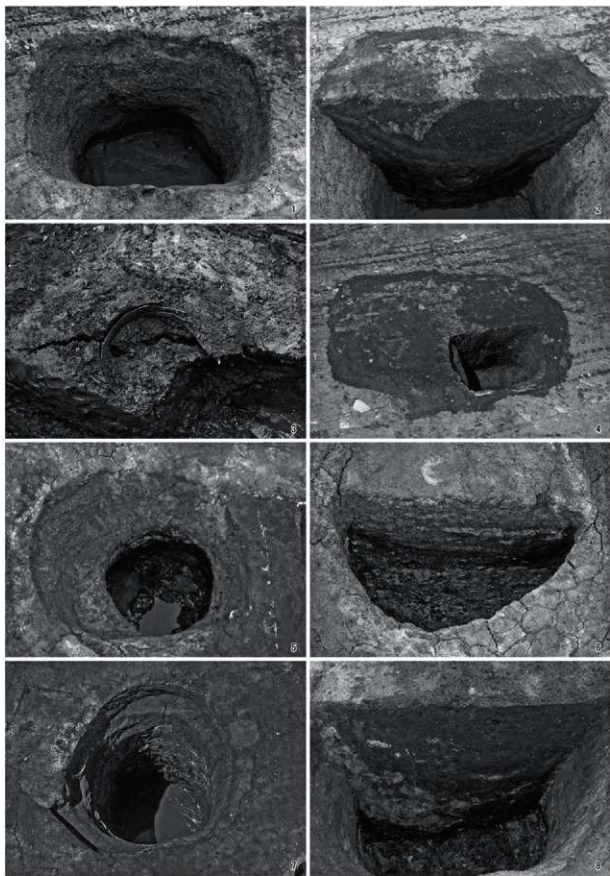


27 55号掘立柱建物跡全景（東から）



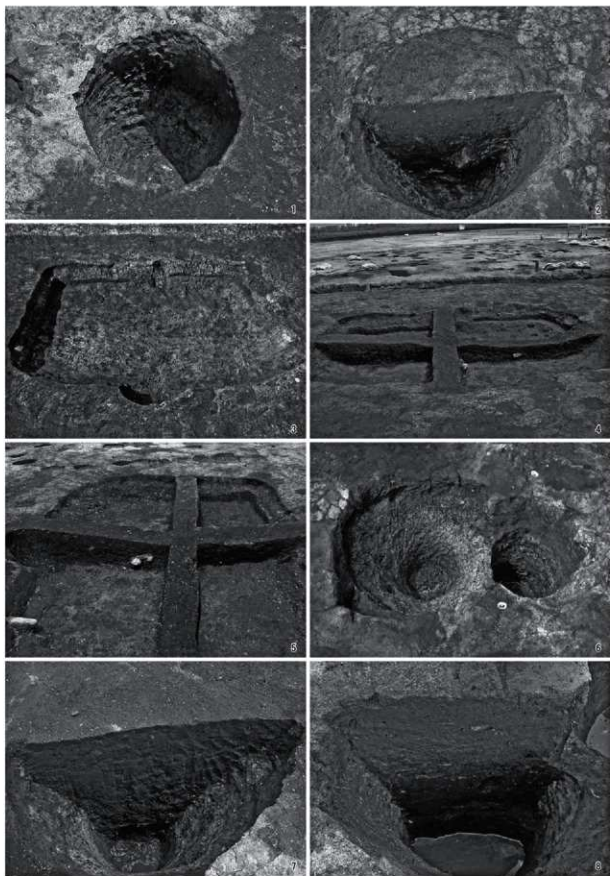
28 55号掘立柱建物跡細部

1 P 1断面（西東向き） 2 P 4断面（北東向き）
 3 P 3断面（北西向き） 4 P 6断面（北向き）



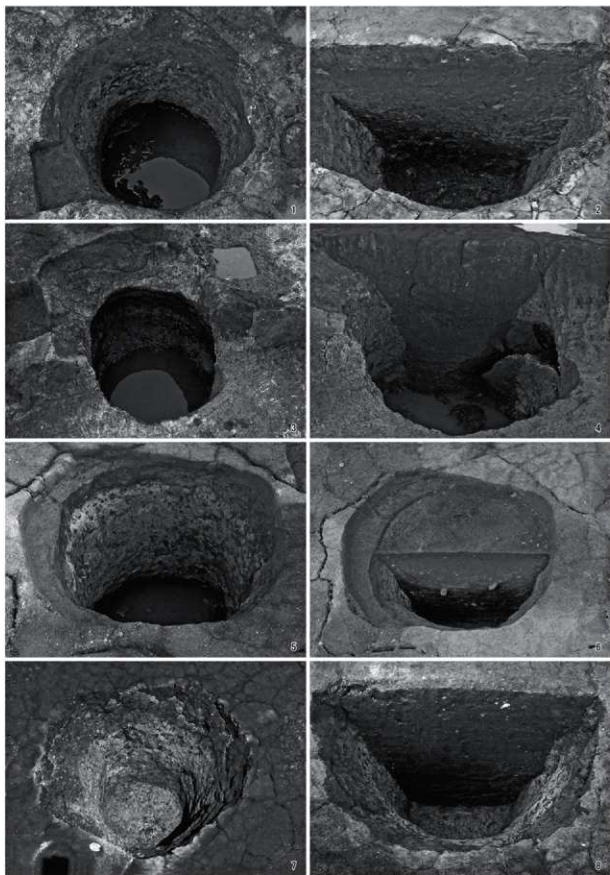
29 66·113·115号土坑

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 1 66号土坑全景 (南边·东) | 2 66号断面 (南边·东) |
| 3 66号土坑器物出土状况 (南边·东) | 4 66号土坑横切状况 (南边·东) |
| 5 113号土坑全景 (南边·东) | 6 113号土坑断面 (西边·东) |
| 7 115号土坑全景 (南边·东) | 8 115号土坑断面 (南边·东) |



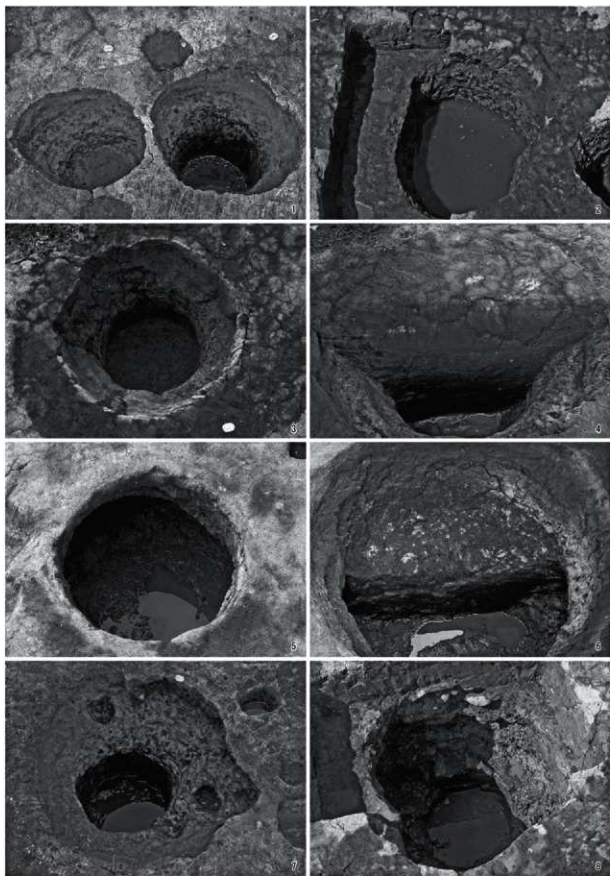
30 116~118·125号土坑

- | | |
|-------------------|----------------------|
| 1 116号土坑全景 (西北-东) | 2 116号土坑断面 (南-北) |
| 3 117号土坑全景 (南-北) | 4 117号土坑断面 (南-北) |
| 5 117号土坑断面 (东-西) | 6 118·125号土坑全景 (北-南) |
| 7 118号土坑断面 (南-北) | 8 125号土坑断面 (西-东) |



31 119·120·123·124号土坑

- | | |
|------------------|------------------|
| 1 119号土坑全景 (南中心) | 2 119号土坑断面 (南中心) |
| 3 120号土坑全景 (西中心) | 4 120号土坑断面 (西中心) |
| 5 123号土坑全景 (南中心) | 6 123号土坑断面 (南中心) |
| 7 124号土坑全景 (南中心) | 8 124号土坑断面 (南中心) |



32 126 • 127 • 129 • 131 • 135 • 155 • 161号土坑

1 126 • 127号土坑全景 (东边·上)

2 129号土坑全景 (东边·上)

3 131号土坑全景 (东边·上)

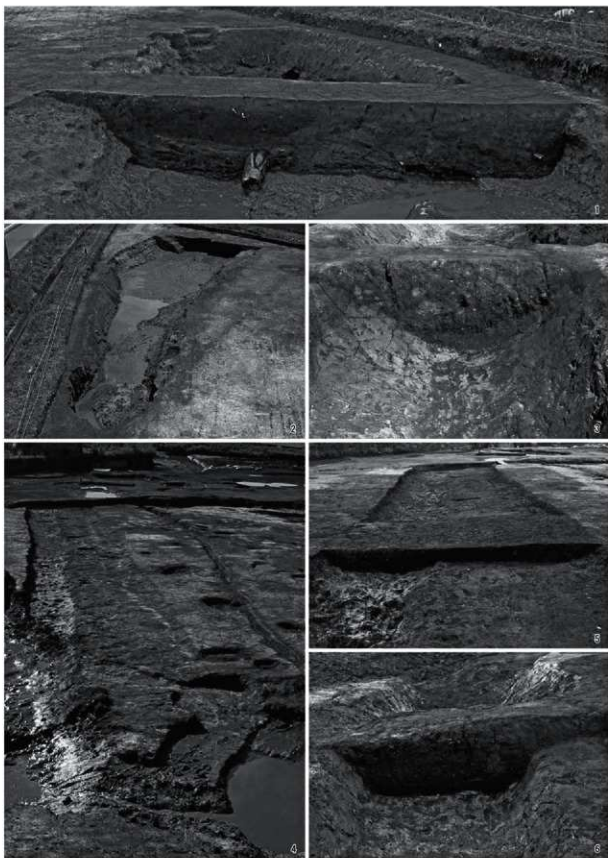
4 131号土坑断面 (东边·上)

5 135号土坑全景 (东边·上)

6 135号土坑断面 (西边·上)

7 155号土坑全景 (东边·上)

8 161号土坑全景 (北东边·上)



33 39・44～46号溝跡

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 39号溝跡断面 (東から) | 3 44号溝跡断面 (西から) |
| 2 39号溝跡全景 (西から) | 5 45号溝跡断面 (東から) |
| 4 43号溝跡全景 (東から) | 6 46号溝跡断面 (南から) |



34 南区遠景（1）（西から）



35 南区遠景（2）（南東から）



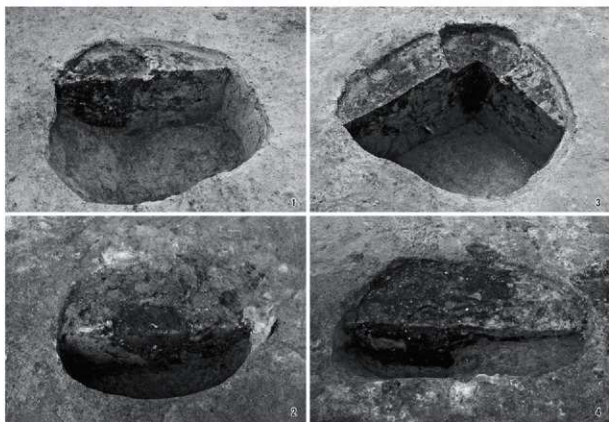
36 南区全景（北東から）



37 58・59号掘立柱建物跡周辺（真上から）

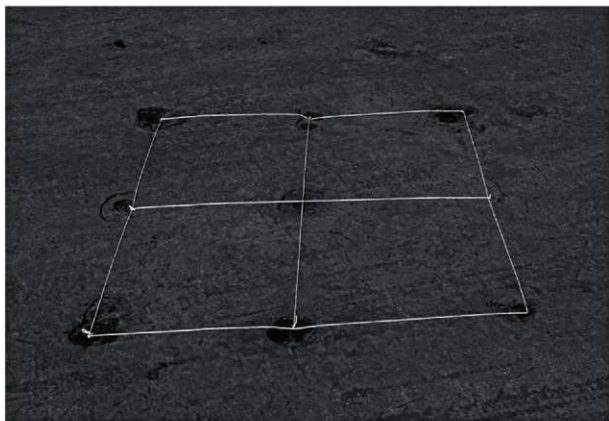


38 58号掘立柱建物跡全景（北から）

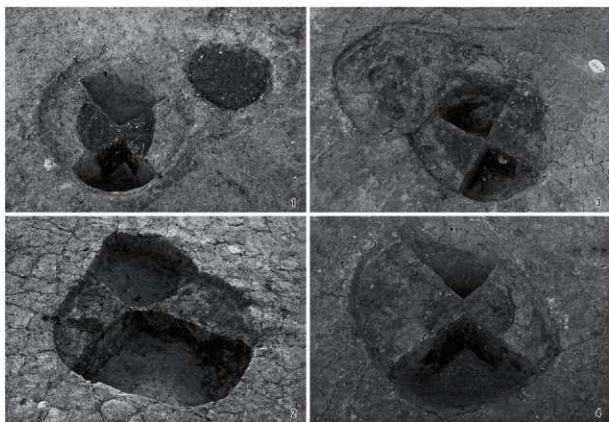


39 58号掘立柱建物跡細部

1 P 1断面（東から） 2 P 2断面（北東から）
3 P 3断面（南から） 4 P 4断面（南から）



40 59号掘立柱建物跡全景（東から）

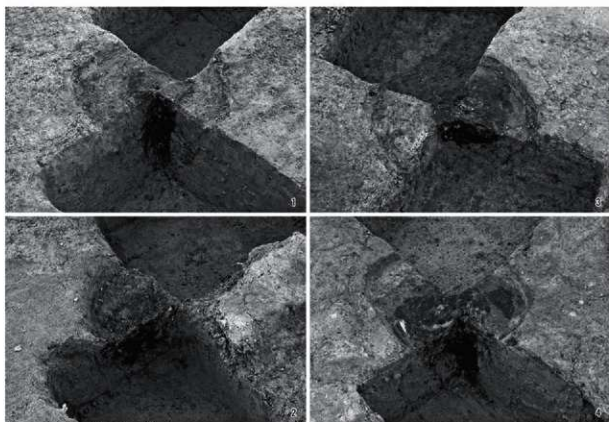


41 59号掘立柱建物跡細部

1 P 0断面 (南西 δ +5) 2 P 4断面 (南東 δ +5)
 3 P 8断面 (北東 δ +5) 4 P 11断面 (南東 δ +5)



42 60号掘立柱建物跡全景（北から）

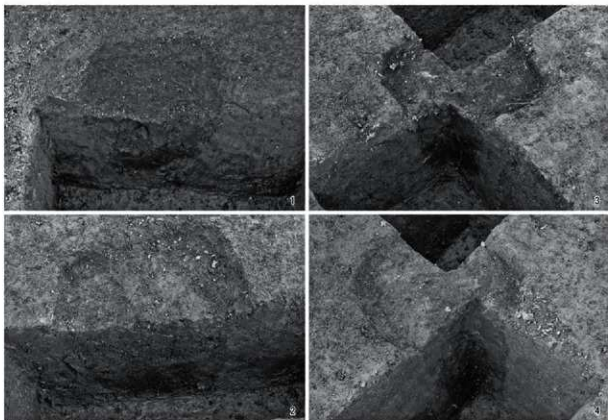


43 60号掘立柱建物跡細部

1 P-1断面（南西から） 2 P-2断面（南西から）
3 P-3断面（南東から） 4 P-4断面（南東から）



44 61号掘立柱建物跡全景（西から）

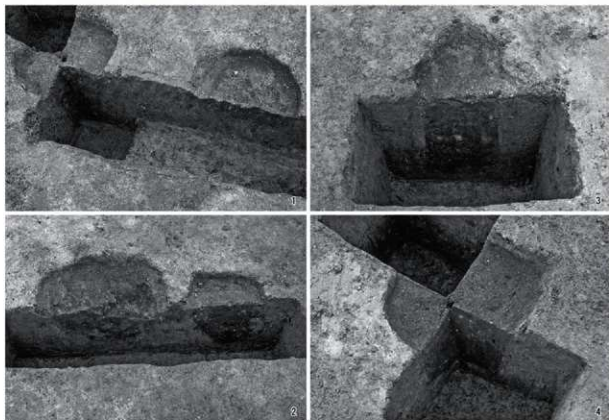


45 61号掘立柱建物跡細部

1 P 1断面（西から） 2 P 2断面（南東から）
 3 P 3断面（南から） 4 P 4断面（北西から）



46 62号掘立柱建物跡全景（南から）

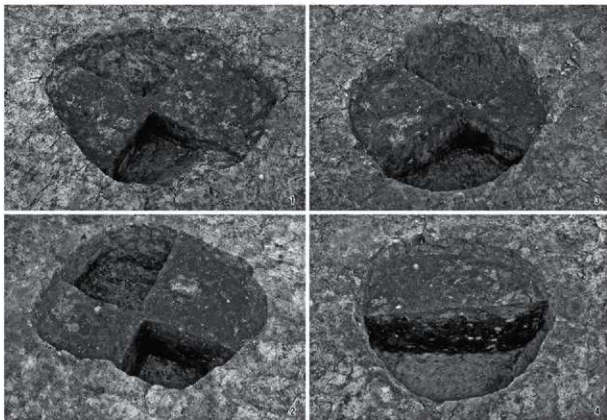


47 62号掘立柱建物跡細部

1 P 3・4断面（南西か+5）
2 P 5断面（南か+5）
3 P 6・7断面（南か+5）
4 P 8断面（北東か+5）

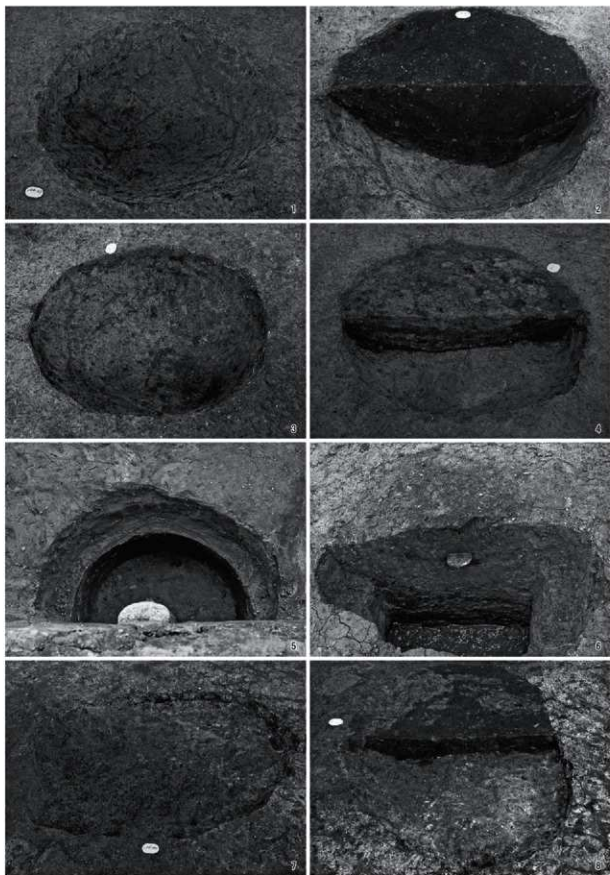


48 63号掘立柱建物跡全景（東から）



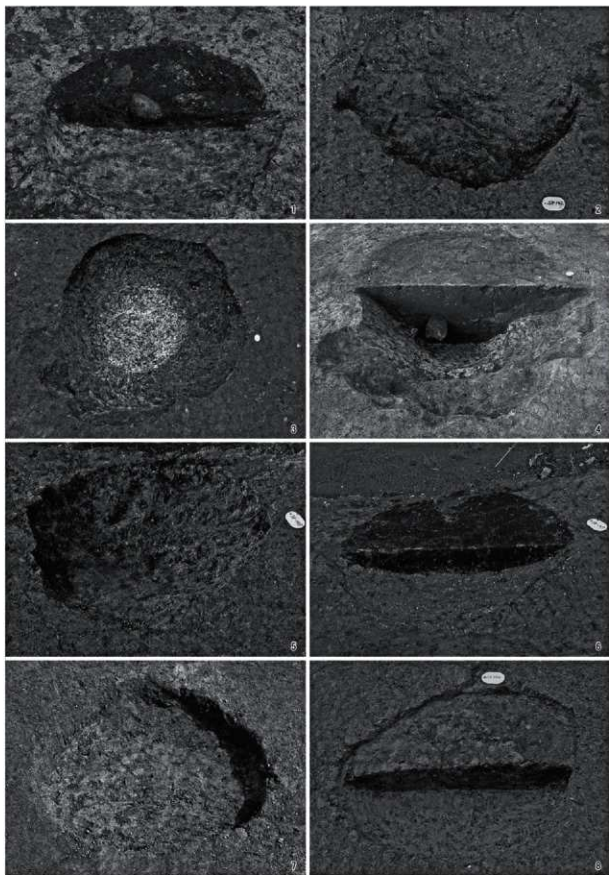
49 63号掘立柱建物跡細部

1 P 1断面（南西から） 2 P 4断面（南西から）
 3 P 5断面（南東から） 4 P 6断面（西から）



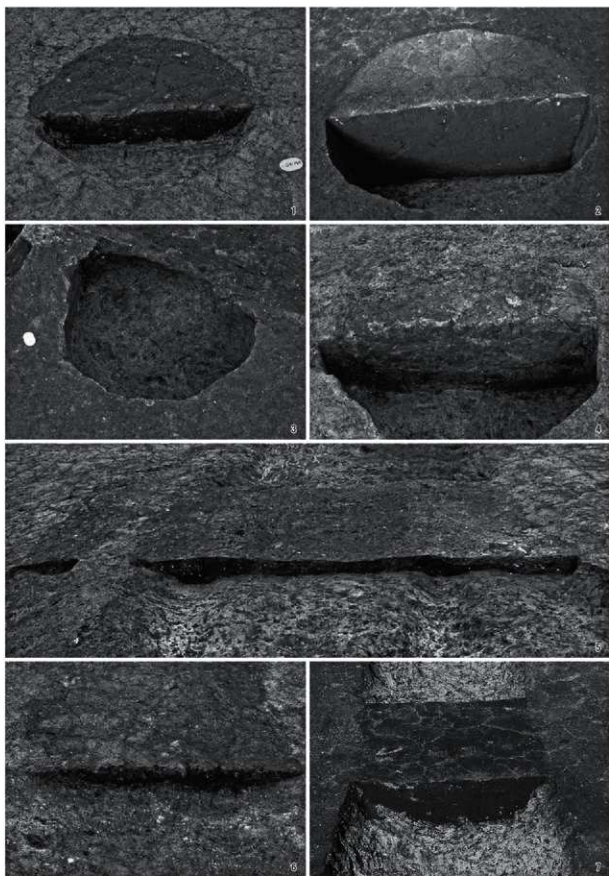
50 137~140号土坑

- | | |
|-----------------------|------------------|
| 1 137号土坑全景 (西北方位) | 2 137号土坑断面 (南方位) |
| 3 138号土坑全景 (南西北方位) | 4 138号土坑断面 (南方位) |
| 5 139号土坑开严时出土状况 (北方位) | 6 139号土坑断面 (南方位) |
| 7 140号土坑全景 (西方位) | 8 140号土坑断面 (南方位) |



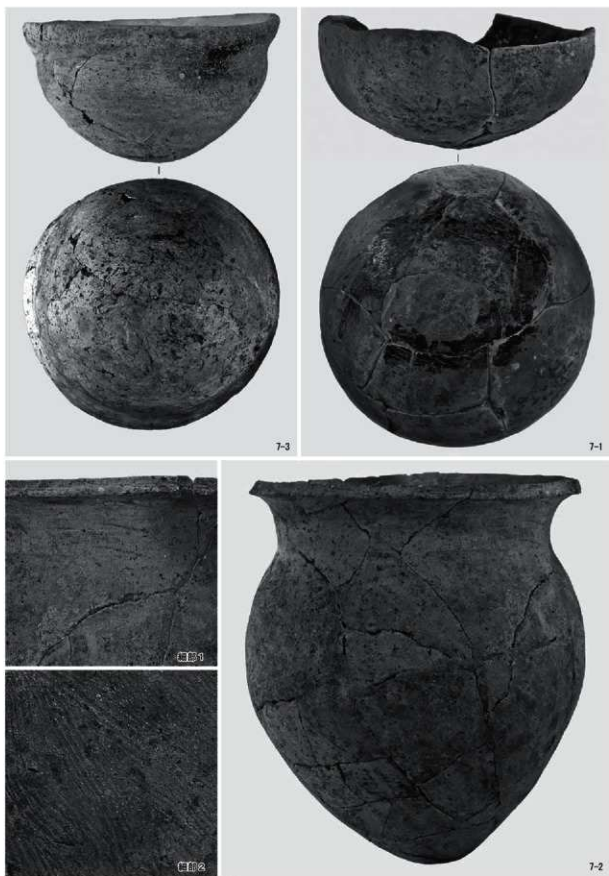
51 141~143・145・146号土坑

- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 141号土坑断面 (南から) | 2 142号土坑全景 (西から) |
| 3 143号土坑全景 (南東から) | 4 143号土坑断面 (南から) |
| 5 145号土坑全景 (南から) | 6 145号土坑断面 (南から) |
| 7 146号土坑全景 (西から) | 8 146号土坑断面 (東から) |

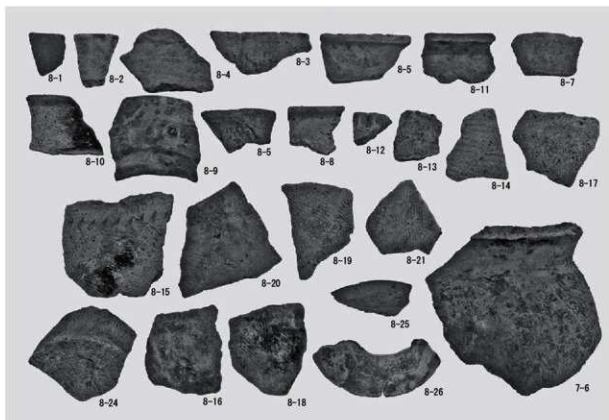


52 144·147·148号土坑, 37·48~50号沟跡

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1 144号土坑断面 (南小・G) | 2 148号土坑断面 (南東小・G) |
| 3 147号土坑全景 (南小・G) | 4 147号土坑断面 (南小・G) |
| 5 37・48号溝跡断面 (東小・G) | 6 49号溝跡断面 (東小・G) |
| | 7 50号溝跡断面 (南東小・G) |



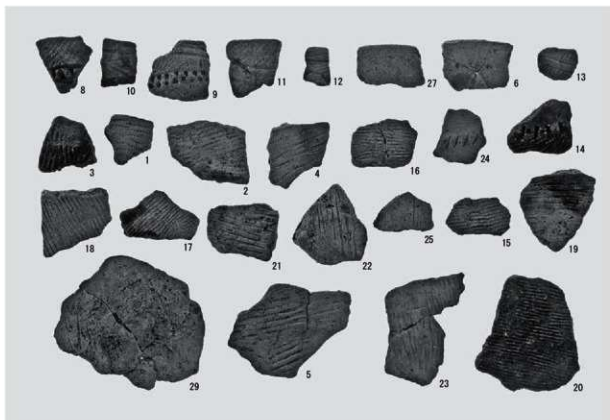
53 100号土坑出土土器 (1) (图7)



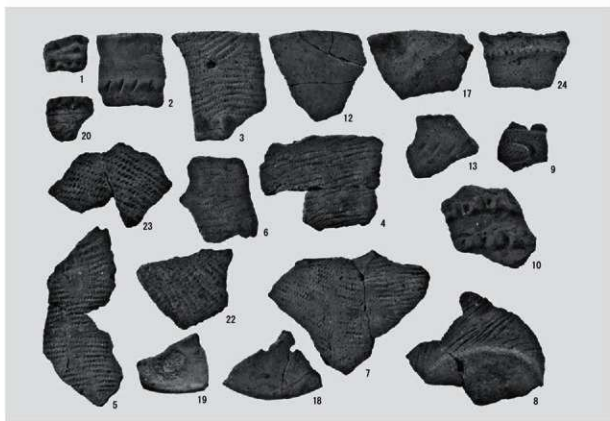
54 100号土坑出土土器(2)(图7·8)



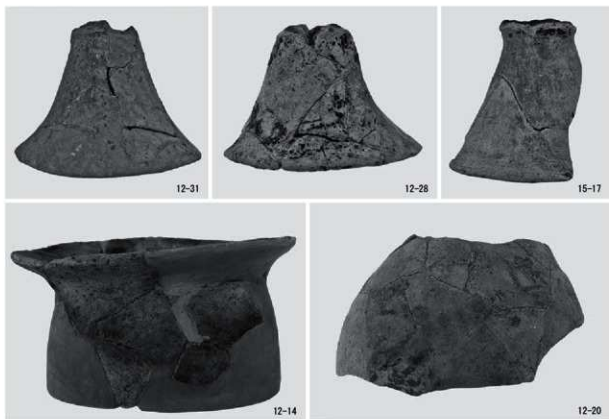
55 103·112·132号土坑出土土器(图10·11)



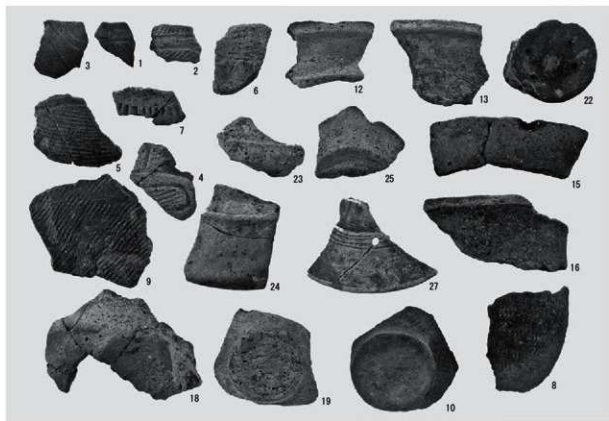
56 103·112号土坑出土土器 (图10)



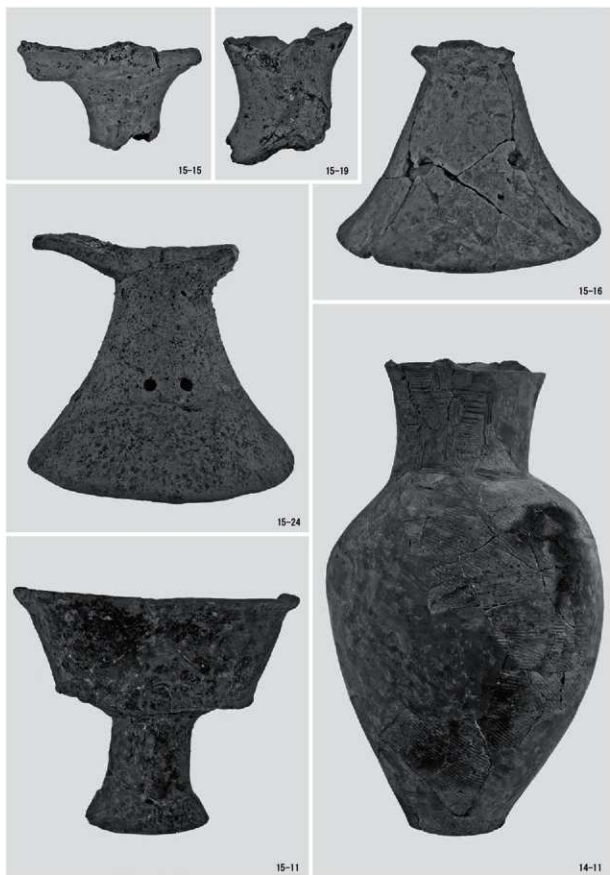
57 122·132·133号土坑出土土器 (图11)



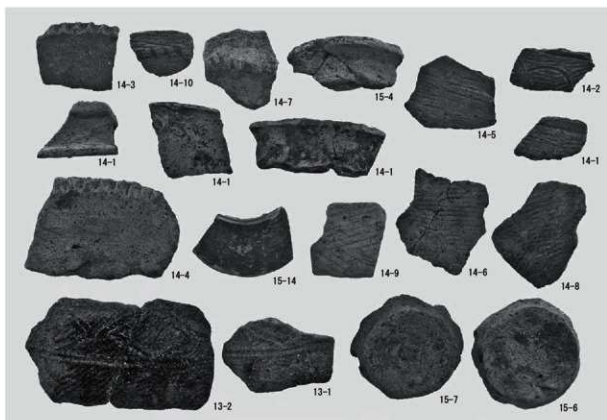
58 41·43号沟跡出土土器 (图12·15)



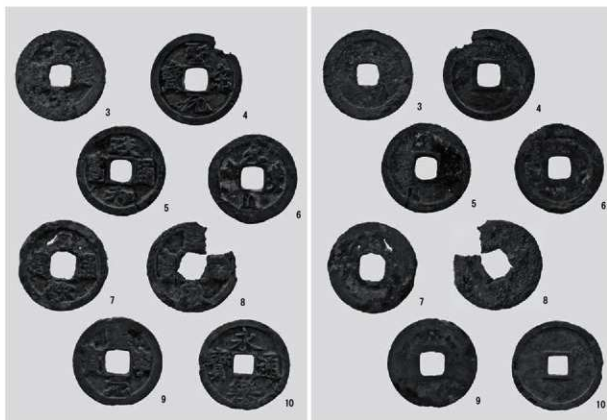
59 43号沟跡出土土器 (图12)



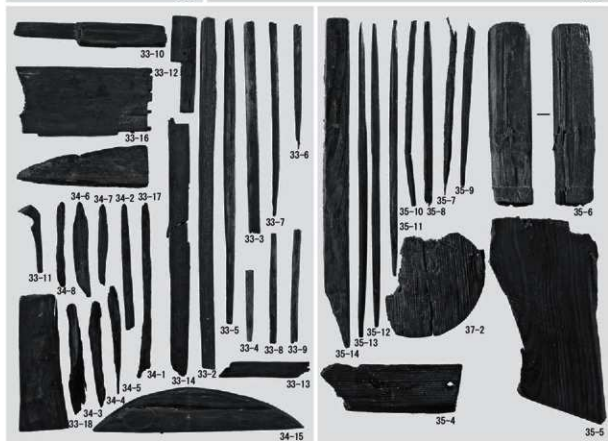
60 北区出土土器 (1) (图14・15)



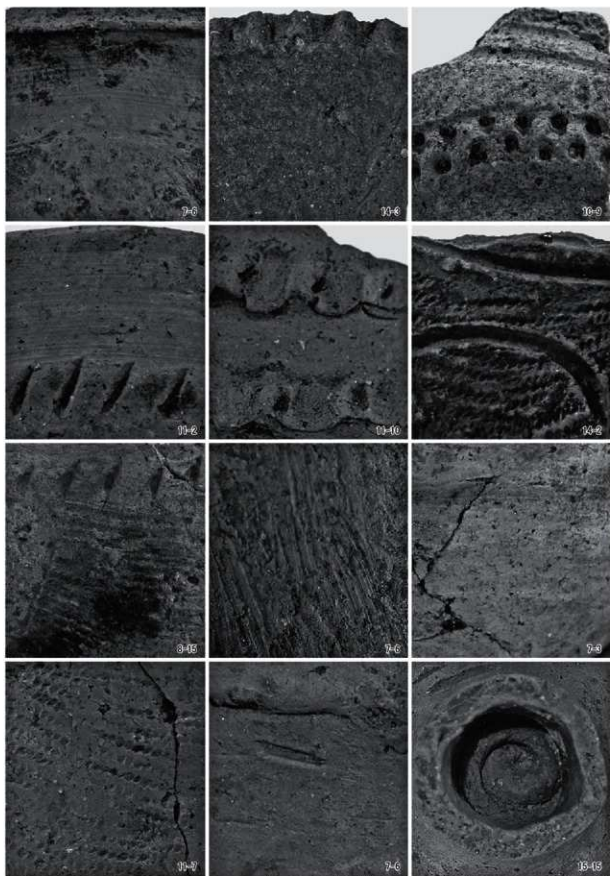
61 北区出土土器 (2) (図13・14・15)



62 渡来銭 (図37) (左表, 右裏)



63 木製品 (図33・34・35・47)



64 出土土器細部

7-6 ⑦7コナデ 14-3 押付キザミ 10-9 刺突・縄文 11-2 ⑩コナデ・キザミ凸帯
 11-10 ツマミアゲ凸帯 14-2 縄文・ヘラ掘北線 8-15 キザミ凸帯・ハケメ
 7-6 ハケメ 7-3 ナデ 11-7 縄文 7-6 ナデ 15-15 高杯脚部充填

付 章

付章1 桜町遺跡から出土した木製品樹種同定

(株) 加速器分析研究所

はじめに

福島県河沼郡湯川村に位置する桜町遺跡から出土した中世の木製品を対象として、木材利用を検討するための樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、中世の木製品60点である。試料の詳細については、結果とともに表示する。

2. 分析方法

剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を直接採取し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレバラートとする。プレバラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する

木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は、針葉樹5分類群(マツ属複雑管束亜属・スギ・サワラ・アスナロ・ヒノキ科)と広葉樹4分類群(ブナ属・コナラ属・コナラ亜属・コナラ節・クリ・ウツギ属)に同定された。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- マツ属複雑管束亜属 (Pinus subgen. Diploxylo n) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エビセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1-10細胞高。

- スギ (Cryptomeria japonica (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

- サワラ (Chamaecyparis pisifera (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～スギ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-10細胞高。

上記スギに似ているが、分野壁孔がヒノキ型を主体とすることからサワラとした。

- アスナロ (Thuopsis dolabrata Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

- ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

上記、サワラやアスナロを含むヒノキ科のいずれかであるが、保存が悪く、同定に重要な分野壁孔の観察ができないために同定できず、ヒノキ科とした。

- ブナ属 (Fagus) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状〜階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織までである。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものとして複合放射組織とがある。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

- ・ウツギ属 (*Deutzia*) ユキノシタ科

試料は小径木で保存状態が悪い。散孔材で、道管は単独で散在している。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1-4細胞幅、40-100細胞高で、鞘細胞が認められる。

4. 考察

木製品は、工具(刀子)、容器(桶・箱・曲物・柄杓)、食器具(折敷・箸)、発火具(火付木)、施設材(井戸枠)、土木材(杭)、その他(板材・樺・角材・加工材・自然木・不明)に分けられる。器種別の種類構成を表2に示す。これらの木製品には、合計9種類が認められ、スギを中心とした針葉樹が多くを占めており、広葉樹が少ない。各木材の材質についてみると、複雑管束亜属は軽軟で加工は容易であるが、保存性が高い。スギ、サワラ、アスナロ、ヒノキ科は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。広葉樹のブナ属は、比較的強度が高いものの、加工が容易であり、保存性は低い。コナラ節とクリは、重硬で強度が高く、加工が困難な部類に入る。ウツギ属は、比較的強度は高いが小径の低木である。

工具、容器、食器具では、全て針葉樹が利用されており、加工性の高い木材が選択されたことが推定される。このうち、箸では14点中12点がスギであり、スギの多用傾向がみられる。一方、点数は少ないが、曲物や柄杓ではスギが認められないことから、器種

によって木材利用が異なっていた可能性がある。

発火具の火付木は、複雑管束亜属8点、スギ1点であり、複雑管束亜属の利用が多い。複雑管束亜属は、松脂を多く含む、燃焼性が高いことから、このことも複雑管束亜属が多く利用されている背景に考えられる。

施設材の井戸枠は、アスナロ、ヒノキ科と広葉樹のコナラ節が利用されており、針葉樹と広葉樹が利用されていたことが推定される。アスナロを含むヒノキ科の木材は耐水性も比較的高いことから、加工性や耐水性が利用の背景に考えられる。一方、コナラ節は、強度が高いことを利用した可能性がある。土木材の杭はクリであり、強度・耐朽性の高い木材を選択したことが推定される。

その他では、板材に針葉樹を主体とした組成が見られ、割裂性が高く、板の加工が容易な木材の利用が推定される。広葉樹のブナ属も1点認められ、針葉樹と共に利用されていたことが推定される。樺、角材、加工材(加工痕のある木材)も針葉樹が利用されており、板材と同様の木材利用が推定される。

自然木は、小径木のウツギ属であった。ウツギ属は、髓が大きく抜けやすいために、中空の木材が得やすい。この特徴を利用して、タケと共に煙管の籬字など、パイプ状の器種に利用される事例が知られている。本道跡でも中空であることを利用した可能性はある。

表1 樹種同定結果

木器No.	試料番号	遺跡名	遺構名	層位	遺物名	時代	樹種
1	1	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	箱	中世	アスナロ
2	2	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	箸	中世	スギ
3	3	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	箸	中世	サワラ
4	4	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	箸	中世	サワラ
5	5	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	箸	中世	スギ
6	6	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	箸	中世	スギ
7	7	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	箸	中世	スギ
9	8	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	箸	中世	スギ
13	9	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	火付木	中世	マツ属復雑管束亜属
17	10	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	火付木	中世	マツ属復雑管束亜属
27	11	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	火付木	中世	マツ属復雑管束亜属
32	12	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	火付木	中世	マツ属復雑管束亜属
33	13	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	火付木	中世	マツ属復雑管束亜属
35	14	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	火付木	中世	マツ属復雑管束亜属
36	15	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	火付木	中世	マツ属復雑管束亜属
42	16	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	板材(Na43同一)	中世	ヒノキ科
43	17	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	板材	中世	ヒノキ科
44	18	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	折敷の側板	中世	サワラ
46	19	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	板材	中世	サワラ
48	20	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	板材	中世	スギ
52	21	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	板材	中世	アスナロ
57	23	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	板材	中世	ヒノキ科
58	24	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	板材	中世	ヒノキ科
59	25	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	折敷の端	中世	サワラ
61	26	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	角材	中世	アスナロ
63	28	桜町遺跡(3次)	SK120	ε3	不明	中世	マツ属復雑管束亜属
64	29	桜町遺跡(3次)	SK120	ε7	板材	中世	ブナ属
65	30	桜町遺跡(3次)	SK120	ε7	板材	中世	スギ
66	31	桜町遺跡(3次)	SK120	ε7	板材	中世	アスナロ
69	32	桜町遺跡(3次)	SK120	ε7	曲げ物底	中世	サワラ
71	33	桜町遺跡(3次)	SK120	ε7	火付木	中世	マツ属復雑管束亜属
74	34	桜町遺跡(3次)	SK120	ε7	不明	中世	コナラ属コナラ亜属コナラ節
75	35	桜町遺跡(3次)	SK118	ε1	桶	中世	スギ
76	36	桜町遺跡(3次)	SK118	ε1	加工痕のある木	中世	スギ
77	37	桜町遺跡(3次)	SK118	ε1	加工痕のある木	中世	スギ
78	38	桜町遺跡(3次)	SK118	ε1	加工痕のある木	中世	スギ
79	39	桜町遺跡(3次)	SK118	ε1	加工痕のある木	中世	スギ
80	40	桜町遺跡(3次)	SK118	ε1	棒	中世	ヒノキ科
81	41	桜町遺跡(3次)	SK119	ε2	板材	中世	ヒノキ科
82	42	桜町遺跡(3次)	SK119	ε2	板材	中世	スギ
83	43	桜町遺跡(3次)	SK119	ε2	板材	中世	スギ
87	45	桜町遺跡(3次)	SK125	下層	桶	中世	スギ
88	46	桜町遺跡(3次)	SK113	ε1	箸	中世	スギ
89	47	桜町遺跡(3次)	SK113	ε1	箸	中世	スギ
90	48	桜町遺跡(3次)	SK113	ε1	箸	中世	スギ
91	49	桜町遺跡(3次)	SK113	ε1	火付木	中世	スギ
97	50	桜町遺跡(3次)	SK66	下層	曲物	中世	サワラ
99	51	桜町遺跡(3次)	SK130	ε1	板材	中世	スギ
102	52	桜町遺跡(3次)	SK139	底面	井戸枠	中世	アスナロ
105	55	桜町遺跡(3次)	CS-E4 P7	最下層	杭	中世	タリ
106	56	桜町遺跡(3次)	SK149	下層	納約	中世	アスナロ
107	57	桜町遺跡(3次)	SK149	下層	箸	中世	スギ
108	58	桜町遺跡(3次)	SK149	下層	箸	中世	スギ
109	59	桜町遺跡(3次)	SK149	下層	箸	中世	スギ
110	60	桜町遺跡(3次)	SK149	下層	箸	中世	スギ
113	61	桜町遺跡(3次)	SK149	下層	自然木	中世	ラウギ属
114	62	桜町遺跡(3次)	SK139	ε4	井戸枠	中世	ヒノキ科
115	63	桜町遺跡(3次)	SK139	ε4	井戸枠	中世	コナラ属コナラ亜属コナラ節
116	64	桜町遺跡(3次)	SK115	下層	刀子の柄	中世	サワラ
121	65	桜町遺跡(3次)	SK124	下層	箱	中世	マツ属復雑管束亜属

表2 器種別種類構成

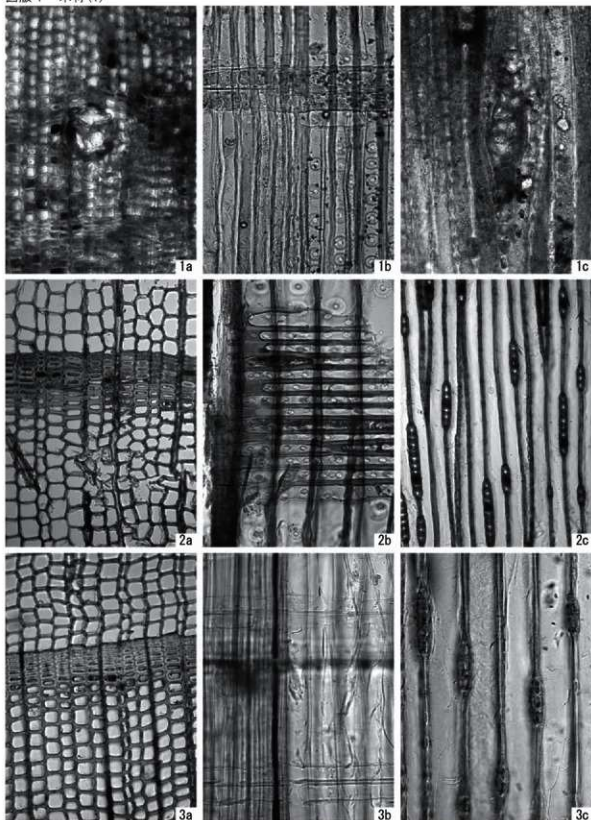
分類群\器種	工具			容器		食事具			発火	施設	土木		その他				合計		
	刀子	桶	箱	曲物	柄杓	煎敷	箸	火付	井戸	本杭	板材	棒	角材	加工材	自然木	不明			
	柄	側板	不明	底板	不明	頭	側板	端	-	-	-	-	-	-	-	-			
針葉樹																			
産権管束部属				1												1	10		
スギ		2						12	8			4			4		24		
サワラ	1			1	1		1	1	2	1		1					8		
アスナロ			1			1					1	2		1			6		
ヒノキ科										1		5	1				7		
広葉樹													1				1		
ブナ属																	1		
コナラ属										1							2		
クリ													1				1		
ウツギ属											1						1		
合計	1	2	2	1	1	1	1	1	14	9	3	1	13	1	1	4	1	3	60

引用文献

林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
 Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・

佐野 雄三・安部 久・内海 泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004)IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].
 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
 Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
 ※) 本分析は,パリオ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

図版1 木材(1)



1. マツ属複維管束垂属(試料番号33)

2. スギ(試料番号45)

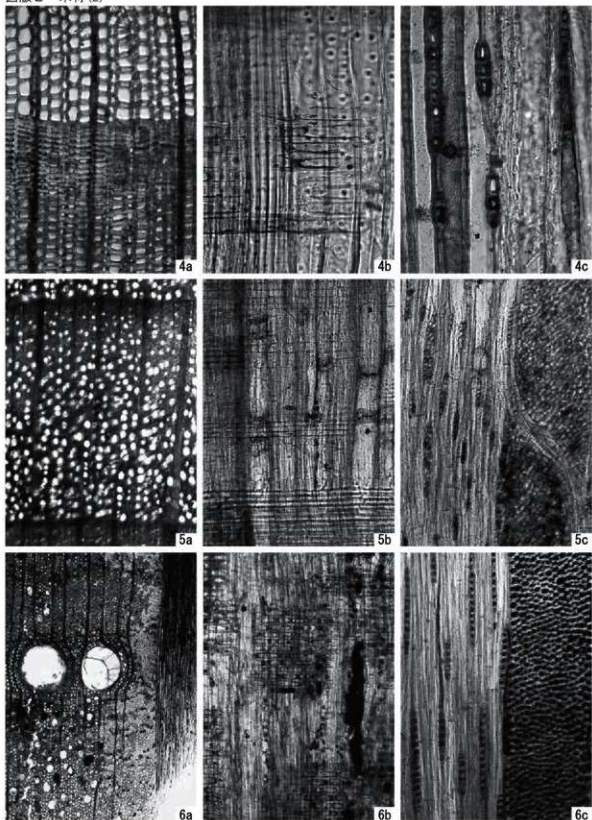
3. サワラ(試料番号50)

a: 木口, b: 年輪, c: 板目

200 μm: a

100 μm: b, c

図版2 木材(2)



4. アスナロ (試料番号56)

5. フナ属 (試料番号29)

6. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (試料番号34)

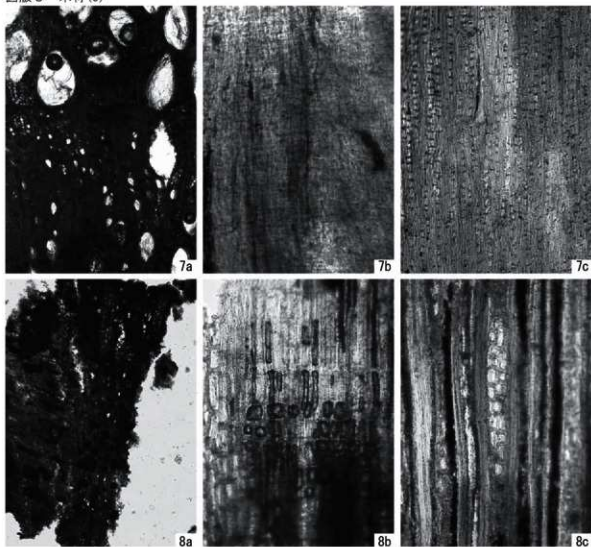
a: 木口, b: 径目, c: 板目

500 μ m: 5-6a

200 μ m: 4a, 5-6b, c

100 μ m: 4b, c

図版3 木材(3)



7. クリ(試料番号55)

8. ウツギ属(試料番号61)

a: 木口, b: 径目, c: 板目

500 μ m: a
200 μ m: b, c

付章 2 桜町遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定について

(株) 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

桜町遺跡(3次)の測定対象試料は、120号土坑出土種子(梅)(22:IAAA-102998)、漆の塊?(27:IAAA-102999)、123号土坑出土貝(44:IAAA-103000)、100号土坑出土土器付着漆(53:IAAA-103001)、グリッドピット出土土器付着炭化物(54:IAAA-103002)、149号土坑出土木片(61:IAAA-103003)、118号土坑出土木片(40:IAAA-103004)、119号土坑出土木片(42:IAAA-103005)、113号土坑出土木片(49:IAAA-103006)、66号土坑出土木片(50:IAAA-103007)、130号土坑出土木片(51:IAAA-103008)、C5-E4 P7出土木片(55:IAAA-103009)、139号土坑出土木片(63:IAAA-103010)、115号土坑出土木片(65:IAAA-103011)、124号土坑出土木片(66:IAAA-103012)の合計15点である(表1)。66号、113号、115号、118号、119号、120号土坑、123号、124号、130号、139号、149号土坑は井戸跡と見られ、100号土坑も井戸跡の可能性が考えられている。貝44は、貝殻表面の膜状物質のみが残存したものである。土器付着漆53は土器破片外面全体に付着した漆を採取、土器付着炭化物54は付着物の量が少ないため、土器の内・外面より採取した。40は棒、42は板材、49は火付け木、50は曲物、55は柱材、63は井戸杵、65は刀子の柄、66は箱と見なされた木製品から採取された木片である。

2. 測定の意義

考古遺物がきわめて少ないために、それぞれの遺構の時期特定が困難であることから、14C年代測定法を用いて時期を特定する。

3. 化学処理工程

- (1) 種子、漆?、土器付着漆、土器付着炭化物、木片の化学処理
- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、

超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

(2) 貝の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い根・土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用い、表1に「HCl」と記載する。

以下、(1)3)以降と同じ。

4. 測定方法

3MVタンデム加速器(NEC Pelletron 9SDH-2)をベースとした14C-AMS専用装置を使用し、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOxII)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) δ13Cは、試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置に

より測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

- (2) 14C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大气中14C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。14C年代は $\delta^{13}C$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。14C年代と誤差を、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、14C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の14C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の14C濃度の割合である。pMCが小さい(14Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(14Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}C$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年校正年代とは、年代が既知の試料の14C濃度を元に描かれた校正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年校正年代は、14C年代に対応する校正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が14C年代、横軸が暦年校正年代を表す。暦年校正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}C$ 補正を行い、下1桁を丸めない14C年代値である。なお、校正曲線および校正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年校正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、OxCalv4.1校正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。なお、試料44 (IAAA-103000)の貝の種類は未同定であるため、海産の貝である場合を考慮してMarine09データベース(Reimer et al. 2009)を用いた暦年校正も

あわせて行った。暦年校正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年校正年代は、14C年代に基づいて校正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6. 測定結果

試料の14C年代は、120号土坑出土種子(梅)22が 290 ± 30 yrBP、漆の塊?27が 290 ± 30 yrBP、123号土坑出土貝44が 920 ± 20 yrBP、100号土坑出土土器付着漆53が 2010 ± 30 yrBP、グリッドピット出土土器付着炭化物54が 380 ± 20 yrBP、149号土坑出土木片61が 620 ± 20 yrBP、118号土坑出土木片40が 870 ± 30 yrBP、119号土坑出土木片42が 860 ± 30 yrBP、113号土坑出土木片49が 600 ± 30 yrBP、66号土坑出土木片50が 810 ± 20 yrBP、130号土坑出土木片51が 710 ± 30 yrBP、C5-E4 P7出土木片55が 280 ± 20 yrBP、139号土坑出土木片63が 1170 ± 30 yrBP、115号土坑出土木片65が 880 ± 20 yrBP、124号土坑出土木片66が 160 ± 20 yrBPである。120号土坑23出土の22と27はほぼ同年代を示している。

暦年校正年代(1σ)は、22が1523~1648cal ADの間に2つの範囲、27が1523~1648cal ADの間に2つの範囲、53が42cal BC~20cal ADの範囲、54が1452~1616cal ADの間に3つの範囲、61が1299~1392cal ADの間に3つの範囲、40が1157~1214cal ADの範囲、42が1164~1213cal ADの範囲、49が1311~1400cal ADの間に2つの範囲、50が1218~1257cal ADの範囲、51が1271~1291cal ADの範囲、55が1527~1655cal ADの間に2つの範囲、63が782~937cal ADの間に3つの範囲、65が1155~1215cal ADの範囲、66が1670~1944cal ADの間に4つの範囲で示される。44は、IntCal09を用いた場合が1045~1158cal ADの間に3つの範囲、Marine09を用いた場合が1412~1452cal ADの範囲となる。53は弥生時代中期から後期頃、他は各々古代以降に相当する年代値となっている。44の校正年代については、貝の種類など試料の特徴を確認した上で検討する必要があるが、ここでは参考として2種類の算出結果を併記した。

試料の炭素含有率は種子22、漆の塊?27、木片10点はすべて50%弱以上であるが、土器付着漆53が約

42%, 土器付着炭化物54が約30%とやや低い値となった。貝44は約41%である。化学処理、測定上の問題は特に認められない。

表1

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-102998	22	120号土坑 ⅴ3	種子 (梅)	AAA	-25.86±0.40	290±30	96.40±0.30
IAAA-102999	27	120号土坑 ⅴ3	漆の塊?	AAA	-29.55±0.42	290±30	96.40±0.31
IAAA-103000	44	123号土坑 最下層	貝	HCl	-26.51±0.58	920±20	89.19±0.27
IAAA-103001	53	100号土坑 底面	土器付着漆	AaA	-29.96±0.64	2,010±30	77.87±0.26
IAAA-103002	54	グリッドピット 覆土	土器付着炭化物	AaA	-28.93±0.52	380±20	95.38±0.29
IAAA-103003	61	149号土坑 下層	木片	AAA	-26.36±0.56	620±20	92.54±0.28
IAAA-103004	40	118号土坑 ⅴ1	木片	AaA	-26.49±0.43	870±30	89.70±0.29
IAAA-103005	42	119号土坑 ⅴ2	木片	AaA	-26.69±0.53	860±30	89.82±0.29
IAAA-103006	49	113号土坑 ⅴ1	木片	AaA	-25.24±0.57	600±30	92.84±0.30
IAAA-103007	50	66号土坑 下層	木片	AAA	-24.04±0.63	810±20	90.39±0.28
IAAA-103008	51	130号土坑 ⅴ1	木片	AaA	-24.17±0.62	710±30	91.53±0.30
IAAA-103009	55	C5-E4 P7 最下層	木片	AaA	-28.30±0.59	280±20	96.59±0.29
IAAA-103010	63	139号土坑 ⅴ4	木片	AAA	-25.95±0.65	1,170±30	86.48±0.29
IAAA-103011	65	115号土坑 下層	木片	AaA	-24.33±0.53	880±20	89.67±0.27
IAAA-103012	66	124号土坑 下層	木片	AAA	-27.40±0.45	160±20	98.05±0.30

[#4154]

表2 (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102998	310±20	96.23±0.29	294±25	1523calAD - 1573calAD (48.2%) 1630calAD - 1648calAD (20.0%)	1496calAD - 1505calAD (1.5%) 1512calAD - 1602calAD (64.9%) 1616calAD - 1656calAD (29.0%)
IAAA-102999	370±30	95.50±0.29	294±25	1523calAD - 1573calAD (48.2%) 1630calAD - 1648calAD (20.0%)	1496calAD - 1505calAD (1.5%) 1512calAD - 1602calAD (64.9%) 1616calAD - 1656calAD (29.0%)
IAAA-103000	940±20	88.92±0.25	918±24	1045calAD - 1095calAD (42.1%) 1120calAD - 1141calAD (17.8%) 1148calAD - 1158calAD (8.3%)	1031calAD - 1176calAD (95.4%)
IAAA-103000	940±20	88.92±0.25	918±24	1412calAD - 1452calAD (68.2%)*	1355calAD - 1371calAD (2.3%)* 1382calAD - 1474calAD (93.1%)*
IAAA-103001	2,090±30	77.08±0.24	2,009±27	42calBC - 20calAD (68.2%)	89calBC - 75calBC (2.2%) 56calBC - 63calAD (93.2%)

表2 (2)

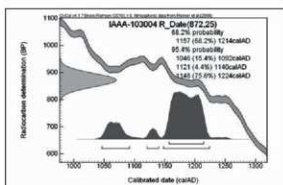
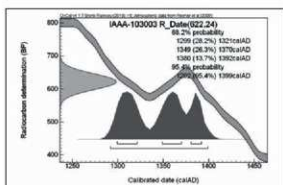
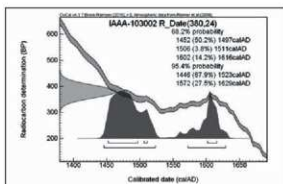
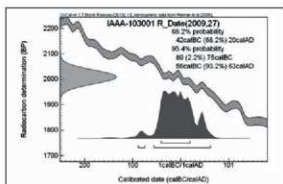
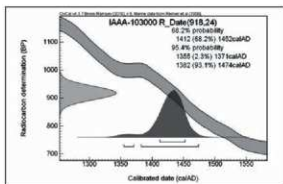
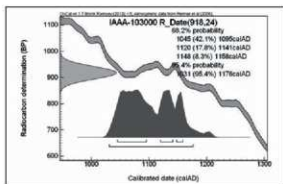
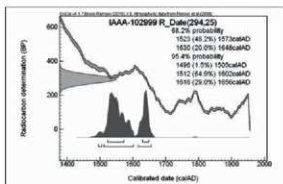
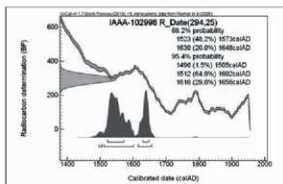
測定 番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-103002	440 \pm 20	94.61 \pm 0.27	380 \pm 24	1452calAD-1497calAD (50.2%) 1506calAD-1511calAD (3.8%) 1602calAD-1616calAD (14.2%)	1446calAD-1523calAD (67.9%) 1572calAD-1629calAD (27.5%)
IAAA-103003	650 \pm 20	92.28 \pm 0.26	622 \pm 24	1299calAD-1321calAD (28.2%) 1349calAD-1370calAD (26.3%) 1380calAD-1392calAD (13.7%)	1292calAD-1399calAD (95.4%)
IAAA-103004	900 \pm 30	89.43 \pm 0.28	872 \pm 25	1157calAD-1214calAD (68.2%)	1046calAD-1092calAD (15.4%) 1121calAD-1140calAD (4.4%) 1148calAD-1224calAD (75.6%)
IAAA-103005	890 \pm 20	89.51 \pm 0.27	862 \pm 25	1164calAD-1213calAD (68.2%)	1051calAD-1082calAD (7.7%) 1125calAD-1136calAD (1.6%) 1151calAD-1253calAD (86.1%)
IAAA-103006	600 \pm 20	92.80 \pm 0.28	596 \pm 25	1311calAD-1360calAD (54.4%) 1387calAD-1400calAD (13.8%)	1299calAD-1370calAD (71.1%) 1380calAD-1410calAD (24.3%)
IAAA-103007	800 \pm 20	90.57 \pm 0.25	811 \pm 24	1218calAD-1257calAD (68.2%)	1182calAD-1269calAD (95.4%)
IAAA-103008	700 \pm 20	91.68 \pm 0.27	711 \pm 25	1271calAD-1291calAD (68.2%)	1261calAD-1300calAD (89.8%) 1368calAD-1382calAD (5.6%)
IAAA-103009	330 \pm 20	95.94 \pm 0.26	278 \pm 24	1527calAD-1556calAD (32.8%) 1632calAD-1655calAD (35.4%)	1519calAD-1594calAD (49.6%) 1618calAD-1665calAD (45.2%) 1788calAD-1792calAD (0.6%)
IAAA-103010	1,180 \pm 30	86.31 \pm 0.27	1,166 \pm 27	782calAD - 790calAD (4.8%) 809calAD - 895calAD (57.1%) 925calAD - 937calAD (6.4%)	777calAD - 900calAD (77.3%) 917calAD - 965calAD (18.1%)
IAAA-103011	860 \pm 20	89.79 \pm 0.26	875 \pm 24	1155calAD - 1215calAD (68.2%)	1047calAD - 1089calAD (16.8%) 1121calAD - 1140calAD (4.8%) 1149calAD - 1221calAD (73.8%)
IAAA-103012	200 \pm 20	97.56 \pm 0.28	158 \pm 24	1670calAD - 1690calAD (12.6%) 1730calAD - 1780calAD (35.6%) 1798calAD - 1810calAD (7.7%) 1925calAD - 1944calAD (12.3%)	1665calAD - 1706calAD (16.5%) 1721calAD - 1785calAD (39.3%) 1795calAD - 1819calAD (10.7%) 1832calAD - 1880calAD (10.3%) 1915calAD - 1953calAD (18.6%)

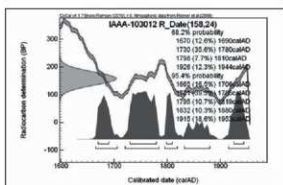
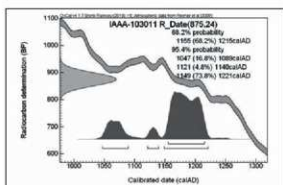
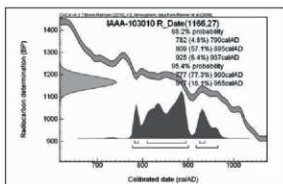
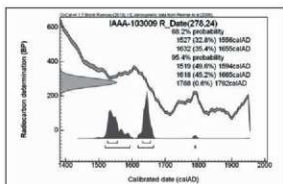
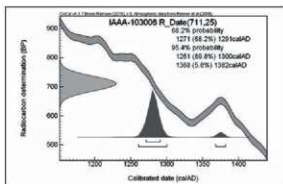
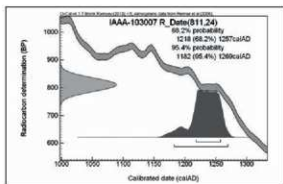
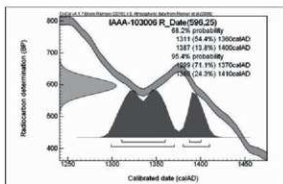
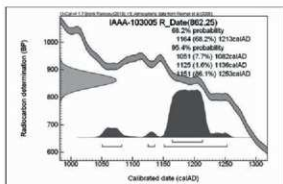
* OxCal v4.1.7 Bronk Ramsey (2010)にて Marine09 marine curve (Reimer et al 2009)を使用し、 $\Delta R=0$, marine100%で校正

文 献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150





【参考】 暦年校正年代グラフ

報告書抄録

ふりがな	あいづじょうかんきただうろいせきはつくつちょうさほうこく11							
書名	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告11							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第481集							
編著者名	福島 雅儀 福田 秀生 三浦 武司 大野 淳史							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査課 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	2011年12月16日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	村遺跡番号					
桜町 (3次)	福島県河沼郡 湯川村大字桜町 他 干刈	422	00030	37°33′07″	139°54′03″	2010年4月19日 ～	11,000㎡	会津縦貫北道路 の建設に伴う事前 調査
						2010年11月19日		
所収遺跡名	種類	主な時代			主な遺構		主な遺物	特記事項
桜町 (3次)		弥生時代			掘立柱建物跡 16棟		弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 木製品など	桜町遺跡は会津盆地のほぼ中 央部に位置する。 今回の3次調査では、平安時 代の掘立柱建物跡の集落跡と中 世の集落跡を調査した。
		平安時代			土坑 41基			
		中世・近世			溝跡 14条			
要約	桜町遺跡3次調査では、中世後半の集落跡を確認した。一辺50mほどの方形区画内に囲まれた集落跡である。集落内には掘立柱建物跡が数棟、井戸跡が約30基確認した。井戸跡からは曲物や箸などの木製品が出土した。会津盆地の中世集落の姿を示す具体的な資料となる。							

※緯度数値は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による。

福島県文化財調査報告書第481集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告11

桜町遺跡(3次)

平成23年12月16日発行

編集 発行	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部	(〒960-8688) 福島市杉妻町2-16
	福島県教育委員会	
印刷	財団法人福島県文化振興事業団	(〒963-0111) 郡山市安積町荒井字丈内28-1
	国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所	(〒965-0053) 会津若松市町北町上荒久田字鈴木163